

569-142



1200501517517

569

142

庫文造改

篇三百三第 部二第

航

密

篇二他

著イポリフ・フコギノ

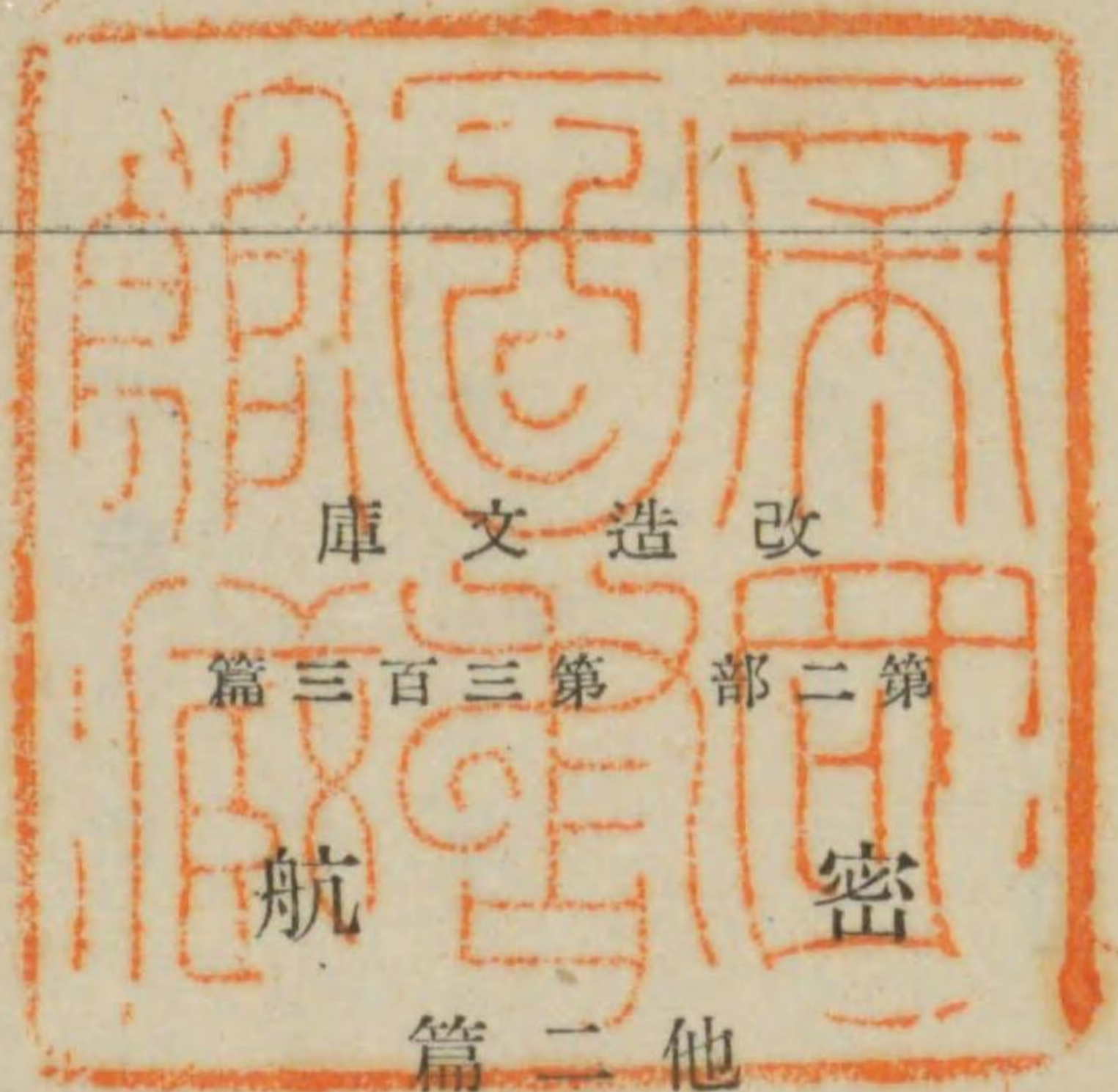
譯 肇 井 平

〇
複
写

版出社造改



納本



改造文庫

第二部 第三十三篇

航

密

他二篇

著イポリプ・フコギノ

譯肇井平



改造社出版



目 次

悪魔の沼……………	死刑の因……………	密航……………	まへがき……………
一一一	九七	七	三

目 次





場末によくある、見窄らしく薄穢い、みじめな居酒屋だ。天井は黝み、壁紙がところどころやぶれて、べらべらと下へ垂れさがつてゐる。そここに下卑た繪畫が眼につく。片隅には、指針の折れた古い大きな時計が退屈さうにチクタクと音を立ててゐる。二つ三つのテーブルには、辻馬車屋だの、小商人だの、労働者だのが坐つてゐる。フウフウ息を吹きかけながら、受皿から熱いお茶を騒々しい音を立てて啜つてゐるのもあれば、ウオッカをひつかけては、ガツガツ前菜を平げてゐるものもある。糊の蔭では、棒縞更紗のシャツに、脂じみた脊廣を著こんだ禿頭の、肥つた番頭が肘杖をついて、こくりこくり居眠りをしてゐる。

むつとするやうな人いきれと、焼玉葱や饅えた食べ物やウオッカの臭ひが、ツンと鼻をつく。頭の上には烟草のけむりが雲のやうにたちこめて、ねむさうで、妙に氣の無ささうなおきまり文句がぼそぼそと續けられてゐる。時たま誰かが鋭く罵り聲をあげることがあつても、それは本當に腹が立つたためではなく、たださういふ口癖が出たのにすぎないのである。思想にしても、希望にしても、すべてがもう考へつくされ、語りつくされて、既に千度も決定してゐるこ

となのである。

人生は、ちやうどあの、指針の折れた時計の動きと同じやうに、無意味なものである。我慢のならない退屈さだ。

おれは他の連中とは反対がはの、隅のテーブルによりかかつてゐた。おれの前には半ば空になつたビール罎が立つてゐた。おれはもう二時間もかうして坐つたまま、はて、この市からいつたい何處へ落ちのびたものかな……と、とつおいつ、その一つのことを思案を廻らしてゐるのだつた。

もうこれ以上この市に滞在することは出来ない。仲間をみな捕げられてしまつた。おれのことともその筋には知れ渡つて、到るところに捜査の網が張りめぐらされてゐるのだ。それを潜りぬけるやうにして、おれはもう何週間も、この市を端から端へと、まるで追ひつめられた野獸のやうに逃げまはつてゐるのだ。旅券もおつ落してしまつて、もう新らしく手に入れる方法がない。

全くおれは、身のおきどころもなく、天と地との間に曝されてゐるのだ。なるほど二人三人、むかしからの知りあひが無いでもないが、今おれが顔でも出さうものなら、奴等は自分の身の安泰をおびやかされて身ぶるひをすることだらう。ひよつとすると、おれをそれと察知した者

もあるだらう。それやこれやで、俺は夜ごとに普請中の建物の中や、橋の下に塀かべを求めなければならぬのだ。時には往來をほつつきまはりながら夜を明かすことさへある。ほとほと疲れ果ててしまった。見る人の顔が、どれもこれも刑事に見えてならない。

何處かへ落ちのびて、少しは息ぬきをしたり、身のまほりを顧みなくつちやならない。

しかし……おれのポケットにはもう六ルーブリしかない……。

だが、何よりも今おれを脅かしてゐるのは、今夜もまた寒さにぶるぶる震へながら、おつかなびつくりであたりを見まはしたり、われと我が影におびえながら、街から街をほつつき廻らなければならぬことだ。それに、持つてゐる金ももうぢきになくなる――。

その時は一體どうなるのだ？……

壓しつけられるやうな、頼りない、いやな氣持ちだ。こんな生き方はとても駄目だ。これはまるでパツクリ大口をあけて待つてゐる奈落の上へ腐り繩でぶらさげられ、ゆすぶられてゐるやうなもので、いつ何どき奈落の底へ轉落して、木葉微塵にならないとも限らないのだ。

かうした、おれの物思ひは、ちやうどその時、酒場へ入つて來た二人の男のために中斷された。その二人はおれと並びのテーブルについて、ウオッカの小櫃を一本と、腸詰つきのオムレツを注文した。所在のないおれの注意は彼等の上へ向けられた。

その一人は年のころ二十八くらゐの壯漢で、脊も高く、がっちりとした、筋骨のたくましい男だ。大きなまるまるした頭が短い頸の上へどつしりと乗つかつて、亞麻いろのシャリシャリした髪の毛もぢやもぢやともつれてゐる。だだつ廣い紋切型のロシア式の顔は不精ひげに蔽はれて、生活の苦勞の跡が刻みつけられてゐる。しかしその灰いろの眼は、ほがらかで自信に充ちたまなざしを投げけてゐる。音聲もどつしりして、海氣をふんだんに吸収したやうな潤ひを含んでゐる。

その相棒はまたそれとは反對に小柄で瘦せぎすな男で、その動作の一つ一つにいぢけたやうなところが見える。

初めの男はコップにウオッカをなみなみと注ぐと、人の好きさうな笑ひを浮かべながら、相棒の肩をたたいて、

「さあ、グリーンシャトク、一杯あげようぜ。いよいよロシアの酒の飲みをさめだよ。一週間たちやあイギリスのウイスキーにありつけやうつてやつさ。」

「おいらたちの航海の仕合せのためにな！」と、グリーンシャトクがばつをあはせた。

二人の會話のすすむにつれて、おれには、彼等がマドロスで、さる商船の火夫だといふことがわかつて來た。で、おれは尙その談話に聴き耳をたてた。

「おやおや、奴等は明日ロンドンへむけて出港するのだぞ！　ひとつ奴さんたちに頼みこんでイギリスへ連れて行つて貰ふかな——さういふ短い考へがピンとおれの頭をかすめた。」

ちよつとの間、こちらの心の動揺を見せまいとして、おれは外方へ視線をそらした。すつかり打ちひしがれて困憊しきつたおれは、これ以上ロシアにゐたつて何も出来やしないのだ。もし、この連中が手引をしてくれさへしたら、いつそ外國へ行つてやらう。外國人の生活を見ながら、しばらく體を休めるのも悪くはないぞ……。

ちやうど霧にかすんだ遠景を眺めてゐるやうに、まだ見たこともないいろいろの珍奇なものに充ちあふれた新しい生活が、手招きでもしてゐるやうに、おれの空想の中に浮かびあがつて來た。

「どんな風に彼等に話しかけたものだらう？」

「さて何から切り出したものかしら？」

「念には念をいれて、やりそこなはないやうにしくつちやあ駄目だ！——そんな警戒の念が浮かぶ。『なあに大丈夫だ！　おれは自分自身もマドロスだから、同じ仲間に話しかける術はちやんと心得てゐらあ。何はさて、輕口をたたくに限るて。』」

「船から來なすつたのだね、きやうでえ？」

「ちやうよ。」と、がつちりした方がおれに答へた。それは、後で知つたのだが、トロフィーモフといふ男だつた。

「どうやら、地獄で亡者の役を務めてゐなさるやうだね。」

「お察しのとほりなんで、ところでお前さんはどういふ方なんだね？」

「北東風の暴風をくらつて、すつかり難破れた御本尊でさあ。舵も羅針盤もなくしちやつてね、風のまにまに浮世の荒波に揉まれてゐるつてえ奴で、ひよつくらこの港へ漂着したてえ次第でさあ。すこし息つきをしたら、また暗礁の間を、向ひ風の難航を始めなきあなんねえんでさあ。いよいよ最後のどんづまりになるまではね……。」

「するてえと、やつぱりマドロスだつて言ひなさるんだね？」と、おれの言葉を遮つてグリーンシャツクが訊ねた。

「でなくつてさ！　船にはまる七年も乗つてたからね、すつかり鹽がまはつて、土ん中に百年埋まつてたつて腐りつこなしでさあ。」

トロフィーモフは物好きさうに、おれを眺めまはした。それから、まるで豫審判事みたいに、根ほり葉ほり、どこへ航つただの、どんな持場を勤めたのだと、質問の矢を浴びせだした。彼の問ひに答へながら、おれは會話の中へちよいちよいマドロスの言葉を挿しはさんだものだ。

「なるほど、さうきけばお前さんは船乗りにちげえねえ。」と、やがて大きく笑ひながら、彼が言つた。

「さういふことなら、ひとつ、こつちのテーブルへ來なせえよ、いつしよに一杯やらうぢやねえか……。」

そこで、ウオッカを一杯づつ乾杯した。

どうやら、この二人はおれに好意をもつてゐるやうだ。で、おれは早速、彼らの船にはお客を乗せることができないかどうかと訊ねてみた。

するとトロフィーモフは直ぐに、おれの話の目的を見ぬいた。

「して、お前さんの名前は何ていふんだね？」と、彼は聲をおとして、おれの顔を覗きこみながら訊ねた。

「町寧にいやあ、ドミトリイつといふんで。」

「ぢやあ、何かね、ミトリツチ、お前さんの身が難破れかかつてるつてえなあ、まつたくの話なんだね？」

「まつたくの話だとも！」

彼は用心ぶかく、あたりをぐるりと見まはしてから、今度はすつかり小聲になつて、おれに

から訊ねた。

「ね、ざつくばらんと言ひねえな、それあ、真面目なことなんだらうね？」

「頸に繩がかかつてる爲體なんでさ。」と、おれは答へた。

トロフィーモフの顔には動搖の色が浮かんだ。彼は不安さうに両手でテーブルの上を撫でまはした。こちらへ注がれた彼のまなざしには、もうまざまざと同情がこもつてゐた。「ぢやあ(薩摩守)で出かけようつてんだね?……」と、トロフィーモフが改めておれに訊いた。

おれにはその言葉がよくのみこめなかつた。

「つまり、切符なしで乗ることさ。どつかへこつそり身を隠して海をわたらうつて奴のことさ。ね？」

「ああ、それなんだ。」

「よし、引き受けたよ。」

明るい希望の光が、黒い絶望の雨雲をとほしておれの心へ映しこんで、おれはこの上もない有頂天な氣持になつた。おれは彼らの頸つたまへ飛びついてゆきたいやうな心の衝動を、やつとの思ひで抑へたくらゐだつた。

「で、幾ら出したらいいだらうね？」

「お前から、大したことをして貰はうたあ思はねえよ。まあ、仲間の者に強いウオッカを一本と、その肴に鯨の五尾も買つてくんねえな、その上、もしあつたら、三ルーブリもやつてくんよ。それで萬事オーケーさ、ぢや、八時ごろ船へやつて來ねえ。」

おれは大喜びで承知した。

「どうかして、エルシヨーフの奴が嗅ぎ出さにやあ、ええだがなあ。」とグリーンシャトクが懸念した。

それは一體どういふ意味だらう？ 折角はなしのついたことをぶち壊さうつていふのだらうか？ いや、さうではなかつた。トロフィーモフがそれを遮つて、かう答へた。

「かれこれ言ふことあねえよ、きやうでえ。あんな野郎はまた何とでもごまかせるつてえものよ。奴あ、けふは遊んでやあがるから、船へは十一時より前にやあ、歸りつこねえよ。」

おれは、そのエルシヨーフといふのは何者だと訊ねた。

「船の石炭夫なんだがね。」と、トロフィーモフが説明した。「もつてうまれた耳こすり野郎なのさ。船長の三番目の耳つてえ奴で。そのまた船長めが——うつふ、極悪非道な鮫と來てるんだ！ 奴の手にかかつたが最後、情容赦もあらばこそ、悪魔め、こんりんざい、見逃しつこねえんだ。人を殺めることが、奴には道樂なんだからなあ。いろんなことがあつたつけ。だがお

前は心配しなくつてもいいよ。おいらが旨くかくまつてやるからよ。」

おれ達はまだ、かれこれと打ち合はせをした。やがて船へゆく道順をおれに教へておいて二人の火夫は酒場を出て行つた。

三十分ばかりして、おれもそこを出た。

二

もう四月だといふのに、そとは肌へをつんざくやうな寒さだ。強いからつ風が吹きすさんで電線がヒュウヒュウと悲しさうに唸つてゐる。空はどんよりと暗くなり、重々しい、陰鬱な天がいよいよ低く地上へ垂れさがつてゐる。むくむくとわきでた雨雲が捲きあがつては何處へともなく、急速に走つてゆく。

日は沈んで、まさに暮れようとする夕べの陰氣な灰いろの帷が市をつつんだ。石造りの建物は、何かもの怖ぢでもしたやうに、たがひにびつたりとからだを擦りよせてゐるやうに見える。あたりには猫の仔一匹姿を見せず——荒涼とした、死のやうな寂しさだ。ただ、ところどころにしよんぼりと首をすくめて、各々の部署に突つ立つてゐる巡査までが、まるで眠つてでもゐるやうに、じつとしたまま、身動きひとつしない。

だが、おれは元氣に張りきつてゐた。

火夫たちへの手土産を買ひととのへると、おれは、歩くといふよりは、足で踏む地面すら感じないほどの速さで走つてゐたのだ。なるべく人氣ひとけのなさうな狭い横町から横町へ通り抜けた。ウオッカの饅はむきだしのまま抱へてゐた。——ざまあ見やがれ！とおれは肚のなかで、自分を追跡してゐる連中を嘲笑つてやつたものだ。(へん、をととひおいでだ！) 大廣場にさしかかる。

と、ゆくりなくも最近の出来ごとがまた記憶の中によみがへつて来る。數萬の群衆がここに集まつてゐた。誇りかにも無數の旗が翩翻とひるがへつてゐた。ちやうどあの廣場の中央のところに桶を伏せて演壇がはりにした上から、激越な演説の聲がきこえてゐたのだ。群衆は火のやうに昂奮した。のびのびとした力づよい唄が鳴りわたつた。働きつかれた胸の底から——永久にそれを包藏する心臓の奥から、その唄は流露してこの廣場の隅々までとどろきわたつたものだ。

それが今はどうだ？ おれたちは一體どういふ處へゆきついたといふのだ？ あとには一體なにが残つたといふのだ？

だが、何も落膽することはない！ おれは再び希望に燃えながら先きを急いだ。

そら、もう港だ。やつと二週間ほど前から航路が開けたばかりだ。ところどころにまだ氷塊が浮かんでゐる。石だたみの棧橋に沿ふて、汽船や傳馬船が一行に連なつてゐる。中には煌々と灯りをつけてゐるのもあつて、マストが水の上に長い影を投げてゐる。

今や荷役作業がたけなはで、重い貨物をついで體を弓のやうに屈めた連中が、四方八方へ走つてゐる。あたりの空氣は荷揚人足たちの喚き聲や、捲轆轤の響や、汽笛や、木を叩く音や鐵の鳴る音にどよめき渡つてゐる。

おれの目ざす汽船はすぐに見つかつた。岸壁に繫留されたその船はぼんやりと霧にかすんでゐた。見たところ、かなりの老朽船で、いい加減いためつけられてゐる。これで暴風しほけでも喰らつたら、ちよつと心細いな、とおもふ。この船も荷役の最中だ。

おや、憲兵があるぞ！ しかし彼は、解夫がふたり唾みあつてゐる水上を眺めてゐる。

おれはすばやく甲板へあがつて、船首樓の方へ歩いて行つた。その船員室の扉をあけると、「さあ、入りねえ。」と、トロフィーモフがおれを迎へ入れた。「ここにゐるのあ、みんな味方の者ばかりだよ。」

おれは、持つて來た買ひ物と錢かねとをテーブルの上へ出して、そこに居合はせた火夫の連中と近づきの挨拶を交はした。彼らはみんな四人、どれもこれも好人物らしい若者たちだつた。

「實を言やあ、君はどつか途中で道草でも喰つてるんぢやねえかと、心配してゐたところさ。」
さう言つて、トロフィーモフが笑つた。

「どうして道草なんか喰つてゐられるものか！ おらあ、これでも何だよ、おつそろしく蒸氣をあげて、時速十哩つてえ速力で駆けつけた譯さ。」

一分の後には、大きな木のテーブルを圍んでおれたちは坐つてゐた。火夫たちは上機嫌だつた。グビリグビリ飲りながら、愛想よくおれにもすすめた。すつかり嬉しくなつて、おれもウオッカを二杯のみほしてから、すこし空腹を感じてゐたので、貪るやうにして鯨を丸ごと一尾たひらげた。

一同はがやがやと喋つたり、輕口を叩いたりしてゐた。

そこへもう一人、肩が突つて、胸のおちくぼんだ、おそろしく背のひよろ長い火夫が入つて來た。彼はしかめつ面をして、トロフィーモフや他の連中に何かぼそぼそと耳うちをした。

「いくら出すつていふんだい？」と誰かが訊ねた。

「八ルーブリ。」

トロフィーモフは、まだ何か話しあつてから、一同の方へ向きなほつた。

「なあ、おい、みんな。もう一人、密航志願の男があるんだよ、このペトロフに話しこんだん

だ。何でも、ずぶの若造だよ。引きうけてもいいだらうかなあ？」

「それあ、どのみち同じことさ、毒を喰らはば皿までつて言はあな。」といふ、誰かの聲がきこえた。

「おれもさう思ふよ、ぢやあ引き受けることにしような。それに、ミトリツチだつて二人の方が賑かでないだらうからな。」

で、先づ第一、おれをさきに匿まつてしまはねばならぬから、新らしいお客はもう少しおくれで來させることにしようと言が決まつた。

ウオッカの罎が空になり、肴もすつかり無くなつた。火夫たちはおれに、後で呼びに来るまでは此處から一步も外へ出ないで待つてゐるやうにと伝ひつけておいて、めいめいの持場へ出かけて行つた。

やがてトロフィーモフがおれのところへ戻つて來た。

「さあ、今だよ。」

彼は瞬くひまに、おつそろしく穢い火夫の仕事着をおれにきせて、よごれたズボンでおれの顔をさつと撫でた。さうしてから小さい鏡の破片をおれの鼻さきへ突きつけた。

「見ろよ、どうだい、巧くおいら達と同じ姿に化けたでねえか。」

なるほどおれの姿はすっかり別人になり切つてゐる。

「さあ、速足^{はやあし}い進め！」と笑ひながら、彼はおれに號令をかけた。

上甲板へ出ると、おれは見をさめに、もう一度あたりを見まはした。

空には星影ひとつなかつた。暗い遠くの方にキラキラと輝く燈火のほかには何も見えなかつた。帆索にあたつて唸る風の音が、暴風^{あらし}の前兆のやうに思はれた。港内の海水はいらだつて、まるで周圍を花崗岩の防波堤で固められて自由な廣々とした外海から隔絶されてゐることに癩癩をおこしてでもゐるやうに、ざはめき立つてゐた。上から霞がおちて来て、腹立たしげに甲板を打つたり、針で刺すやうにチクチクと顔にあたつた。埠頭の人影はよほど少なくなつてゐた。汽船のうちには、もう荷積みを終つたのもあつたが、おれたちの船ではまだ盛んに荷役がつづけられて、大きな船腹へいろいろな貨物がどしどし積みこまれてゐた。

「さあ、足をとめてゐねえ。」と、トロフィーモフがおれを促した。

おれたちはタラップを傳つて、最下層へと降りて行つた。が、ちよつとのあひだ、汽罐室の中へ誰か局外の者が來合はせてゐはしないかと確めるために、狭い廊下に立ちどまつた。恐ろしく熱いところだ。チラチラ明滅しながら豆ランプがぼんやりと灯つてゐる。ポイラーの上には氣壓計の指針盤がほの見えてゐる。そこいらぢゆうに、ハンマーだの、クローバだの、バケ

ツだのといつた、(亡者)たちに必要な道具類がころがつてゐる。二三の火夫が當直についてゐた。その中にはグリーンシャトクもまじつて、腰を屈めて、爐の中をゴトゴト掻きたててゐた。或る者はシャベルで石炭殻を盛りあげてゐた。そこから、もう二三歩すすんで、おれ達はポイラーの間に立ちどまつた。足もとには鐵板が敷きつめられてゐた。

トロフィーモフがしやがんで、その鐵板の一枚を持ちあげた。すると床下にわづかな空間があつた。

「さあ、ここへ入りねえ。」と、彼はその穴の中を指さしながら、おれに云ふのだつた。「あとで他所^{ほか}へ變へてやるからなあ。」

おれがそこへ這ひこまうとするのを見て、火夫たちが笑つた。

「たうとう地獄へはまつたつてえ奴だなあ！」

「ながいことぢやあるめえさ。おれのためにやあ、四四の千六百人から、祈りをしてゐてくれる乞食があらあな。」と、おれも巫山戯て應酬した。

鐵板がパツタリ閉ぢられた。なるほど、地獄のやうな眞の闇だ。下が何だか窪みになつてゐて、その底にきたない油ぎつた水がたまつてゐる。上下の間隔が極めて狭いため、おれはまともにも坐つてゐることも出來なくて、どうしても體を横にしなければならぬ。仕切壁を撫でま

はしてみると、じめじめして冷たい濡氣と鐵錆の臭ひがした。

だが、おれはへこたれはしない。せつば詰まつてゐた身の危険から遠ざかるにつれて、おれの肚の中にはいよいよ旺盛な生への欲求が目覺めて、どんな艱難でも堪へ忍ぶといふ覺悟の臍がきまつた。

おれが横になつて心に思つたのは、如何にしばしば人間の運命が偶然の機會に左右されるかといふことだつた。

もし、おれがあゝの居酒屋へ立ちよらなかつたとしたら、それともまた、あゝのテーブルに坐らなかつたとしたら、その後のおれは一體どうなつてゐたことだらう？　しかし今やおれは、もう半ば助かつたも同然だ。

それから、現在自分のゐる、この穴のことを想ひ出すと、おれはつい可笑しくなつてくるのだつた……。

ああ、汝、舊制度の破壊者にして、新生活の創造者よ！　お前はいつたい何處に幽閉されてゐるのだ！……

と、鐵の揚げ板が持ちあげられて、穴の中へ別の人間が入つて來た。そしてトロフィーモフの聲が聞えた。

「これがお前の道づれだよ、ミトリツチ。だが話をしちやあいけねえよ、外部へきこえるからなあ。」

「大丈夫です。」と、おれに代つて、その新らしい同伴者が、細い、いかにも若々しい聲で答へた。

二人は黙りこくつたままで、互ひに顔ひとつ見交はすこともできない。

十分ばかりすると、また鐵の揚げ板が持ちあがつて、今度は何か包んだ物を持つた手だけが穴の中へにゆつと現はれた。そしてまた、トロフィーモフの聲がした。

「そうら、取つてくんねえ、ミトリツチ。これは君とワーシエクのための牛肉と麵麩と、それから水の入つた罐だよ。ぢやあ、あばよ、あすまた來るからなあ。君たちの上んところへ、石炭を三噸ばかり積みあげておくよ。さうしておけば、まづ安全だからなあ。それぢやあ、まあ、御機嫌よう！」

「ありがたう、きやうでえ。」さうおれが、言ひきるか言ひきらないうちに、もうボタンと蓋が閉ぢられてしまつた。

おれは火夫が持つて來てくれた品々をみな用心ぶかく片脇へおいた。水をひつくり返しはしないかと、それだけが心配になつた。

煙草が一服のみたい、そして序でにこの穴の中の様子と、同伴の密航者の顔がひとめ見たいのだが、おれはうつかりして、さつき火夫部屋へマッチを置き忘れて来てしまった。ワーシェクもマッチは持つてゐないといふ。尤も彼は煙草をやらないのだ。おれは肚の中で自分の迂濶さを罵つた。

時間の経過を少しでも速めるために、一と睡りしようと思つておれが仰向けになつて兩手を枕に體を伸ばした途端に、バチャツと水の中へ足を突つこんでしまつたが、さういふ姿勢以外には寝そべることも出来ないのだ。

頭の上を、鐵板を踏み鳴らしながら人が往き來する。火夫たちの話し聲が聞える。考へることがぼうつと散漫になつて、いつの間にかおれはぐつすり寝こんでしまつた。

三

ふとおれは眼を覺ました。あたりは一寸さきも見えない眞の闇だ。頭の上では、まるで固い土くれが棺の蓋にあたるやうな、バタンバタンといふ騒々しい物音がする。自分の現在ゐる場所を忘れてゐたおれは、生き埋めにされて墓穴の中にあるのではないかと思つて、ゾツと身ぶるひをした。

咄嗟に跳ね起きようとして、ぐわんと眼が眩むほど酷く鐵板に頭をぶつつけ、今度は横へ身をかはず途端に、いやといふほど打撲を受けて、おれは仲間の上へぶつ倒れた。

「ドミートリツチ！ どうなすつたんです？」と、彼はびつくりして言つた。

茲でおれはハツと氣がついて、自分がこんなところにある理由を想ひ出した。そして、頭の上の物音も、火夫たちが鐵板の上へ石炭をほり投げてゐるのだといふことがわかつた。

われにかへると、おれはだんだん落ちついて來た。やがて間もなく、あたりがシーンと鎮まつた。

「ずるぶん吃驚しましたよ。外部へきこえたかも知れないくらゐですよ。」と、ワーシェクが囁いた。

「失敬、失敬。」おれも同じやうに小聲で答へながら、からだの位置をなほした。

何か生ぬるい、ねばねばしたものゝシャツの襟の中へ流れた。頭へ手をやつてみると、傷ができてゐる。額にも擦り傷とコブが出來てゐる。この時になつて始めて傷が疼きだした。

おれの着物はぐつしより濡れてゐる。たしかに水が増してゐるやうだ。

渴きを覺えたので、罐を手でさぐつたが、それはひつくり返つてゐた。

どうも仕方がない。我慢するより他はない。

「あなたは何處へおいでになるのですか？」さういふワーシエクの囁きが聞えた。
「ロンドンへ行くんです。で、君は？」
「僕もですよ。」

しばらくすると、また質問が向けられる。

「そんな遠くへ落ちのびなさうつていふのには、よほど重大な事情がおありになつてでせうねえ？」

それにはおれは返事をしなかつた。突然、おれの頭の中に、これはもしや刑事ではなからうかといふ疑ひが浮かんだのだ。それなのに、ワーシエクの奴は質問を止めようともしない。

「黙つてゐ給へ！」と、おれはいらいらしながら相手を沈黙させた。

しかし病的なおれの頭の中には、もう新しい考へが集中しはじめてゐた。何だつてこの男は、話をするのを禁められてゐるのに、そんなことをおれに訊くのだらう？ うん、こいつは少し怪いぞ！ かう考へ出すとますますその疑惑が深められて、おれはてつきりスパイと同席してゐるやうな気がして來た。

「いつそ、殺してしまはうか！」おれは密かに肚の中で決心した。

聲から推して、相手はさほど手剛い奴でもなささうだ。こんな手あひを片づけるのは雑作の

ないことだ。

おれは、自分の考へでおほよそそこが鐵板の揚げ板になつてゐる場所だと思はれる眞下へにじり寄つた。おれの兩手はわなわたと震へ、指が痙攣的にしやちこばつて來る。出口へ近づかうなどと思ひついて見ろ！ 咽喉頭を掴んで、ゲウの音も立てさせないで、絞め殺してくれから！ それから先のことはどうでもなれだ。

しかし、相手はまるで其處にゐないもののやうに物音ひとつ立てないで横たはつてゐる。

あたりはしいんと鎮まりかへつてゐる。上の方から、わづかに聞きとれるやうな鐘の音が聞えた。それは時刻を報らせてゐるのだ。七つ鳴つて止んだ——してみると三時半か、それとも朝の七時半の譯だ。

と、すぐ頭の上で話し聲がする。

「いつたい、昨夜は何處であんなに長く遊んでゐたんだい、エルシヨーフ？」

「わかつてゐるでねえか、菩薩をお見舞え申してよ。」と、相手は鼻にかかる聲で、かう自分から進んで答へた。「蜜入ウオッカをひつかけてをつたのさ。そのまた女がどうでえ！ 眼と髪の毛の黒い、すげえ上玉で！ ちえつ、火のやうに熱い奴よ！ それもその筈だて、一ループもふんだくられたのだからなあ……。」

ひと言ひと言、玩味するやうに彼は自分の情事をこまごまと吹聴するのだ。誰かが體を揉むやうにして笑つた。

すると、忌々しさうにトロフィーモフがエルショーフの言葉を遮つた。

「手前は、あの石炭穴より眞黒な肚をしてやがるんだ！」

「何だつて、お前、そんなにおれを悪くいふんだい、パーウエル・アルチーミチ？」と、彼はトロフィーモフに諂ふやうに言葉を返した。「よく考げえてくんねえな、何もおいらは他人に迷惑をかけてるではなし、何か楽しみをするといやあ、ちやんと自分のふところから金を拂つてるんだぜ。神さまが見てござるとほり、おら嘘はいはねえよ……。」

「手前のことあ、よく知つてるぞ、神さまなんぞ引き合ひに出すねえ。五十錢玉ひとつで好きな時に神様を賣りやあがる癖に……。」

火夫たちは尙も話しつづけてゐたが、おれの考へは又しても、そばにゐる男の方へと戻つてゆくのだ。いつたい、何處からこの男はおれの素性なんか嗅ぎ出して來やあがつたのだらう？ 火夫の中におれを知つた奴でもゐるのだらうか？ さつぱり譯が分らない。おれは憤りに呼吸がつまり、顔がかつと上氣して來て、心臓が不規則に鼓動する。身體ぢゆうの筋肉が引きしまる。すつかり覺悟の臍を固めて、おれは一途に自分の敵に向つて飛びかかつて行く機會を待つ

てゐるのだ。

「(一)が、もしも、奴がこのおれより手剛かつたら、どうしよう？ (二)おれの頭の中に不圖さういふ考へが閃いた。(三)今のおれは、すつかり疲れ果てて、弱くなり、ずつと以前のやうな體ではないのだから。」

必勝の自信は消えうせたが、この時おれはポケットの中に大きな海軍ナイフのあることを思ひ出した。おれはそれを取りだすと刃をひろげて右手に握りしめた。もう何も怖ろしいものはない。結果がどうならうなどと、そんなことは何も考へなかつた。おれの思考力はただ、どうしたら最も有効な一撃を與へ得るかといふ一事に集中された。

「(さ)あ、おれの方へ寄つて來てみる、畜生、(さ)あ寄つて來い！ (二)おれの心は敵意に燃え立つた。(三)貴様の卑劣な肉體へこのナイフを突き刺して呉れるばかりだ！ 血かほどばしるだけだ……からなつたら、貴様なんぞに誰がつかまるものか……。」

沈黙がつづいた。

また時刻の鐘が鳴つてゐる。そして、よく徹る聲が聞える。

「(さ)あ、止めるよ。みんな、おい、飯にゆかうぜ。」

たしかに朝の八時だ。では間もなく拔錨の筈だ。

だが、おれの敵はどうしたといふのだらう？ おれはずつと待機の姿勢をとりつづけてゐた。蒸氣が出はじめた。汽鐘がシュツシュツと音を立ててあへぎ出した。單調な機械の響が聞えて來た。船がどよめいて一つ二つ揺れた。いよいよおれたちは航路についたのだ。

やれやれ、ワーシエクの奴スパイでもなかつたらしい。さもなければ、何も便々として時をのばしてゐる意味がない譯だ。おれはほつとして溜息をついた。

やつと、その時になつて氣がついたことだが……馬鹿なおれだつた。何といふ愚にもつかぬことだつたらう。どうしてそんな愚かな邪推をめぐらしたのか、ひとつ間違へば不條理きはまる罪を犯してしまふところだつた。ほんのちよつとでもワーシエクがこちらへ近よるか、身動きひとつしただけで、飛んでもないことになつてしまふところだつた……。

おれは思はず冷汗をかいた。きまりの悪さと、良心の苛責に、胸をひきさかれるやうだつた。いや、たしかにおれは常規を逸してゐたのだ。

忌々しく思つて、おれはナイフを片脇へ投げすてた。午前ぢゆうの時間は知らぬ間に經つて行つた。だがそれから、恐ろしく待ちどほしい退屈きはまる時間の連続だつた。新らしい場所へはなかなか移してくれない。

船ががぶり始めた。どうやら外海へ出たらしい。

おれたちの暗やみの巢窟へは、だんだん水がさして來た。もう兩脚と背中の一部まで水浸しになつた。

寒い。

おそろしく咽喉がかはく。口の中がからからになつて、いやにえがらつぽい。おれは前の晩あんなに貪るやうにして平げた鯁を呪はしく思つた。

ワーシエクは、ずつと黙りこんでゐる。

おれは自分の罪を償ひたいやうに思つて、彼に話しかけてみたが、聲が汽鐘の音に消されて聞えないため間近へ這ひよつて、相手のからだを手でさぐりながら、頭と頭をくつつけあふやうな位置を取つた。

「ねえ、君、眠つてゐるんぢやないのかい？……」と、おれが訊ねた。

「いいえ。」

「氣分はどうだね？」

「いけないんです。すつかり凍えてしまつてゐるんです。」

「僕もさ。」

「まだずつとこのまま、此處にゐるんでせうか？」

「代へてくれるつてえ約束なんだがなあ。」
まだいろいろ話したいのだけれど、危険を慮つて、おれはただもう一言だけ次のやうに訊ねてみた。

「君は、前に船に乗つたことがあるのかい？」

「いいえ、初めてなんです。」

そこで、口を噤んでしまふ。

四

たしか、もう夕刻だ。

恐ろしい揺りかただ。上の方では強風がヒューヒューと猛烈に唸つてゐる。物凄いな音を立てて送風筒が吼えてゐる。波が暴れ騒ぎ、はげしい怒濤となつて舷側を打つと、船體は木の葉のやうに翻弄されて、高く揺りあげられるかと思へば、たちまち奈落の底へと突き落され、またすぐに上へ持ちあげられる。さながら狂亂した自然力がこの船を打ちくだいてしまはうとして躍起になつてゐるのではないかと思はれるやうな、凄まじい軋み聲が耳をつんざく。すぐ頭の上では、鐵板をはげしく打ち鳴らしながら、石炭や、その他の固定されてゐない物體が、あち

らこちらへころがりまはつてゐるらしい。

おれとワーシエクは、體をならべて、この現象に仰天しながら、まるで怯えてしまつてゐた。船底の或る一個所に監禁されたまま、暴風に逢ふくらゐ、不運なことはなからう。上層でなら、ただ脅威を受けるに過ぎないけれど、ここでは、たとへ經驗のある船乗りにとつても、それは怖るべきことだ。上層でなら、船が難破するやうな場合にも、まだまだ助かる途が絶無ではないが、ここでは大口をあけた墓穴がすぐ間ぢかに迫つてゐるのだ。

水は後から後から、おれたちの巢の中へ浸入して来る。

もう胸の邊まで浸いて来た。

おれたちは、まるで鹽水といつしよに桶の中へ投げこまれた鯀のやうに水びたしになつてしまつた。からだには皺がよつて、寒さのために、まるで瘡りでも患つてゐるやうに、ガタガタと震へた。

仰向けに寝たら水に溺れてしまふし、さればとて眞直ぐに坐るには上の床が邪魔になる。からだを屈めるやうにして、しよつちゆう水の中へ手をついた姿勢を取つてゐるより他はない。これでは暫くすると、とても堪らなくなつて来るのだ。

ワーシエクはもうぐつたりと疲れてしまつた。おれは自分の項に彼のブルブル震へる冷たい

両手を感じた。胸の底から出るやうな、力のない呻き聲が漏れてきこえる。
 「駄目です……もうとても力が出ない……すぐにも倒れてしまひさうです……。」
 おれは、ほんとうに彼が倒れて水に溺れてしまふことを怖れて、彼の肩を支へてやつてゐるのだ。それは、まるで十歳くらゐの子供のやうに、狭い肩幅だつた。

おれには、いつたい何處からこの水が浸入して来るのか、それが不思議でたまらない。なるほど、汽罐の水が噴きこぼれたり、石炭の火を消すやうな場合には、よく水が床へ流れ出して、それがゴミといつしよになつて船艙へたまることは知つてゐるが、それなら、こんなに冷たい筈がない。それに、もしそんな場合には、ポンプの吸ひこみ口へはけるやうにする筈だ。いや、これは何か様子がをかしいぞ。船體に罅がいつてゐて、そこから海水が浸みこむのか、それとも、何か他に原因がなければならぬ。

なほ、暫くの時が経つた。どのくらゐ経つたか、はつきりしないが、多分、數時間は経過したらう。それがおれたちには無限に永い時間のやうに思はれた。

不安はいよいよつのるばかりだ。

「いつたい、これはどうしたのでせうか？」と、ワーシエクがおれの耳許へ口を押しつけて訊いた。

「わからないねえ……。」

「呼んでみませうか？……。」

「でも、エルシヨーフの耳へでも入つたらどうする？」

「ああ、僕たちはもう駄目ですよ……。」

ワーシエクの聲には死にも狂ひな混亂の響が感じられた。もの怖ぢしたやうに、おれの方へびつたりからだを擦りよせて來た。船體が波のうねりに突つばなされて、大音響とともに下へさがるとき、ワーシエクはおれの腕の中で身をもがきながら、頭をぐるぐるまはして、おれの顔を突きあげた。時々すぐ耳もとで彼の齒がカチカチと鳴るのが氣味わるく聞える。刻々に彼は力が萎えて下へずりさがつてゆくので、いよいよ重くなる。おれの手もひどく疲れてしまつて、辛うじて彼を支へてゐるのが關の山だ。

だが、波はますます強くなり、いよいよ激しく船體にぶつかりはじめた。船は大波と闘ひながら、或は上へ、或は下へと、持ちはこばれて、まるで傷を負つた野獸のやうに、死にも狂ひに四方八方へのた打ちまはつた。本來マドロスのおれには、かうした必死な波の奔騰や、兇暴な大自然の手中に呻きおののく、巨大な鐵の船體のあげる軋音がよく解つてゐる。そら、今きこえるのは鑄鐵の悲鳴だ。船體が弓のやうに彎曲する。この瞬間、おれは、船が二つのうね

りに乗せられて、中間が宙に浮き、その下に奈落が大きな口をポカリとあけてゐるのを、心の眼でまざまざと見た。かうした場合、重荷をつんだ老朽船は己れの重みに堪えることが出来なくて、まつ二つになると同時に、暗い、暴れ狂ふ深淵の底へ呑みこまれてしまふのだ。だが、おれたちの船はまだ持ちこたへてゐる。と、突然ひとときは高く、神経的な、ダダダ……ダんといふ、凄まじい音がした。

海の暴力のために船尾が上へ突きあげられ、推進機が露出して、空中で廻轉し、機關部がからまはりをして、頼りなく呻く。たびたび船が胴體全體を打ち震はせる。おれたちの船はすっかり暴風の全能力に打ち負かされて、ただ揉みくちやにされてゐるものらしい。この時、おれたちの頭の上で轟くやうな、軋むやうな、呻くやうな音がいよいよ募る。鐵板の上を何ものかが這ひまはり、ガタガタと音を立てて、さながら數千の魍魎魍魎がよりたかつて狂喜亂舞してゐるやうな騒々しさだ。

突然、おれたちのすぐ間近で、何物かが大音響とともに鐵板へぶつかつた。きつと何か重い貨物がころげ落ちたのに違ひない。しかし、おれたちには船體がいよいよ破壊しはじめたやうに思はれた。おれは、ハツとして固唾をのんだ……。

どうして、おれたちを他の場所へ移してくれないのだらう。これでは、たうてい助かりつこ

ないではないか？

人聲ひとつきこえない、すべてが轟音と暴風の咆哮に打ち消されてしまつて……。
浸水は刻々に増してくる。

まるで氷にはりつめられたやうな氣持だ。寒さが骨の髓までとほり、手足が凍えて、血もすつかり冷却してしまつた。空氣が無くなる。呼吸がつかまる。船が傾斜する度ごとに、船腹にうねりがぶつかる度ごとに、汚水がだぶついて、顔に跳ねかかる。口の中が油臭く、えがらつぽくていやな氣持だ……。

ワーシエクはしくしく泣きだした。可哀さうに！ マドロスとして、どんな酷い目にも逢ひ、大洋の氣紛れな脅威には度々馴れてゐるおれでさへ、怖ろしさに震へてゐる今、彼がどんなに堪えがたい苦痛を経験してゐることだらう！……。

もはや、このうへ我慢をすることは、出来ない相談だ。一分一秒が堪へがたい拷問となつた。いつそ聲を立ててやらうかしら？ だが、つかまればこの身の破滅だ。そればかりではなく、あの火夫たちまでも巻き添へにしなければならぬのだ。ただでは自由の身になることはむづかしい。誰かがちよつかいを入れるにきまつてゐる。もう、かうなつては、刑吏の手にかかつて死ぬか、それとも、この穴の中で窒息して死ぬか、どちらの死に方を選ぶかが、當面の問題

なのだ。

拳で頭のうへの鐵板を叩いても駄目だ！

外へ聞えるやうにするには、金槌でも叩かなくては無駄だ。まだ一つ望みがある——鐵板を上へ押しあげることだ。おれはこの思ひつきに雀躍^{こぞり}りして、ワーシエクのからだを手から離した。彼は水の中で頼りなくもがいてゐる氣配だつた。しかし、彼を可哀さうだと思ふどころではなかつた。おれは鐵板に背中を當てて、ウーンと頑張つた。胸が張りつめて、今にも張り破けさうで、眼の球は眼窩から飛び出しさうだつた。だが、鐵板はビクともしない！ おれは、鐵板の上に石炭が積みあげてあることをすつかり忘れてゐたのだ。おれたちを救ふために施された手段が、却つて破滅の因となつたのだ。恐らく石炭の量はさして多くはあるまいが、おれたちを墓穴へ閉ぢこめるため、上からおもしをするには十分だつた。

もう何もかもがおしまひだ……。おれたちは鐵で固めた陷穽へ落つこちたのだ。ふたりとも死滅の他はない！ 數分の後には、いよいよ死刑がはじまるのだ。斷頭臺の代りが、この呪はしい穴だ。番人の代りが鐵だ。そして死刑執行人の代りが水なのだ。

いや、それは堪らない。そこで、もう一度、鐵の天井を押しあげようとして必死にあせつた。もし、どうしても駄目なら聲を立てよう。ただひよつと何處かに、上に戴つかつてゐる石炭の

量の少い個所があるかも知れないから、位置を更へて押しあげて見ることだ。

おれはひよいと傍らへ身を寄せた。その途端にワーシエクのからだに打^ぶつかつた。と、彼は人間ばなれのした呻き聲をあげて、まるでおれを絞め殺さうとでもするやうに、兩手でおれの頸へしがみついて來た。おれは彼を突きつけた。おれの内臓が張り破けるか、それともおれたち二人が助かるかの瀬戸際だ！ おれは破れかぶれの自棄^やくそな氣持になつて、渾身の力を揮つて、ウーンと頑張つた……。

が、おれたちの墓穴の障壁のむかうでは、颶風が幾百萬の見えざる口を開けて、このおれの力なさを嘲けるやうに咆え狂つてゐる……。

突然、おれの意識の中に、はつと怖るべき新しい考へが浮かびあがつた……。ああ、さうだ、屹度さつきのワーシエクの喚き聲は外部へ聞えたに違ひない。それなのに、おれたちを助けてくれないのだ。これは、もしかすると、あの火夫たちを味方だと信じたのが間違ひだつたのではないだらうか？ もしや、おれたちは、途方もない蠻行の犠牲に供されたのではなからうか？ もう數分もすれば、おれたちは土左衛門になつてしまふのだ……。

かうした考へが、一瞬間、ハツと、呆氣にとられて我れにかへる暇も與へないやうな、陰暗な疾風となつておれの頭をかすめた。

が、この刹那、何かまるで岩山でも崩れ落ちたのではないかと思はれるやうな、猛烈な衝撃を受けて船がグラグラと揺れた。船體が急激に一方の舷へ傾き、今にも龍骨を仰むけに顛覆してしまひさうだった。おれは反動を喰らつてひっくり返ると、したたか水に咽びながら、ゴロゴロと場所がつかつた。

もう、いよいよおしまひだといふ恐怖が、情容赦もない残忍な明瞭さをもつて立ちほだかつた。おれは心身ともに、生皮を剥がれるやうな苦惱で貫かれた。胸の奥底から絶望の悲鳴が漏れた。人が一時に白髪になるといふのは、屹度かういふ瞬間だらう……。

おれは躍起になつて起ちあがらうとしたが、鐵板に頭をぶつつけて、手もなくその場へぶつ倒れてしまつた。眩暈を起したおれは、暫くのあひだ、同じところをのたうち廻りながら、したたか水を呑んだ。が、この時、再び兇暴な發作に驅られて、おれは無性に手を振り廻しながら、何かを掴むと、そいつの肌を掻きむしつた。眼の中に眞紅な血のやうな輪形がキラキラとして見えた。今はもう、おれは船の底にゐるのではなく、眞暗やみの深淵の中に呑みこまれてしまつたやうな氣がした。

もしかしたら、船は海の底へ沈没してしまつたのかも知れない。おれが、どうかして叫び聲をあげようとする度ごとに、何か大きな塊りでも口の中へ無理矢理おしこまれるやうに、咽喉

が張り破けさうな氣がした。

五

おれは誰かの手にかかへられて、どこかへ曳きずつてゆかれるやうに感じた。自分自身では一步も動くことが出来ないのだ。眼の前には、限りもなくさまざまな色彩の輪形が、ぐるぐると廻つてゐる。

「この男には息があるよ！」と、誰かがおれの顔の上へ屈みながら叫んだ。「こちらを見てゐらあ……。おや、口をあいたぜ……。」

「え？」

「見ねえな……。」

この時、おれの身邊で例の馴染の低音の聲が聞えた。

「もう一人の方は何處なんだ？　ここへ運んで來ねえ……。」

おれをうつむけにして、背中を叩きはじめた。

まるで激しい吃逆の時みたい、内臓がかき搥られるやうな氣持いだ。

ひとりでに頸が開き、全身がひきつたやうになつて、嘔吐がはじまつた。飲みこんでゐた

鹽つ辛い汚水を吐き出してしまふと、胃の腑が裏返しにされるやうな氣持がして、やがて樂になり……呼吸も輕くなつた。

嬉しさうな話し聲を耳にして、おれは眼を見ひらいた。すると、一時に數人の者が喋り出した。何か只ごとでなささうに囁きあつたり、心配さうにどこかを窺つたりしてゐる。

やうやく周圍の出來ごとがわかり始めた。これは、みんなが一生懸命に、おれを落ちつかせようとしてゐるのだ。おれは力なく眼をつむる。妙に眠たい……。

どこかへ登つてゆくやうだ。幾人もの者が、あわただしく叫ぶ。

「しつかり、おさへろよ！」

「ようし！」

「受けるよ！」

からだだが、熱い壁をすべつた。それから、おれを鐵板の上へ乗つけておいて、どこかへ行つてしまつた。おれは何處か新しい場所にあるやうだ。

ぐるりを見廻すと、壁に懸けた豆ランプが微かに光つてゐる。おれは變な四角い部屋の中へ入れられてゐる。四方は鐵の壁で取りかこまれ、中央には、この部屋の大部分を占めてゐる圓い筒のやうなものが高く聳えてゐる。手を觸れてみると熱い。それは煙突だつた。頭上には蒸

氣の管が大蛇のやうに絡みあひながら、各々その端々はそれぞれ鐵の壁を貫いて何處かへつながつてゐる。その、もつと上にあたつて甲板がある。そこいら中いたるところに黒いほこりが分厚い層をなして溜まつてゐる。温かい。すべての點から、おれは自分が爐蓋の上にあるのだと判斷することができた。おれの下には屹度ボイラーがならんでゐて、その下に爐があるのにちがひない。

負傷した頭へ、鹽水のひからびた結晶が喰ひ入つて堪らなく痛い。

おれは例の船底での出來ごとを想ひ起す……。

ワーシエクは何處にあるのだらう？ どうしたらう？

生きてゐるだらうか？ ちやうどそこへ、トロフィーモフとペトロフと、もう一人の火夫とで、ワーシエクを爐蓋の上へ運んで来て、おれと並べて下に置いた。彼は意識を失つてゐた。わづかに頸動脈の微動によつて、今なほ彼の肉體に生命の宿つてゐることがうなづかれるばかりだ。

火夫たちは彼の顔を覗きこみながら、首を伸ばして、ハアハアと息をはずませ、汗をかいて、その場にたたずんでゐる。

おれは少しからだを起して、肘杖をついた。

「やあ、すつかり、よくなつたね、ミトリッチ！」と、おれの動作に目をとめて、トロフィーモフが喜ばしさうな叫び聲をあげた。「まあ、好い鹽梅だ、おれたちがどんなに、びつくりしたと思ふ！ まあ、勘辨してくんな、まつたく偶然に、あんなことになつちまつたんだからなあ。あとで詳しく話すよ。」さう言つてから仲間の方へ振り返つて、

「さあ、みんな、ワーシエクを揺すぶつてやらう。」

「それあいけねえよ、ひどく弱つてるから。」と、ペトロフがそれを遮つた。「それに、どうせ急には正氣に返すこたあ出来つこねえよ。これあ何だ、足を持つて振つた方がいいぜ。かういふ時にやあ、それが一番だとよ、すぐに水を吐くつてさ。」

「腹に膝をあてて、おさへてみたらどうだらう？」と、もう一人の男が口を入れた。

「お前、氣でも狂つたのぢやねえかい？」と、トロフィーモフが躍起になつて言つた。「そんなことをしたら一ぺんに膀胱が破裂してしまふぞ。」

「だつて、やつぱり、さうするつてことだよ！ いったい膀胱は何處にあるんだい？ もつと下部の方にあるぢやねえか。おれのいふのは、もつと上の方を押すことだよ。おれたちの村ぢやあ……。」

「手前たちの村ぢやあ、屋根の上で牛を飼つてるとでもいふのだらう。何といふ血のめぐりの

悪い奴だらう！」と、トロフィーモフはいらいらした聲で叫び出した。「智慧もない癖に、黙つてろよ、木偶の棒め！」

結局、ペトロフの提案に従ふことになつた。火夫の一人が出口のところへ行つて、不意に誰かここへ顔を出す者がないやうにと見張りに立つた。そこで残りの二人がワーシエクの兩脚を持ちあげて、彼のからだをゆすぶり始めた。ワーシエクの頭がぐれんぐれん揺れうごいた。大して重い體格ではなかつたけれど、船の動揺のために火夫たちは絶えずヒョロヒョロしながら辛うじてそれを支へてゐた。それで今にも病人もろともに打つ倒れて、すつかりその息の根をとめてしまひはせぬかと危ぶまれた。

ワーシエクはブルブルと震へだした。そしてしまひに口からタラタラと水を吐きだした。

「もう澤山だよ、でねえと、内臓をいためてしまふから。」と、トロフィーモフが言つた。

ワーシエクは鐵板の上に寝かされた。すると彼はひとりでに水を吐きはじめた。彼は寢返りを打つては呻くのだつた。顔面がおそろしくひんまがる。嘔吐が鎮まりかけると、トロフィーモフが、ワーシエクの口の奥へ指を深く突つこんで、再び吐き氣を催させた。するとワーシエクのからだは、ひどい苦悶のために、まるで頭を踏みつけられたミミズのやうに、のたうち廻るのだつた。

やがて、火夫たちは、もう大丈夫だと言ひ残しておいて、出て行つた。おれは一層元氣になつた。ワーシエクも意識を取りもどした。しかし、おそろしく温度の高い場所にゐる癖に、やはりまだ悪寒のためにガタガタと震へどほしだつた。

「ここは何處なんでせう？」我れにかへつたワーシエクが、おれにさう訊ねた。

おれの説明ですつかり合點がいつたらしく、彼はほつとして言つた。

「あつ、さうですか……まあ、随分ひどい目にあつたんですね……。」

暴風のゴウゴウといふ音はきこえてゐたが、今は、あの船底でおれたちが経験したやうな怖ろしさはなかつた。

船の動揺でワーシエクは仰向けにころがつた。彼は暫くのあひだ、その場にじつとして寝てゐた。豆ランプの光が彼の顔を照らしてゐる。おれは初めて彼の顔を十分に観察することが出来た。

ワーシエク……

さうだ、たしかにワーシエクと呼ばれさうな奴だ！ まだほんの小供みたいだ。見たところ十七八にもなつてゐないらしい。小柄で、瘦せて、すんなりした體つきだ。正しい輪廓の、秀でた聰明な顔をもつた、非常に魅力のある顔だが、ひどく苦勞を積んだらしい、どこか物悲し

げな容子をしてゐる。大きな信じ易さうな兩の眼には、疲勞の色が浮かんでゐるけれど、その眼差には、煤煙に汚れた鐵の壁ではなく、瑠璃いろの美しい遠景にでも見入つてゐさうな、夢みるやうな趣きがある。

その姿を眺めながら、おれは、どうしてこんな男が大それた密航などを企てたものだらうと、驚かすにはゐられなかつた。どうしたといふのだらう？ こんな危つかしい、弱々しさうな體で、遠い他國へ出かけて一體なにが出来るといふのだらう？

「君は服を著替へなかつたんだねえ。」と、おれは彼の著てゐる立派な服装を見ながら訊ねた。

「さう言はれたんだけど、斷つたのです。」

ペトロフが罐詰の空罐へ入れた冷たい水と、麵麩と、瓦のやうな物に載せて馬鈴薯といつしよに焼いた肉とを持つて来てくれた。しかし彼は、

「おつそろしく忙がしいんだ、あちらがとても大變なんですね、船倉から水の汲み出し最中なのさ。また後で来るからね。」さう言ひ捨て、直ぐさま出て行つてしまつた。

おれはワーシエクに食事をすすめた。

おれが貪るやうにばくついてゐるあひだに、彼は肉と馬鈴薯を少しばかり咽喉へ通したただけで、もう欲しくないと言つて斷つた。

「ちつとも食欲がないのです。」と、彼は悲しさにいふのだつた。「體の具合がひどくいけないんです。」

トロフィーモフがやつて來た。

自分でも氣が咎めるのか、彼はおづおづと、ひどく曖昧な口のきき方をしたが、彼の口裏から察して、火夫たちに何の罪もなかつたことは明らかだ。これまでつひぞない出來ごとで、船艙の中を通つてゐる鐵管のうち、接手が急に壞れて、ひどく水の漏るところが出來たばかりか、そのうへ排水用のポンプの瓣が塞がつてしまつて、ほとんど空まはりばかりしてゐたのだ。

「それを、おれたちはちつとも氣がつかずにゐたつて譯さ。」と、トロフィーモフは説明するのだつた。「それに、君たちをあれより前には見に行くこともできなかつたんだ。エルシヨーフの奴が當直にあたつてやがつたもんでな。一時間交替だつたんだ。すると、不意に金切聲がしたので、いつたいどうしたんだらうと思つて、シャベルで石炭を取りのけて見ると、もう、鐵板のうへまで水がついてゐるぢやねえか。ちやうど、船が傾斜した時のことだよ。みんな一時に、あつと言つただけで聲も出ねえ始末さ。てつきり君たちは死んぢまつたと思つたよ。いい鹽梅しんばいにその時、エルシヨーフの野郎は石炭庫へ入つてゐたので、奴の耳には何も入らなかつたつてえ譯よ。でなかつたら、それこそ災難だつたよ……。」

「君たちがつと早く他所へ移してくれさへすればよかつたんだよ。」と、おれがそのことをいふと、

「だつてさ、君はそんなことを言ふけれど、危あぶねえ瀬戸ぎはだつたんだぜ！ あやふく見つかるどころだつたよ。ちやうど、出帆の間際になつて、男が一人やつて來やがつたのさ。どうも怪くさい奴なんだ。しきりにエルシヨーフと耳打ちをしてやがるんだ。てつきり密偵にちげえねえのさ。」

おれは彼に、あの鐵板の下におれたちほどのくらゐの時間ゐたのかと訊ねた。

「今、朝の九時だから、さうすると一晝夜以上、あすこにゐたことになるよ。」

船は依然として揺れてゐる。

トロフィーモフは、始終だまつたまま寝ころんでゐるワイシエタを眺めやつた。

「おい、どうだい、若えの、氣分は？」

「ムカムカするんです……。」

「初めてのことだから……無理はねえよ。」

火夫の顔には何か屈託さうな色が浮かんだ。

「それにしても、いつたい君たちを何處へかくまつたものかあ？ ちやうど持つて來いの場所

がひとつあつたんだが、そこが不意に使へなくなつてしまつたんだ。どつか他にと思ふんだけど、どうも、うめえ考へが浮かばねえんだよ。」

「どうして、此處にゐられねえんだね？」と、おれが訊ねた。

「とても熱いんだよ、五十度か、どうかすると、もつと温度が高くなるんでね。とても君たち我慢が出来つこねえよ。」

なるほどそこは熱かつた。しかし、やつと體が温まりかかつたばかりのおれたちにとつては、この新しい場所が、あの船艙に比べたら、まるで天國のやうに思はれたので、トロフィーモフに向つて、當分おれたちのことは心配しないで、このままにしておいてくれと頼んだ。

ワーシエクは非常に激しい船酔ひに苦しみだした。彼は全身を車海老のやうに曲げるかと思ふと、短い背筋をウンとふんぞらせて、身もだえしながら、何度もパツと膝立ちをしては、再び鐵板のうへへ轉倒した。彼は胸もとから迸り出ようとする不自然な呻き聲をこらへようとして、自分の口を必死に押へた。それはまるで、誰かに内臓を引きちぎられてもするやうな、烈しい苦しみ方だつた。

ワーシエクの苦しみを見かねたトロフィーモフは、何處からかレモンをさがして持つて來てやり、おれには煙草をくれて、なほ暫くおれたちの傍についてゐたが、ワーシエクの容態は一

向よくならなかつた。トロフィーモフは豆ランプの灯を消して、おれたちに聲を立てないやうにと注意しておいて出て行つた。

六

おれたちは爐蓋の上で、まる一晝夜を過した。初めの間たいへん具合が好いやうに思はれたと同じ程度に、後には其處がおそろしく酷いところになつた。新しいおれたちの隠れ家は焦熱地獄と化して、暗黒と、堪へ難い熱さと、灼熱した鐵板——それらが一緒になつて、おれたちの精神と肉體に致命的な悪影響を及ぼしたのだ。

船の動揺のため内臓を揺られて精神の錯亂したワーシエクの苦悶するさまを見ると、おれまでが同じやうに、マドロスとしての氣丈さを失つて、かなり烈しい船酔ひに悩まされはじめた。熱のために脳味噌がまるでとろけたやうになり、こんがらがつたやうな、重苦しい切れぎれの考へばかり頭に浮かぶ……。

火夫たちが食ひものを持つて來てくれても、おれたちはそれを見向かうともしなかつた。まるで食欲がない。咽喉がカラカラになつて、堪えがたい渴を覺えながら、しかも、ほんのちよつぱり水を呑んでも、胃の腑は忽ちそれを突きもどしてしまふのだ。

「もう、どのくらゐのあひだ航行してゐるのでせうか？」と、けだるさうにしてワーシエクが訊ねた。

「二日と二晩。」

「まだ、どのくらゐかかるでせうね？」

「五晝夜くらゐ。」

すると、ワーシエクは悲しさうに、

「それぢやあ、もう、とても僕はもちませんよ……。苦しいんです……。胸が、とても苦しいんです……。」

さういつて彼は、おれの傍から飛びのいて、鐵板の上で身もだえをしはじめた。おれはどうかして彼を落ちつかせようと思つて、いろいろ骨折つてみても、駄目だ。ろくろく彼は返事もしない。ただ押し殺された呻き聲が漏れるのみだつた。

鐵板は、まるで誰かが故意に熱してでもゐるやうに、いやが上にも熱くなつて来る。火夫がくれた防水布を敷くと少しは樂になつた。彼らはたびたび冷たい水を持つて来てくれた。その水をからだに撒^らかけて、やつと元氣をつけてゐるのだ。しかし、ほんの二三分間たつと、一層悪いことには、濡れた服が燻まつて来ると、それが體にへばりついて、ひどく肌を引きつら

せるのだつた。

氣をまぎらさうと思つて、ワーシエクに話しかけてみる。

「ロンドンには、誰か君を待つてゐるのかね？」

「ええ、仲のいい友達がゐるのです。」

「ずつと前から彼方^{あちら}にゐる人なの？」

「去年の秋あちらへ行つたのです……。その男^{ひと}もやつぱり、僕たちと同じやうにして渡つたんです……。でも、もつと樂に行けたらしいんですよ……。手紙の様子では……。」

ワーシエクはそれ以上、話しつづける氣力がなくて、口を噤んだ。

おれもやはり、もうとても我慢ができなくなつた。全身がぐつたりして、妙に氣が遠くなつてしまふ。

幾度もトロフィーモフがやつて來た。彼がおれたちのことでひどく氣をもんでゐるのが、よく分つた。彼は何か思案にくれて、ひとりでブツブツ呟きながら出て行くのだつたが、やがて、何か心にうなづいて、きつぱりと、かう言つた。

「君たちを石炭庫へ移すことにしよう。それより他には方法がない。石炭を貯めておく穴があるんだよ。その中ならエルシヨーフの野郎にも見つかることはあるまい。萬一、奴が見つげや

がつたら……。」

さう言つて口を噤むと同時に、彼はまるで鐵でも噛み切らうとするもののやうに、キリキリと大きく齒ぎしりの音を立てた。そして憤りにふるへながら投げだすやうにきつぱりとした聲で言つた。

「ええつ、あん畜生め！ 蠅か何ぞのやうに壓し潰してやるぞ！ いんにや、さうでねえ……。爐の中で焼き殺して、灰にして、海へばら撒いてやるんだ。おれは、自分の手でそれをしてやる！ そんな時にやあ、面と向つて奴にさう言つてやるんだ！ ビクつくことあねえよ、なあ、きやうでえたち……。」

石炭庫へ移されることについては、おれたちはもはや反對しなかつた。おれたちは、ただ一刻も早くこの焦熱地獄から解放されたいと思ふ心でいつばいだつた。

しかしトロフィーモフが姿を消すよりも前に、おれたちのところへ、もう一人の水夫が飛びこんで来た。四番のボイラーに何か故障が生じて、機械手がいま修理をしてゐるから、それが済むまでは、おれたちを連れ出しては危険だと報らせに來たのだ。

「ぢやあ、もう暫くここにじつとしてゐねえよ。」さう命じておいて、トロフィーモフは出て行つた。

又しても、おれたちは爐蓋の上でかなり長いあひだ辛抱しなければならなかつた——たぶん五時間か六時間も経つたらう。時間の歩みがまるで停滞してしまつたやうに思はれた。おれたちはすつかり力が抜けてしまつて、もう立ちあがることも、いや、それどころか、坐つてゐることさへ出来なくなつた。尙そのうへに、濁つた空氣はいやがうへにも汚れを増して、おれたちは時どき、干潟へ打ちあげられた魚のやうに、口を開けては息を吐いた。水は無い。そのあひだにも熱度はますます上昇するばかりだ。灼熱した熱氣がおれたちを焼きつけ、身内にとほつては内臓をカラカラに乾かしてしまふ。

おれたちは今にも窒息してしまひさうな氣がしてならなかつた。

ワシエクの様子が少し變になつて來た。彼はまるで、灼けきつたフライパンの上へ乗せられた泥鰌のやうに、跳ねたり、這ひまはつたりしながら、泣き聲をあげたり、苦しさうな嘎れた呻き聲を立てたりする。おれは二度ばかりマッチを擦つて、彼を落ちつかせようとしてみたが、それから後は、すつかり彼のことなど忘れてしまつた……。おれの耳の中がガンガン鳴つてゐる。何か重苦しいものが心を押しつける。ひどく睡氣がさす。が然し、灼熱した鐵板の上で輾轉反側しながらも殆んど五分ごとに眼を覺ました。おれは頭をかばふことが出来ない。頭が熱のためにバラバラに解體してしまひさうだ。時とともに、いよいよますますいけなくなる

ばかりだ。意識が混濁して来る。切れぎれの記憶がものうく渦をまく。今にも失はれやうとする意識の中に、また新らしく怖ろしい光景がまざまざと浮かびあがる。

おれは奇妙な穴の中にあるのだ。上には大きな山が聳えてゐる。暗くて窮屈だ。どうしてこんなところへ落ちこんだのだらう？ わからない……。出口をさがす……。腹ばひになつて這ひまはる……。さきへさきへと、まる一露里か、それ以上も這つてゆく。たうとう力が竭きてしまふ。それでも、まだ天日を仰ぐことができない……。ああ熱い、苦しい！ 後へ引きかへす……。からだは挟まつてしまつて……。どうしても、その場から抜け出すことができない。聲をあげようとしても、舌が動かぬ。聲は徒らに地下へ吸ひこまれてしまふのだ……。いよいよおしまひなのかしら？

何かに衝きあたつて、やつとおれは悪夢から醒めたが、尙しばらくのあひだは正氣に戻ることができなかった。胸の中では心臓がただならぬ鼓動して、額には玉の汗が吹き出した。

誰かが、おれの顔を殴つては罵つてゐる。

「恥知らず！ 出て行け！ お前なんかに見られてなるものか！」

聲から、それがワーシエクであることに氣がつく。

「どうしたんだ？」

「悪黨！」

やがて彼は、力なくおれの膝へ頭を落して、ビクとも動かなくなつた。

呆氣にとられて、おれは暫くのあひだ、いつたいこれはどうしたことだらうと、思ひ惑ふのだつた。

船は依然として揺れてゐる。何か、さざめき、鳴り、呻くやうな音がする。

精も根もつき果てておれは横に倒れる。そして二分間ばかりすると、再び、黒い、見とほしのつかぬ霧のやうなものが、おれの意識を蔽つてしまふ。熱に浮かされた病的な頭は、またしても取りとめもない幻覺を描きはじめる……。おれはどこか海岸に寝ころんでゐる。濁つて波だつた水面を、何か長いものがうねうねとうねりながら、おれの方へ近づいて来る。それが見る見るおそろしく巨大なものになる……。何だらう？ パツクリ大口をあいだ海の怪物がおれを睨んでゐる。南無三、おれは丸呑みにされてしまふ！……。痛みはない。どこか下の方へ降つてゆくかと思ふと、再び上へあがつて来る。ああ分つた！ 怪物が海の中をもぐつてゐるのだ……。と、怪物が一方へでんぐり返りを打つた。おれは石のやうに固い胃の壁でひどく頭をぶつた。熱い。もう駄目だ。足がなくなつた……。手もなくなつた。こんな筈はないぞ。いつた

い何處へ手足が隠れてしまつたのだらう？

おれはからだも心臓もなく、ただ頭だけで生きて

あるのだ。何もかもが消えてしまふ。

七

おれが正氣にかへつた時には、もういつの間にか石炭庫へ移されてゐた。おれの傍には手提ランプがおかれて、その灯がチラチラと明滅しながら、汚れた硝子ごしに、微かに光を放つてゐる。あたりは薄暗く、陰影が靜かに揺れてゐる。船體の動揺はほとんど感じられない。どこか、遙か遠くの方で、機關の音が單調に響いてゐる。咽喉が痛いほどカラカラに干からびてゐる。

トロフィーモフが屈みこんで、おれの頭を冷たい水でひやしてゐる。頭の中がまだガンガン鳴つて、顛顛が割れるほど痛む。

「ああ、ミトリツチ、ミトリツチ、えれえ災難だつたなあ。」かう、トロフィーモフは、おれが眼を開けたのを見つけて、不安さうに言つた。

おれは物問ひたげに彼の顔を見つめた。

「二度までこんな酷い目に合つちやなあ！」と、彼がつづける。「ここへは君たち二人を抱きかかへて連れて來たんだよ。早くいへば、まるで死んだやうになつてゐたのさ！ もう、これ

でまる一時間も、息を吹きかへさせようとして、てんてこまひをしてゐたのさ。」

彼は冷たい水の入つたコップをおれの方へ差しだした。おれは寢たまま、それを貪るやうにして呑んだ。その水のお蔭で氣分がさつぱりした。

「で、ワーシエクは？」と、おれは自分の同伴者のことを訊ねた。

「すつかり駄目なんだ！ そら、そこに寢てるだろ、ビクとも動かないんだよ。」

おれはそちらを見ようとして少しからだを起したが、右の脇腹全體が引き裂かれるやうにおそろしく疼くので、また、もとの場所へぶつ倒れて、胸のどん底から悲鳴を漏らしてしまつた。どうしたのだらう？ おや、これはどうだ！……おれは脇腹と顔とに、ひどい火傷をしてゐるのだ。兩方の頬が腫れあがつてゐる。

トロフィーモフは哀傷に充ちた眼でおれを見つめながら、小聲でかういふのだつた。

「いつたん悪運に見こまれるてえと、何ともしやうのねえものさ。ほんとに何といふ忌々しいこつたらう！ ええ、お前のその……。」

非常な努力をはらつておれはワーシエクのそばへ近よつて、その顔をのぞきこんだ。汚れて、げつそり瘦せた顔は、まるで息も通つてゐないもののやうで、兩の眼は固くとざされ、半ば開いた口からは綺麗な白い齒が光つて見えてゐる。脈を見れば、非常に微かではあるが、まだ確

かにある。

「今すぐに水を持つて来るからなあ」と、トロフィーモフが言った。「よく、冷やしてやらうよ。助かるかも知れねえから。」

間もなくペトロフが大きなバケツを提げて入つて来た。

ワーシエクの顔と頭に何度も冷水を濺ぎかけては、からだをゆすぶつて見たり、左右にころがしてみたりしたけれど、何の効果もなく、ワーシエクはまるで死人のやうに横たはつてゐるだけであつた。

みんなは、汗ばんだ疲れきつた顔をさし寄せながら、長いあひだ、いろいろと手を盡したり、耳をあててみたり、ゆすぶつてみたり、撫でさすつてみたりした。

「胸をしめしてやらなくつちやあ。」と、しまひにペトロフが提言した。

誰もそれに答へる者がなかつた。そこで彼はワーシエクの上へ屈みこんで、ネクタイを解き、チヨツキとシャツの前をはだけた……。

と、不意にペトロフは、何か眼に見えぬ力に弾かれてもしたやうに、矢庭に後ろへ飛び退きざま、サツとからだを起して、大きな汚れた兩の手を擴げながら、驚愕と疑惑の眼差でおれたちの方を見かへつた。

「どうしたんだね?」と、おれが訊ねた。

「ざつぱり分らねえ……。これあ變だぞ……。どうも! いつたい、どうしてこんな……。」そしてペトロフは妙にあはてながら、仕事に夢中になつてゐるあひだにボタンがはづれてずれ下つてゐた脂染みたジャケットの前をかき合はせるのだつた。

トロフィーモフが手提ランプを取りあげて、ワーシエクの間近へ持つて行つた。

この時、おれたちはびつくり仰天してしまつた。自分で自分の眼が信じられず、これが夢でなくて現實であることが疑はれさへした。

おれたちの眼の前に横たはつてゐるのは、疑ひもなく一人の女だつた。ランプの弱い光線があらはに露き出した處女の乳房を照らしだしてゐる。一同は餘りのことにおつたまげて、互ひに顔を見合はせるばかりで、言葉もすぐには出なかつた。

「これは女でねえか!」と、吐息をつくやうに口走ると同時に、トロフィーモフは力なくランプを石炭の上へおろした。

「さうよ!」と、ペトロフがやつと重苦しさから救はれたやうに答へた。

おれたちもやうやくわれに返つた。

おれは、女が正氣に戻らないやうに、その胸もとをかき合はせてやるやうにと注意した。

水夫たちもそれに同意した。

しかし、彼らの一人が手を下さうとした時、はやくも彼女は正氣づいて、不思議さうに、あちこちを見まはし始めた。

どうやら自分のゐるところが何處だか、合點がゆかぬらしい。

ほのかに灯がともつてゐる。棒立ちになつた火夫たちが殆んど天井へ頭をおしつけるやうにして、言葉もなく立ちほだかつてゐる。薄暗がりの中で、彼らの姿は實に奇怪なものに見える。煤煙に汚れて、ぐるりの闇と區別のつかないやうな彼らの顔には、白眼だけが物凄く光つてゐる。そればかりか、顔の見分けもつかぬほど酷い火傷をしたおれが、石炭の上へ両手を突いて膝立ちをしてゐるのだ。彼女は叫び聲をあげようとするでもなく、憐れみを乞はうとするでもなしに、顔を變にゆがめた。堪へがたく胸苦しい沈黙の中に、暫くの時が経過した。やがて彼女はハッキリと意識を取りもどした。異常な努力をもつて首をもたげると同時に、彼女はあらはになつた自分の胸もとに氣がついて、わつとヒステリックな叫び聲を立てるとともに泣き伏してしまつた。

火夫たちは手の下しやうもなく、頼りなげにおれの方を見つめてゐたが、おれの合圖にうなづいて、石炭庫から姿を消した。

またもや眞暗になつた。女は泣きつづけてゐる。それを聞いてゐるのが堪らなく辛い。なだめにかかつてみたが、彼女がやつと我れに返るまでには、かなり永い時間を要した。

「あなた方は、あたしを辱めようとなすつたのでせう？」と、絶望的な調子で女が訊ねた。

「飛んでもない。」と答へて、おれは彼女に事の顛末を話してきかせた。

「でも、あたし、どんなにびつくりしたでせう！……」と、彼女はまだ泣きじやくりをしながら言つた。

おれは彼女に冷水を飲ませた。女はだんだん落ちついて來た。

女にからだの具合をたづねると、ひどくいけないと訴へる。恐ろしい高熱だ。胸もとがゼーゼー鳴つて、呼吸がいかに苦しきさうだ。そればかりか、彼女も腕にひどい火傷を負つてゐるのだつた。

動搖はすつかり止んだ。

船は殆んどそれと分らないくらゐ、ほんの僅かに揺れながら、なだらかに航行してゐる。暫くするとおれたちの耳へは、錨チヤーンをおろす鎖チヤーンの音が聞えて來た。ついで、あたりがシーンと静まりかへつた。

「停船したらしいのね？」と女が訊ねた。

「たしかに、さうらしい。」

「もしか、もうロンドンへついたのぢやないでせうか？」

「さうかも知れないね。」と、今だにあの爐蓋のうへで過ごした時間についての實際的な心證を持つことが出来ないで、おれは答へた。

さうした想像が、おれたち二人を何ともいへぬ喜びに導いた。

女はもう笑顔さへ見せかけて、その音聲もしつかりして來た。かなり努力してではあつたが、彼女はもう談話をすることが出來た。どうやら彼女の元氣が回復したやうだ。それには、おれたちのゐる場所の適當な溫度があつて力あつた。

同様におれも氣分がよくなつた。とりわけ火夫たちが置いて行つてくれた麵麴を少し食ふといつそう元氣がついた。

「君の名前は？」

「ナターシャつていひますの。」と女が答へた。

おれが、こんなところで男裝した彼女に出會つた不審さをちよつと仄めかすと、彼女は早速、自分から進んでそれを説明しだした。

「あたし、屹度あなたは同志の方だと存じますわ。」と、彼女は親しみ易い口調で話しはじめ

た。「だから、てつとりばやく何もかも包まずお話しいたしますわ……。あたしたち、他の同志といつしよに官憲に抵抗しましたの……。騒ぎが起りましたね、敵にも味方にも殺傷沙汰がありましたわ。そしてあたし捕まつてしまつて、獨房にながいことほりこまれてゐましたの……。未決に。殺してしまふなんて嚇かされて、ずるぶん辛い思ひをいたしましたわ。とても我慢がならないのです……。すつかり氣持が滅入つてしまつて、しまひには自殺をしようかと思つたくらいでしたわ。そのうちに、逃げてやらうと思ひついで、氣の狂つた眞似をしましたの。でも永いこと、それを本當にしないで、いろいろと驗したり、責めたりされましたわ。けれど、あたしはどこまでも強情を張りとはしました……。時には、自分でもほんとに氣が狂つたのではないかと思はれるくらいでしたわ。たうとう終ひに病院へ移されました。思ふ壺にはまつた譯ですわ……。ちよつと待つて下さいな……。ああ、物をいふのが、とても苦しいんですの……。胸に何かつかへて……。息切れがして……。」

彼女は少し言葉を休めた。

「そんなことで、やうやくあたし自由の身にはなつたのですけれど、いつたい何處へ身を隠したらいいのか、さつぱり分らなかつたのです。お金もなければ、あてになる知合もなし、さあ、どうしたものかと途方にくれてしまひました。でもお終ひに、やつと一人たよりになる知合の

女を見つけてきました。貧乏で子だくさんの女でしたけれど、その人のところにかくまはれてゐましたの……。でも、非常に危険なところで、いつまた捕まらないとも限らなかつたのです……。それで髪を断つて、男装して、すっかり青年の姿に化けて、やうやく一週間ばかりのあひだに、どうにか旅券も手に入れました……。そんな風にして、あたしは三ヶ月ばかりのあひだ、その知人のところで過ごしましたの……。そのあひだにエゴールと手紙のやりとりもいたしましたの。そのひとは、今はロンドンにゐるのですが、あの人のことをあなたにお話しいたしませんでしたかしら？」

「それは、これから君が訪ねて行く友達なんでせう？」

「ええ、さうですの……。是非イギリスへ来いつていふんです。ですけれど、お金を送つてくれるといふ譯にはゆかないんです。自分自身が食べるのに困つてゐるんですもの。あたしはもう、飛び立つ思ひだつたんですけれど、その知合の女があたしにお金を少しばかり都合してくれましたけれど、とても旅費には足りません。そんなことから、思ひきつて密航をしようといふ氣になりましたの。ちやうどお誂へむきに、男装はしてをりましたし……。あたしはずいぶん、いろんな目にも逢つて参りましたわ。運命は……。あたしの頭を撫でてはくれませんでしたもの。ですから、こんな大それた非常手段も、あたしには別段、おそろしくはなかつたのです

……。もともとあたしは冒険が好きなんですわ、さういふ生れつきなんですのね。でも、こんな怖ろしいことにならうとは、つひぞ思ひがけませんでしたわ……。何だか、あたし……。また息がつまりさうで……。何だか……。」

ナターシャの聲が不意に途ぎれた。ながいあひだ切なさうに咳きこんでゐたが、しまひには何かに噎せてゐるやうな様子だつた。

「火をつけて下さい……。」と、彼女はやつとそれだけ言つた。

マッチを擦つて、おれはギョツとした。女は口から血を吐いてゐるのだ……。

二三分すると、ナターシャはブルブル震へて、ゼーゼーと嘔れ聲を立ててゐたが、そのうちに急に知覺を失つて、殆んど生きてゐる微候もなく、その場へふんぞり返つてしまつた。

おれはどうしてやることも出来ず、その傍らに坐つてゐたが、疲勞困憊の極、間もなく自身も石炭の上へぶつ倒れてしまふと、そのまま氣が遠くなつて、すっかり何もかも忘れてしまつた。おれの頭の中には何ひとつ考へらしいものがなくなつた……。が、不意におれは、何かにシカツと螫されたやうに、急に跳ねあがつた。鼠が手に噛みついたのだ。おつそろしく澤山の鼠群だ。おれたちの食ひ物は残らず食ひつくされてゐた。多分、血の臭ひに誘はれたのだらう。彼らはおれたちの上を飛び越え跳ね越えしながら、絶えず神経をいらだたせるやうな鳴き聲を

立ててゐる。ちよつとの間でもじつとしてゐやうものなら、からだぢゆうをこの飢^かゑた鼠群に喰はれてしまひさうだ。

八

食物を運んで来てくれた火夫のペトロフが、おれたちの船はキールへ寄港して三時間ばかり停泊しただけで、また先きへ航行をつづけてゐるのだと語つた。

さうすると、おれたちはロンドンへ到着するまでに、まだ四晝夜を航海しなければならぬ。勘定だ。

おれたちの一時的な喜びは、がっかりした幻滅に變つてしまつた。暴風がまたもや強くなつて、囂々といふ海の唸りがきこえた。船が動揺^{ぶぶ}りはじめて、おれたちにも再び大洋へ出たことが分つた。まづ暗だ。おれは石炭夫に見つかるのを怖れて、マツチもたまにしか擦らない。

停船中に、おれは少し氣力を回復してゐたが、ナターシャの方はますますいけなくなつた。ずつと石炭の上へじかにころがつたまま、食物も全然とらぬ。

「焼けるやうだわ。」と、彼女は訴へるのだつた。「とても苦しいわ！ 胸もとに鉛の熱湯でも

問へてゐるやうで。」

おれは彼女の頭を持ちあげて、自分の膝の上へのせた。

彼女は悲歎にかきくねながらも言葉をづづける。

「ねえ、同志^{メツライシチ}の方、ほんとに残念でたまりませんけれど……あたしはこのまま、この呪はしい穴のなかで死んでしまふのです……もつと立派な死に方がしたかつたのだけれど……何かお役に立つて。」

「氣を落しちやいけないよ。」と、おれは慰めた。「どうしたつて、お互ひにロンドンまでは行きつかうね。」

「まあ、さう出来たら……どんなに、あたし幸福でせう……。それにエゴールが、どんなにか悦ぶことでせう！ ですけど、あたし、とてもそれまではもちませんわ……。」

「御両親はあるのですか？」

「ええ父だけ……母は息子が銃殺されたことを知つた時、死んでしまひましたの……悲しみに堪へることが出来なかつたのです、頓死してしまつたのです……。父の方は、二三ヶ月のあひだに急に老いこんでしまひました……腰が曲がつて……今、ひとりぼつちで暮らしてゐますわ……あたしには、父を助けることもできないのです……。」

ナターシャは泣きだした。

おれは質問をやめて、深い物思ひに沈んだ。

何かしら重苦しい、身に覚えのある、佻しい氣持が胸許につかへて来る……。

暴風はだんだん烈しくなつて、つひに最も猛烈な勢ひに達した。狂暴な唸り聲が、鐵の壁を
とほしておれたちの耳にとどいた。

船腹の外で、猛烈な力と力の争闘が演じられてゐることが、まざまざと感得される。ドスン
ドスンと船べりを打つ波の音が次ぎ次ぎに連續する。船は右へ左へ傾斜しながら、まるで生き
もののやうにブルブルと身震ひをする。時々、一瞬間づつ、何ごとかを考へるやうに、進行を
停止するかと思ふと、今度はまた不意にひつさらはれるやうに、物狂ほしく突進するのだ。

初めのうち、おれはどうか我慢してナターシャのからだを支へてゐようと努めたが、おれ
たちは永くは動搖に對抗することができなかつた。激しい衝撃の度ごとに、おれたちは轉倒し
て、こちらからあちらへ、あちらからこちらへと、轉がされて、舳ふなびりへからだをたたきつけられ
た。石炭は、火夫たちの言ひ草ではないが、まつたく「歩きまはる」のだった。大きな石炭の
塊は、おれたちと一緒にごろごろところがつて、おれたちを炭粉だらけにしたり、尖つた角で
突き刺したりした。一分間として、ほつとする暇もなかつた。とりわけ、火傷をした脇腹を打

つつける時などは、堪らなく痛かつた。

一分一分にナターシャは衰弱が度を加へてゆくらしく、失神状態に陥つては讒言を口ばしり
だす。

「そんなに押しこかしちゃ、いやあよ……あたし痛いの、さうよ、さうよ……。あたし、そん
なこと、とても出来ない……捕まつてしまつてよ。」

だんだん、彼女が意識を取りもどす度數が減つてゆく。

一度、彼女が正氣にかへつた時、かうおれは訊ねてみた。

「具合が悪いの、ナターシャ？」

「早く死んだ方がましですわ……おお神さま！……おお呪はしい……。」

トロフィーモフが自分の敷蒲團を持つてやつて來た。その上へ女を寢かせてみたけれど、一
秒ごとに彼女は蒲團からころげ落ちた。

一晝夜たつた……いや、もつと長い時間が経過したのかも知れない。しかし暴風は依然とし
て止まない。火夫たちの話では、波が上甲板を洗つて、ボートを一隻おし流してしまつたほど
で、難破の危険が迫つてゐるとのことだ……。

いつか我れに返つたナターシャが傷ましげに叫んだ。

「もう、いや、いや！ あたし怖い……上へつれてつて……。」
 「だつて、そんなことをしたら、船長につかまつてしまふぢやないか。奴はわれわれを官憲に引き渡してしまひますよ……。」

女はまたもや謔言をいひだした。

舷の際までおれたちはころがつて行つた。そして暫くひとところにならんで横たはつてゐた。と、不意に女がおれの胸にすがりついて來た。彼女は兩腕をおれの頸に巻きつけた。火のやうな烈しい呼吸いきづかひが感じられる。

「愛しい、愛しいエゴール……。」さう彼女は、おれの顔に接吻しながら囁くのだ。

猛り狂ふ大自然の不吉な叫びの中で、おれたちの避難してゐる穴の中の息づまるやうな暗黒の底で、今にも死にかけてゐる、この見ず知らずの女の、病的で節度のない愛撫が、重苦しい凍てつくやうな恐怖をもつておれの全心全靈をみたした。

「大事な、大事な人！」

しかし、この時おれを助けるやうに、一際はげしい突風が起つて、怖ろしい勢ひで船を傾斜させたため、おれは、瞬くまに反対側の舷へ持つてゆかれて、鋭く突つた石炭の破片かけで頬の火傷をいやといふほど突かれた。

もう一度ナターシャは最後に意識を取りもどした。まるで夢うつつのやうに、おれは彼女の弱々しい聲を聞いた。

「同志……ドミートリツチ……。」

「おれはそれに氣づいて、」

「どうしたんだね？」

「もう死にさうです。」彼女は、さながら自分の運命に甘んずるもののやうに、さう言ふのだつた。

大急ぎでおれはマッチを擦つて、ナターシャを見た。

負傷をして、石炭の粉にまみれた顔は痛々しかつた。眼には涙が宿り、深い絶望の色をたたへて、悲しげにこちらを見てゐる。

「あたしの錢入の中に……所書きがあります……。お話しなすつてね……エゴールに……。あたし……あたしは、出かけたんだつてことを……。ああ、もう駄目……。」

呻くのだ。最後の力をこめて、しまひまで言つてしまはうと努力しながら、

「何もかも……話して下さい……どうなりと……なる……。」

彼女は最後まで言ひきることが出来なかつた。



おれは彼女の傍へにじり寄つた……が、もうおそかつた！ 彼女はすでに斷末魔の苦しみに陥つてゐた。おもむろに死がその權力を行使しようとしてゐるのだ——絶對の力を持つ冷酷無情な死が……。深い一呼吸……。そしてもう一度……。それで、すべては終りだつた。おれは屍を抱いて坐つてゐた……。

それから、おれは傍らへ這ひ退いて、石炭のうへに横になつて両手で顔を蔽つた……。上下動がはじまつた。これは風が正面にまはつたためだ。まるで何びとかが巨人のやうな手でマストを擱んで、玩具のやうに空中で振りまはすのかと疑はれるほどの狂暴さをもつて、船は揉みに揉まれる。おれは絶えずあちこちへ、コロコロと轉がされた。前と同じやうに石炭がぶつかつて来る。傷だらけのからだに痛みを痛む。誰もやつて来る者がない。だんだん氣が遠くなる。もはやおれの死も免れがたいやうな氣がする……。

どうしたのだらう、誰かおれの上へのしかかつて来るやうだ。觸つてみる……ナターシャだ！ しかし彼女はもう死んでゐる筈ではないか！ 動物的な無我夢中の恐怖が、おれの心を充たした。前後を忘れておれは叫び出した。

「たすけてくれい……たすけてくれい……」
誰かがおれの肩をひつぱつて聲をかける。

「ミトリツチ！ 大きな聲を出しちや駄目だよ！」

眼を開く。おれの前には、手提ランプを持つたトロフィーモフが立つてゐる。

「どうしたんだい？」

「死人が……おれを、追ひまはすんだ。」と、なほも身震ひをしながら、おれは答へた。

「ちやあ、たうとう死んだのかい？」

「死んだよ。」

彼はナターシャの死骸をしらべた。

「なるほど、ほんとだよ！」と、死人の傍らにうづくまりながら、聲を落してトロフィーモフが言つた。「たうとう保たなかつたんだなあ！ こんな若い、か弱い身で……。」

彼の眼には涙が宿つてゐた。彼は頭べを垂れて物思ひに沈んだ。

「うん、さうだ、粥をたいて來たよ。すこし食はなきや駄目だよ。」と、不意に立ちあがつてトロフィーモフが言つた。彼の顔はキツと引きしまつた。「なあ、食ひねえつたら、きやうでえ！」と、彼は、おれが反對でもするかのやうに、じつとおれを見すゑながら、言葉をついだ。「まだ、あの石炭夫の野郎が、どんなことで飛びこんで來ねえにも限らねえんだ……そんな時にやあ、どうなるんだ！ 犯罪が……。」

死骸を抱きあげて、彼は後ろの鐵壁の根本へそれを運んだ。そして手早く石炭を掻きのけて穴を掘つた。

それから先き、おれはどうなつたか？ ただ火夫たちが代るがはるおれにつきそつて、血だらけのおれのからだを敷蒲團の上へ押へつけて、おれが石炭といつしよに穴の中ぢゆうを轉けまはらないやうに、支へてゐてくれたことだけしか憶えがない。

九

あらしはをさまつた。何の音も立てず、衝撃もなく、船はしづしづと航行してゐる。穩やかな波のうねりに微かに揺れるのみだ。

が、その代りに今度は鼠があばれ出した。又しても闇のなかに、彼らの鳴き聲と騒々しい足音が聞えだした。この貪慾な小動物は活動を開始すると共に、時々おれのからだへ襲撃して來る。石炭庫にゐるのはおれ一人きりだ。どうにか鼠群の攻撃を防ぎながら、おれはすつかり打ちひしがれ、衰弱しきつた五體を蒲團のうへに横たへてゐるのだ。ただの一分間も眠ることが出來ない。頭では何を考へることも出來ず、時の経過も遅々として渉らぬ。

火夫たちは、ナターシャの死んだことを知つて、ひどく驚愕した。彼らは何となく良心に咎

められるのだつた……どういふわけで——といふことは、はつきりしないながらも、若い一つの生命が、理由もなくうしなはれてしまつたといふことは、ある程度まで、自分たちのせみだと思ふからである。それよりも、こんな場合に一層彼らを悩ますのは責任問題だ。ナターシャの屍は二晝夜のあひだ、そのままになつてゐた。どうしても好い機會がなくて、それを處分することが出來なかつたのだ。汽罐かまの火で焼却しようかとも思つたのだが、誰ひとり、先きに立つて手を下すものがない。不安と危険とが神経を驅り立てて、彼らに安息を與へないのであつた。

おれの容態については、トロフィーモフが誰よりも心をいためた。彼はちよつとの隙でもあれば、おれのところへ來てくれた。

「君まで死んでしまやしねえかと、それが心配なんだよ。」と、氣がかりさうに彼は、おれのことをひどく案じるのだつた。

「なあに、もう大丈夫きり抜けるよ。」と、おれは彼を安心させながらも、自分の言葉に自分で信用がおけなかつた。

「それあまあ、さうだなあ、見たところがつちりしてるやうだから。だが、あんなことのあつた後だから、何だか心配なんだよ。」

一度、彼はおれと無駄口を叩きながら、長いこと坐りこんで、自分のマドロス生活についていろいろと物語った。彼といつしよにみると、話の相槌をうつのが、かなりおれには骨だつたけれど、よほど気分が晴れた。

「ずるぶん、いろいろの船に乗つたんだろねえ？」と、おれは彼に訊ねた。

「いろいろすぎらあな、七つも船をとつ換へたよ。」

「なるほどね、それでは密航者にも、たびたび出つくはしたことだらうね？」

「あたりめえよ。どんな船にだつて、二人や三人は乗りこんでゐらあな。船員と共謀の時もあれば、勝手に船へ潜りこんでをることもあるのさ。船艙か、またはどこかへ、こつそり身を潜めてゐるんだが、食ひ物や飲みものを持つてをれば、まだしものこと、何ひとつ用意もせずに乗りにこんだ奴らは一體どうするんだ？ 數日のあひだ飢ゑをしのがなければならねえのにさ。」

「で、いつでも旨くゆくのかい？」

「いろいろさ……時にやあ旨くゆくこともあるが、時にやあ、えれえ目にあふのさ！ ただ間違えつこねえのは、みんな苦しい思ひを忍ばなきやあなんねえことだけさ。死ぬやうな目にもよくあふのさ。いつだつたか、ロシヤの港へ着いて荷あげにかかつたところが、柵のあひだから死骸が二つも出て來たものさ。どうして死んだのかといへば、多分、飢ゑ死にだらうなあ、

それとも暴風にやられて、そのまま參つてしまつたものか、それとも他に原因があるのか、はつきりしたことは分るもんでねえだよ……。」

トロフィーモフは巻煙草を喫ひながら、

「さうさう、こんなことがあつたつけないあ。四年ほど前のこと、おいらはある船に乗り組んでゐたんだ。それは、てつきり畏だつたんだがね、ロシヤの港へ入るてえと、ちやんときまつたやうに密航者が捕げられるんだ——それもきまつて同じ、操舵室でつかまるんだよ。長いこと、おれたちはその謎を解かうとして頭を絞つたものさ。しかし、たうとう終ひにその疑問が解けたよ。舵手の野郎が官憲のスパイだつたんだ！ 奴はそんな風にして外國から手あたり次第に密航者をつれて來てはロシヤへ賣りわたしてゐたんだよ。おれたちはそ奴の行動を調べあげて、結局、辛い目を見せてやつたがね……。」

「どんな目にあはせたんだい？」

「船乗りがかうと思つたことは、どんなことだつてやつて退けるさ。海千山千の向ふ見ずばかりだからなあ。その野郎が夜中に甲板へ出て、舷に立つてゐやがつた時にだよ、それは暴風のひどい夜だつたがね、おいらの友達で、おつそろしく腕つ節の強い機關士が、こつそりとその野郎の後ろへ近づくなり、兩足をひつ掴みざま、やつと掛聲もろとも奴を舷の外へ投げおろし

てしまつたのさ！ それこそ眼にも止まらぬ早業で、その野郎はアツといふ聲ひとつたてる暇もなかつたくれえよ。ちえつ、碌でなしの舵手めだつたが……。」

トロフィーモフは口を噤んで、ちよつと何か考へてゐたが、

「この頃ぢやあ何だなあ、外國へ外國へと出てゆく者の方が多くなつて來ただなあ。」と、まるで自分で自分に言ひきかせるやうに、彼は感慨ぶかさうに話しつづけた。「だが、以前にやあ、反對にロシアへ入りこむ者の方が多かつたよ。どうも、きやうでえ、世智がらくなつて來たもんだなあ、國民がチリチリバラバラになつて、みんな、自分勝手な暮し方をしてゐるんだなあ、私利私慾に目が眩んで、互ひに共喰ひをやつてるんだ。ちえつ、何といふ浮世だ！ 何もかも見るのもいやになる！……」

トロフィーモフは、なほいろいろの話をしたが、おれはあまり氣力を使ひすぎたため、頭がひどく疲れて、彼の言葉を理解することが出來なくなつた。で、おれの耳には、内容も意味もない、ただ調子のいい音聲だけが、子守唄のやうに聞えるばかりだつた……。

おれはそのまま睡りこんでしまつた。

いよいよ最後の夜だ。明日はロンドンへ着くのだ、おお一刻も早く！

石炭は穴からどしどし減つてゆく。うっかりするとおれはその穴の中へ落つこちさうだ。

夜中すぎに石炭穴へトロフィーモフとペトロフとグリーシャトクの三人がやつて來た。一人は手に繩を持つてをり、一人は防水布を用意してゐた。みんなの顔がひどく緊張して、不機嫌さうで、何か不安らしい眼つきをしてゐる。

「おとむれえをやりに來たんだよ。」と、トロフィーモフがおれに告げた。

火夫たちは死屍の方へ進みよつた。おれも最後に一と目死人の顔を見ておかうと思つて、どうやらかうやら足を曳きずるやうにしてみんなの後に従つたが、まるで酔つばらひのやうに足もとがふらふらした。

トロフィーモフがしやがみこんで、死人の足をうんうん引つばつた。

と、おれたちの眼前には世にも怖ろしい光景が展開した……：ナターシャは鼠に齧られてしまつてゐるのだ……：顔がすつかり臺なしになり、耳も鼻も唇も食ひとられ、黝んだ肉片がわづかに骸骨にこびりついてゐるばかりだ。齒がむき出しになつてをり、満足に残つてゐるのは眼球だけで、ぎよろりと物凄く一方へ斜視になつたまま凝固した、白眼ばかり大きい眼玉が、手提ランプの光りを反射しながら、あらぬ方を見張つてゐる様子は、さながらこの小さなからだに、破壊的な力が宿つてゐて、なにか最も信じ難い悪行をやつてのけようとでもしてゐるさうな形相で、何處にひとつナターシャらしい面影は認められない……。

「さあ、ぼつぼつ始めなきやあ！」と、息づまるやうな一瞬の後、トロフィーモフの嚴かな聲が響いた。「時間を無駄にすることあ出来ねえぜ！」

「おらあ、いやだ、いやだよ……。」グリーシャトクは、さう口走るとともに、こけつまるびつあはてふためいて石炭庫から逃げ出さうとする。

だが、咄嗟にトロフィーモフが彼のジャケットの襟を掴んでひき戻した。喚き聲とどたばた騒ぎ……。グリーシャトクは足をじたばたさせてゐる。片手で咽喉くびを締められ、片手で頭をなぐられながら、彼はその場へうづくまつて、ハアハア息を切らしてゐる……。

「卑怯者め！ 他人を破滅させたいといふのか！ この場でぶち殺してくれろぞ！」と、ひどくせきこんだトロフィーモフが、我れを忘れて唸るやうに呶鳴つた。

死人の斜視の眼球は、この思ひがけなく突發した騒ぎを眺めながら、×××××××××××××××、さながら惡逆無道な歡喜の色を浮かべて、ニタニタと地獄の笑ひをたたへてゐるかのやうであつた。

だが、その時、ペトロフが留め男の役を買つて出た。

「待ちなよ、きょうでえ！」と、彼はトロフィーモフの手を捉へながら叫んだ。「お前、いつたい、どうしようつてんだい？……。」

トロフィーモフは手を退いた。

やつと、その手を逃れたグリーシャトクは石炭の上へ這ひつくばつて、まごまごしながら呟いた。

「出て行きやあしねえよ……此處にゐるよ……何だつてお前、そんなに……。」

三人はいつしよに死人の始末に取りかかつたが、誰も同じやうに死人の顔を見ないやうに見ないやうにした。

お互ひに鉢合はせをしたり、手をからませあつたり、あまりあはててトンチンカンなことばかりした。それでもしまひには、どうにかかうにか、死骸を防水布に包んで、繩をかけた。

死骸は穴から運び出されて行つた。

しばらくすると、トロフィーモフが戻つて来ておれにかう報告した。

「やれやれ、おとむれえをすまして来たよ。」

「どうしたのだい？」

「海ぢやあ、どうして葬ひをするかつてこたあ、お前だつて知つてるぢやねえか、鐵のおもりをつけて、十字を切つてから、海の中へ沈めてしまつたのさ、石炭殻といつしよに桶へ入れて、捲轆轤で上甲板へ曳きあげてな。」

袖で顔の汗をふいて、ほつと息をつきながら、彼はやはりまだ昂奮してゐた。彼は不安さうにあたりを見まはした。

「なあ、きやうでえ、何といふこつたらう！」と、眉を寄せて首を振りながら、彼は訴へるのだつた。「ほんとに、何といふ縁起でもねえことだらう！……」

彼はすこし息をいれてから、おれを肩にかけて、もう一つの石炭庫へつれて行つた。その穴の石炭はほとんど無くなつてゐた。

おれはまたひとりきり取り残された。

この時になつて、初めて、ナターシャがおれに頼んだ所書きのことを思ひ出したが、もう遅かつた……。それは彼女のポケットに入つたままだつたから。

十

今しがたおれは、船がいよいよロンドンへ近づいて、テムス河をさかのぼりつつあることを知らされた。やがておれは船の停つた物音を耳にした。

おれの旅行も、いよいよ終つたのだ。

もう、無事に上陸さへ出来れば、おれは自由の天地に放たれるのだ！ おれは火夫たちが呼

び出して呉れるのを、今か今かと待ちわびた。妙に心もとないやうな氣持だ。今こそ、助かるか、身の破滅かの、どんづめだ。

二時間ばかり前におれは食事をした。それでよほど元氣になつた。體力も取りもどしたやうだ。立ちあがつてみる、大丈夫だ。少し骨をりさへすれば歩くことができる。

穴の入口の方から灯影がさした。

「ミトリッチ！」と、トロフィーモフがおれを呼ぶ。「さあ、早くこつちへ來ねえ。」

おれは彼の方へ近よつた。

「もう、おいらはすつかり検査もすんだんだよ。」と、彼はゼーゼー言ひながらおれに話しかけた。「イギリスの役人がおいらを調べをつたが、萬事オーケーさ。今、奴らは船の中を見まはつてるよ。禁制品を探してるのさ。さあ行かう。」

「何處へ？」

「汽罐室へさ。」

ためらふ暇も與へないで、彼は殆んど力まかせにおれを曳つぱり出した。彼は歩きながら、どんな風な態度をとれとか、何に用心しろとか、殆んどその意味を呑みこむことも出来ないほどの早口で、おれにいろいろ注意を與へた。

「しつかりしろよ、ミトリッチ！ しやんとしてゐなきや駄目だぜ！ なにより大事なことは勇氣を失はないことだ！ 誰がやつて來ても知らん顔をして、せつせと働いてるんだ。それだけのことだよ。それもほんの二三分のことさ。それで萬事終りだ、分つたかい？ なあ、どうからまく運をつかむんだぜ！」

おれたちは汽罐室の中へ入つて行つた。パツと明るくて、恐ろしく熱い。ボイラーは震へながら、單調に、誰にも譯のわからない一種獨特な歌をうたつてゐる。

氣づかはしさうに、汗みどろなトロフィーモフは爐の蓋を少し開けてから、おれの手に大きなクローバを渡した。

「これで、爐の中を掻きまはすのだよ。いいかい、おれが、仕事にかかる合圖をするのを待つてゐねえよ。火夫になりすましてるんだよ、わかつたねえ？ おれはそのあひだにウォーター・ゲージの掃除をはじめてゐるからなあ。まあ、どんな具合においらが奴さんたちをごまかしちまふかが見ものさ。ぢやあ、うまくやんなよ……。」

やがて、おれにはさつぱり意味の分らぬ話し聲がして來た。

「さあ始めた！」と、トロフィーモフが命令した。同時に彼の放つた蒸氣がシャーッと、すさまじい音を立て出した。

ちやうどその時、汽罐室へ數人のイギリス人が入つて來た。

衰弱しきつたからだを鞭うつやうにして、おれは身を屈めて爐の焚口をあけた。パツと焰の光が眼を射た。

おつそろしい熱だ。火掻きで白熱した石炭をつつくおれの手はぎこちなく、まるで鐵の梁でも持つてゐるやうな重さを感じる。火傷を負つた脇腹が、爪でひつかかれるやうに痛む。三四分たつた。力は萎えてしまひ、頭が、鉛でも詰められたやうにガンガンする。焚口がまるで炎炎たる火を吹く怪物の口のやうに思はれて、眼の中でグルグル廻る。

顛顛が緊めつけられるやうだ。たうとう脚を支へてゐることが出來ずに、がつくり膝が折れて、おれはその場に倒れてしまつてからハツと我れに返つた。南無三、奴らはおれを局外者だと感づくかも知れないぞ！ さうなつた曉には、すべての希望は水泡に歸して、おれは立ちどころに捕げられて、ロシヤへ送還されてしまふのだ……。

おれは懸命に頑張つた……一二度、聲を勵まして、さも平氣さうに亂暴なのしり聲を繰りかへしながら、あぐらをかくと、片方の足をあげて長靴を調べるやうな身振りをする……。焦眉の急が却つておれに勇氣を振ひ起させたやうに感じて、おれは靜かに最後のドタン場を待つことが出來た。

「きやうでえ！ 奴らは行つちやつたぢやねえかい！」と、トロフィーモフがおれの肩を掴んで激しく揺ぶりながら、喜ばしさに叫んだ。「助かつたんだつたらさ！ おい、わからねえのかい？ これが嘘なら、おれは石炭穴なかで斃くたばつちまつても構はねえよ！」感極まつたやうに彼はその大きな手でおれの襟髪を掴んだ。「おい、お前はまた、すつかり意氣地がなくなつちまつたぢやねえか！ なあに大丈夫だ、今によくならあ……。」

ほんとに助かつたのだといふことがわかりかかると、おれの胸は悦びで一杯になつた。

暫くして、トロフィーモフはおれを石炭庫へつれて行くと、早速おれの着物を取りに駆け出して行つた。だが、二時間ばかりしてから、やつと彼は片手におれの着物と豆ランプを持ち、片手に水の入つたバケツを掲げて戻つて來た。

「大變おそくなつて濟まなかつたよ。」と、彼はひどく沈んだ顔をして言つた。「あちらで一人捕あげられたんだ……。」

「何處で？」

「上でさ、貨物艙でめつかつたんだよ。防水布の下に隠れてやがつたんだ、見たところ労働者らしい、年のころ三十くらゐの男だよ。木工の野郎が連れこんでゐやあがつたんだ。いめいめしい、碌でなしの鈍馬野郎つたらないよ。ちやんと、かくまふべき場所へも、ようかくまひを

らんのだ！ ちえつ……。」

「で、今どこにゐるのだい？」

「船室に監禁されてるのさ。お前めえはまた、どこにゐると思つたんだい？ ところで、船長の鮫野郎が、どんなに悦びくさつたと思ふ！ その男を一目みると、おつそろしい形相をしやあがつてさ！ ちえつ、あの悪魔めが！ ロシヤへ送還するつてんだよ。まあ、好いさ、見てゐてやらあな……果してロシヤまで連れもどるかどうかな……。あつ、それはさうと、おい大將、みなりをちやんとしねえな。」

火夫に手つだはれて、おれは數分のあひだに、顔も洗へば、着換へもした。

トロフィーモフはおれを自分の船室へつれて行つて、テーブルに坐らせた。

「すこし落ちついて、からだを休めねえ、まさかの場合には、おれんところへお客に來たつていふんだぜ、それ以外のことあ何にも口をきかねえでなあ、街から——街からてえなあ、ロンドンからつてことよ——その街から訪ねて來たつてえことにしてさ。それあ實際よくあることなんだから。」

スーパを馳走してくれたけれど、すこしも食慾がなくて、やつとの思ひで咽喉を通したほどだつた、ただこれから先の旅のために少しでも氣力をつけておかうと思ふばかりに。

最後にトロフィーモフは清潔な布でおれの頬の火傷に繻帯をしてくれたが、汽鐘室のひどい火氣のために再びズキズキと疼きとほしてゐたのだ。それから彼は、

「さあ、そろそろ上陸しようぜ。」と促した。

上甲板へ出た。開放された昇降口を抜けて、舷門へ向ふ。

おれはぐるりの新しい世界へ貪るやうな視線を投げた。

晴れわたつた蒼白い空には陽が輝いてゐる。埠頭からは暖かい喜ばしげな春がただよつて来る。おれは伸びのびとして、深い深い呼吸をする。

荷役作業が今やたけなげだ。貨物を積みこんでゐる船もあれば、貨物をおろしてゐるのもある。潮風に顔の荒れた、のつぽで筋骨のたくましい船渠工たちは、まるで最後のドタン場へ来て一氣呵成に何もかもを決着してしまはうとするかのやうに、さも忙しさに、孜々として奴隸のやうに作業をつづけてゐる。貨物を満載した車がガラガラと音を立てて彼方へ去ると、その代りに空の車がこちらへ戻つて来る。汽艇が港内を横切りながら、まるで苦痛を忍んでゐるやうな、いたましい汽笛をならしてゐる。捲轆轤が響き聲を立ててゐる。人の叫びなどは労働日の港内の騒音にすつかり吞まれてしまふ。突然、おれたちの間近で、その騒音の混乱をつんざいて、あたりに響きわたるやうな、長い叫びがあがつた。おれは思はずあたりを見まはした。

それは、今や緑いろの波を蹴立てて埠頭を解纜しようとする大汽船が、告別のサイレンを送る音であつた。あ、むかふにイギリスの船渠がある……。おお、何といふ力の渦まきだらう、何といふ精神の緊張だらう！

埠頭だ……。多くの亡命者に隠れ家を與へたイギリスの埠頭だ！ 今おれはそれを自分の足の下に踏みしめてゐるのだ！ いや、まだ、これですべてではないぞ、まだ埠頭の外へ出なければならぬ。まるで波に運ばれるやうな氣持で、おれは前へ進んだ。いよいよおれは暗黒の地獄から救ひ出されて、精氣に充ちあふれ、騒々しく沸き立つてゐる世の中へ、熱情をもつて迎へ入れられたらしい。

埠頭の出口と、それから睡さうに見張りをしてゐる、嚴めしく肥つた、それでゐて犢のやうにおとなしさうな顔をした巡查が、眼の前にちらついただけで、もうおれたちは往來へ出てゐた。二つばかり街を横ぎつてから、狭い横町へ曲がつた。

「さあ、今こそお前は、空とぶ鳥みてえに自由のからだになつたんだよ。」と、トロフィーモフは立ち停つて、やさしくおれに言つた。「どこへでも好きな方角へ向つて行くことができるつてえもんだ。」

それから彼はポケットから何か取り出して、それをおれの方へさし出した。

「それあ、何だね？」と、おれは訊ねた。

「英貨だよ、何かの役に立つだらう。火夫一同の寸志だよ……。」

おれはその金を受け取る氣持にはなれなかつた。しかし彼の強ひての言葉を無下に退けることもできなかつた。

「ミトリッチ、もう一つ話があるんだ！」と、彼はあたりを見まはしながら、咳ばらひをした。彼の顔は陰鬱になつた。「船へ、ひとり男がやつて來たんだよ、教育のある人間に違えねえんだがね、乗組員に一々訊ねまはるんだ……。」

「ナターシャのことをだろ？」と、おれは氣がついて訊きかへした。

「さうなんだよ……(この船で僕の友人の若い男がやつて來た筈だ。船へ乗るすぐ前に出した手紙を受け取つてるんだ)つていふんだよ。そしておれたちにその手紙を見せるんだ。その男はもう三日も前から、あの死んだ女を待ちあぐねてゐたんだつてさ。見たところ、すつかり、しよげ返つてゐたよ。長いこと、誰彼なしにしつこく根掘り葉掘り問ひ糺してゐたつけが、ペトロフがその男から逃れようとして、自分から買つて出て、(ああ、その男ならやつて來たよ、若造で、いつしよに乗せて行けつていふから一時間ばかりしたら船へ乗せてやらうと思つて待つてゐたんだが、どこかへ雲がくれしてゐなくなつてしまつたのさ……)」と、その男に話した

のだ。それでも奴さん、まだいろいろと訊ねてゐたつけが、ペトロフは同じことばかり繰りかへしてゐたのさ。するてえと、なあ、きやうでえ、しまひにその男は、からだをブルブルツと震はせをつたよ。そして大きく溜息をついたきりで、それつきり何ひとつ口をきかねえで行つてしまつたよ。その男の、かう、からだをすくめた恰好つたらなかつたよ、ミトリッチ！ まるで二十貫もある荷物でも背負つてるんぢやないかと思はれるくれえだつたよ。」

おれたちはお別れに抱擁だきあつた。おれはこの命の恩人の、力強く逞しい腕を感じた。

「また逢へるだらうさ……忘れねえでゐてくんねえ……。」

トロフィーモフは、何やらまだ話したさうだつたが、激しい感動のためか、妙にためらつて口ごもりながら、ただかう叫んだ。

「ぢやあ、ミトリッチ！ 御機嫌よう！……。」

「有難う、きやうでえ、いろいろと。」おれも感激して、たださう答へたきりだ。

彼の眼は急に潤つて來た。最後にもう一度おれの手を固く握つて一振りすると同時に彼はもと來た方角へ歩きだした。

おれは、その肩幅の廣い、うつむき加減にした後ろ姿を見送つてゐた。たうとう、親しみ深い、あの互ひによく理解の出来る最後の友が行つてしまつた……。さて、これから先きは……

どうなることやら？　どんな人間があるだらう？　どんな生活が始まるだらう？
そこで、おれは病める五體をもつて、とはいへ、雄々しい元氣をもつて、騒々しく湧きたつ
ロンドンの巷の中へ突入して行つた。

死
刑
囚

圖抜けて脊の高い、その男もやはり其處へひつたてられて行くのだつた——多くの者がつれて行かれたまま、一人として歸つて来た者のない、郊外の『悪魔が臺』といふ奇妙な名で呼ばれてゐる岩山の懸崖の上へ。彼の左右にならんで、旋條銃を擔いだ二人の歩兵が、またその後ろからは鞍のうへでゆらゆら揺れながら、騎兵銃を肩に掛けた二人の騎兵が護衛しながら進んで行く。カーキ色の軍服を著た護送兵のうち、ひとりとしてこの男の名前を知つてゐるものはなかつた。彼らにとつてこの男は、けふその生命を、わづか半時間の後に絶たなければならぬ單なる死刑囚に過ぎないのだ。どうして生命を絶たなければならないのか、何の罪でか？それも誰ひとり知らなかつた。先刻この男を暗い地下室の留置場から、打ち固めた營庭へ曳き出した時、上官がかう命令を下した。

「片づけてしまへ！」

路はだんだん山へさしかかつた。囚人は重々しく、破れた長靴のさきで砂を掬ひながら歩を運んでゆく。七月の太陽は今や春うすきながら、かんかんと項うなじに照りつけてゐるが、やがて間もな

く、帯のやうに青ずんだ原始林の彼方へ沈むに違ひない。人々の前方にあたつて影法師が揺れながら匍つて行く。

市まちは戒嚴状態であつた。すべての權力は軍隊に掌握されてゐた。斥候が巧みに馬を乗りこなしながら、絶えず征服者らしい勇姿を誇つて四方八方へ飛んだ。村々からは手當り次第 武器で身を固めて、次ぎつぎに大部隊を編成しながら、赤色叛亂軍が刻々に襲來しつつあつた。市内には戸ごとに流言蜚語が飛び、それがだんだん擴がつて、いよいよ不安と困惑を生みつけてゆくのだつた。

右側を歩いてゐる護送兵の方が上役だつた。多分けふは酩酊してゐるのか、それとも他に何か原因があるのか、彼はすこし不機嫌である。彼のただつ広い顔は妙に沈んで、潤んだやうなつぶらな眼には秋空を思はせる陰鬱な影がただよつてゐた。彼は、自分の旋條銃に銃殺のため五發の弾丸が裝填してある、當の相手の方へ、苛々しく顔を振りむいた。

「お前、何處へつれてゆかれるのか知つてるのかい？」

死刑囚は首もあげずに、機械的に答へた。

「知らない！」

「悪魔が臺へさ。あすこからはお前、景色がよく見えらあな。四方八方が遠く見晴らされら

あ……。」

死刑囚はその先きは聴いてゐなかつた。彼はその怖ろしい懸崖がけを知つてゐた——一度ならず彼はそこへ行つたことがある。それは一方は低い節くれだつた松に蔽はれた、だらだら坂になり、他方は前へ突き出たやうな垂直の絶壁をなしてゐた。その懸崖の頂きは狭い岩の臺地になつてゐるが、そこへ登つて下を見やうものなら——怖ろしさに胸がひやりとする。この岩の臺地のうへでさへなければ何處で死んだつて構はないと思はれるやうな物凄いとところだ。宙へ突きとばされて、もんどり打つて、熱い血汐の飛沫を散らしながら、奈落の底へ轉落するとして、それこそどんな氣持だらう？

彼は両手で頭を抱へて立ちどまつたが、一時にまるで路のほこりみたいな土いろの顔になつてゐた。

「どうしたんだ？」と、さつきの護送兵が訊ねた。

「眼がまふんだ。」

「大丈夫だよ。むかふへ行きやあ、なほつちまはあ。あすこは空氣がいいからなあ。有難いことに！ さあ、歩いた！」

死刑囚は屈みこんで、じつと立ちすくんでゐる。

騎兵が追ひついて、馬をとめると、その一人がにやりとしながら言つた。

「奴さん、腰が抜けたんだな。ひとつ緊めつけてやれよ。」

左側につきそつてゐた、瘦せた護送兵で、小さな眼をよく瞬く男が、脇腹を小突いた。

「歩けつたら、疫病神！」

ホームスパンの上衣を著た哀れな死刑囚はよろめくやうにして、力なく歩を進めだした。顎骨の突き出たその顔は蒼ざめた土氣いろを帯び、黒々として縮れた鬚髯ひげがまるで黒粹をはめたやうに頬から顎を蔽つてゐる。埃を洗ひおとすやうに、大粒な汗が顔をたらたらと流れてゐる。彼は落ちくぼんだ眼で前方をぼんやり見ながら歩いて行く。

上役の方の護送兵は、死刑の執行者でもあつて、もう一再ならず、あの有名な懸崖へ死刑囚を、個々にまたは数名一緒に連れて行つた。唯々諾々たる囚人をその絶壁の眞上に立たせると自分は他の死刑執行者とともに數間あとへ退つて、無頓着に旋條銃の遊底をガチャツと掛ける。一斉射撃——それで萬事は終るのである。彈丸に射ぬかれた死刑囚たちは不氣味な喚き聲をあげて、奈落の底へ眞つさかさまに轉落してゆく。死體のことなどかれこれ心配する手數はない——下を流れてゐる河の淵に呑まれてしまふからである。二三日は河床の砂の上にたゆたふてゐるが、やがて蒼ざめて水腫れの淺ましい姿となつて浮きあがると、そのまま不氣味な土左衛

門は、寒い北方をさして押し流されてしまふのである。

ところが、今この護送兵は何故かひどくこちない氣持を抱いてゐるのであつた。心の底でこの死刑囚に對して憐憫とも憤懣ともつかぬものを掻き立てる、變な撞着した感情が渦巻いてゐるのである。彼にはこの男を前にどこかで見ることがあるやうに思はれるのだつた。それはよほど前の、多分、大戦當時のことであるかも知れないと思つた。

「お前、獨逸との戦争の時、どこかに勤めてゐたんだろ？」と、彼は死刑囚の方を向いて、その袖をひつぱりながら訊ねた。

囚人は大きく眼を睜つて、まごまごしながら護衛兵の顔を見つめる。

「何のことだね？」

もう一度くり返された質問に對して、押し出されたやうな、空ろな聲で答へたところによれば、彼は方々の戦線へまはされてゐたとのことである。

市はもう遙か後方に距つて、路はだんだん坂路にさしかかり、松生えの中へ入つた。刑場までは、もう一露里たらずの距離しかなかつた。

囚人は護送兵の方を向いて、元氣なく訊ねた。

「烟草を一服すはせて貰へないだらうか？」

「それあ許してもいいよ。」

先刻の護衛兵が空いろの烟草入れを囚人に渡した——それには白い絲で、(變するワーシャへマルーシャより)と縫ひとりかしてあつた。

死刑囚には烟草を紙に巻くことが出来なかつた——紙を持つ手がぶるぶる震へて。

「こつちへかしねえ、おれが巻いてやらあ。」と、その空いろの烟草入れの持主が言つた。

三人とも一服すひつけて、安烟草のけむりをただよはせだした。烟草が一同を近づけ、親しみを感じさせた。死刑囚も、烟草のせむで頭がぼろとすると共に、いくぶん氣持が樂になつて、自分を所刑のために護送してゆく兵士たちに對しても、今はさほど怖ろしく感じなくなつた。彼は左脚で跛をひきながら、爪先き立つて歩くやうに努めてゐた。上役の護送兵が、それに今はじめ氣づいて、やさしくかう訊ねた。

「お前、足をどうかしたのかい？」

死刑囚は、躊躇なく説明した。

「前にくるぶしを擦りむいたんだが、そこが今いたみだしてね。まるで腫物でまものみたいになつてるんだ。」

「ぢやあ、傷を繻帶したらいいでねえか？」

「繃帯するものがないんだ。僕は足巻もしてゐないんでね。」
 「それぢやあ、いつそ跣足はだしになりねえな。」
 「なるほど、さうしたらよからうな。」

囚人は急いで長靴をぬぐと、それを小腋に抱へて歩き出した。

上役の護送兵はちらと、そのひどい、もう何の役にも立ちさうにない破れ靴を横眼で見やつたが、何も言はなかつた。

もう一人の護送兵が、こんなことを言ひ出した。

「うん、足を擦りむいた日にやあ、まつたくやりきれたもんでねえよ。獨逸軍にペレムイシユリから追撃を喰らつた時のことを思ひ出すよ。おいらの部隊は徒歩かちで一日に百露里から突破したもんだが、ちやうどおれの長靴が小さくて、きむいと来てやあがるんだ、畜生。ちえつ、あん時やあ、随分おらあ、足を痛めつけちまつたよ！ すり剝けて、血がだらだら出るんだ。それでも、まだ、あれが春のことだつたから、跣足で駈けることだつて出来たから、まだしもよかつたが、あれが寒中だつたらどうだらう？ それこそおしまひさ……。」

「まつたくだ、手もなくくたばつちまはあ。」と、上役の護送兵が相槌をうつた。「戦争にやあ、何といつてもあん畜生たちや、うめえもんさ。」さう言つて彼は後ろへ頭を振りながら續けた。

「樂々と馬を乗りまはしてりやあ、いいんだから……。」

談話が騎兵のことへ移つた。だんだん薔薇いろを帯びつつある天蓋の下の森の静寂のなかに一行の話し聲が穏やかにこたまに響き渡るだけで、彼らの中の一人が、間もなく斷崖から射ち落されやうなどといふ氣配は、少しも感じられなかつた。

しかし、上役の方の護送兵は絶えず、何かかう漠然たる不安を感じてゐるのだつた。日一日と敵の力が増大して、今にも市を襲撃しさうに威嚇してゐるのに、自分たちが擁護してゐる官權は、辛うじて持ちこたへてゐるに過ぎないのだ。これは一體どういふことになるのだらう？ それにこの死刑囚も彼の心を混亂させる。今もつくづく視れば、この跣足の男の外貌には、赤に走つた弟を想ひ出させるやうな面影がある。一刻も早くこの男から離れるために、『惡魔が臺』へ着くより前に、銃殺してしまひたいやうな氣もする。

彼はまだ喫みきらぬ烟草を俄かに揉み消すと、腹立たしげにそれを傍らへ投げすてた。

「早足い進め！」

三人とも歩調をそろへて——軍隊式に歩きだす。

突然、前方の、どこか森の中で射撃の音が轟いた。騎馬兵と徒歩の兵は顔を見あはせた。

「あれあ何だらう？」

もう一度、射撃の音が聞えた。

騎兵は死刑囚を追ひこして走り出した。その一人が徒歩の護衛兵にむかつて、
「ずんずん来ねえよ。おれ達は先づ何ごとが起きたのかを取りしらべるから。」

拍車をあてられた馬どもは鼻を鳴らしながら、木の間がくれに前方へ逸走して行つた。路上には灰いろの砂塵が、もうもうと立ちのぼる。

死刑囚は首をもたげてあたりを見まはした。ぐるりは——森と、山々と、生氣のない荒蕪地とで、間もなく夜になりさうである。自分の傍らにはただ二人の護衛兵があるばかりだ。若しもいま、彼が渾身の勇を揮つて二人に鐵拳を加へたなら、手もなく彼らを薙ぎ倒すことが出来やう。さうすれば旋條銃を引つたくるのは雑作もないことだ。そして彼の前には自由の途が開かれるのだ。

さうした考へが閃くと共に、彼の腦裏に赫つと灼きついて直ぐに消えた。彼はこの考へに愕然として、ぞみぞみと小刻みに震へ出した。その時、まるで隙間もない壁越しに聞くやうに、例の上役の護送兵が同僚にむかつてこんなことを言つてゐるのを、ふと耳にとめた。

「なあ、アントン、逃がしてやらうでねえか。この男のことなんか構はねえぢやないか——助けてやらうや。」

三人とも立ちどまつた。

「でも、あの二人が戻つて來たら、何といふんだい？」

「逃げやがつたと言ふつきりよ。でえいち、何だつて奴らは先きへ行つちまやあがつたんだ？もし咎められることになれあ、さしづめ奴らの責任ぢやねえか。」

「おいらは、そんなことあ屁でもねえやな。なんしろお前が上役のことだで。」

死刑囚はいくら腦漿を振りしぼつても、まるで思考力といふものが働かなかつた。自分の耳にした言葉がどうしても頭へよくをさまらないで、半殺しにされた蟾蜍のやうに、ぐでんぐでんと反轉してゐるのだつた。一つだけ明瞭なことは——この二人が自分をからかはうとしてゐるらしいことだけである。

上役の護送兵が彼の方を向いて、

「行きねえ！」

「何處へ？」

「好きな方へさ！」

死刑囚は齒をガタガタ鳴らしながら、呻くやうに言つた。

「君たちは射つばなすのだから。」

「射ちやあしねえよ。」
「きつと、誓つてかい。」

「えい、この唐變木め！ この上にまだ誓言しろとぬかしやあがる！ いつてえ、手前は何と思つてやがるんだ——手前とおいらが遊山にでも出かけたといふのけえ？ さつさと行けつたら！ な、わかつたか！」

死刑囚は身じろぎもしないで、恐怖のために腰が抜けてでもしたやうに、茫然として立ちつくした。

上役の護送兵は痛癢を起して、銃を肩から引き外しざま、それを半身に構へた。

「もし行かなきゃあ、この場でそのどてつ腹へ銃剣をぶつ貫すぞ！」

彼は急に瞳孔を細くして、二歩ばかり後ろへ退ると、旋條銃の遊底をガチャツと鳴らした。脊廣を著た男は朦朧とした眼を、自分の方へ向けられた銃口に釘づけにしたまま、道路の片側へおつおつと後ずさりをはじめた。彼は両手に片方づつ長靴を掴んで、それをまるで貴重品か何ぞのやうに、しつかり胸へ押しつけてゐた。狐のやうに静かで用心ぶかい自分の登音には氣もつかず、また、恐怖に驅りたてられて自分が後退してゆくのか、それとも足許から大地の方が浮動してゆくのか、ちよつと見當がつかなかつた。彼には兵士の姿も、森も、山も、消

えゆく空も見えなかつた。彼にとつては、全世界がああ狭い銃孔の中へ収縮して、ただ一つ小さな黒い點に化してしまつたやうに思はれた。舌はまるで雑巾のやうに、からからに干乾び、さながら不意に聲のない笑ひがこみあげて來たやうに、黒い髭の中で齒ががたがた鳴つた。彼は、まるでしぼり出したやうな嗚れ聲を張りあげて叫んだ。

「君たちは……射……射つのだな……。」

それについて、體の向きをかへると同時に、身を縮めるやうにしながら、何度も後ろを振り返り振り返り、足早に走り出した。

上役の護衛兵は、ぴつたりと銃床へ頬を押しつけて、旋條銃と合體したやうに、少し猫背になつて、屹と緊張したポーズに凝固して立ちつくした。彼はだんだん遠ざかつてゆく男の頭に狙ひをつけながら、自分は果してあの男を憐れんでゐるのか、それとも憎んでゐるのか、我れながら譯が分らなかつた。既に引金には指が掛かつてゐた、ただ彼がそれをちよつと引きさへすれば、いま自分が逃がした男は立ちどころに轉倒して、ぶるぶると痙攣して死んでしまふのだ。しかし彼の意志はまるで衡器の指針のやうに揺蕩ふた——殺す氣にはなれない、と同時に、いつたん照準を定めた對象に向つて射撃を抑制することも困難であつた。この緊張状態が狂暴な嘔吐となつて爆發した。

「早く去せあがれ、悪魔の人形め！」
 囚人はさながら鞭うたれるもののやうに、驀進しつつ不必要なジグザグを描きながら、全速
 力で駆け去つて行つた。

護送兵たちは、少し間をおいてから、反対の方角へ駆け出すと共に、空へ向けてやたらに發
 砲した。

森は、しばしその銃聲に轟き渡つた。

悪魔の沼

九月も半ばだといふのに森の中は夏のやうに暖かだ。枝の繁茂した木々のうへには散雲ひとつとどめぬ青空が透きとほるやうに澄みわたつてゐる。木々の繁みをもれて金絲のやうな光線が森の中へさしこんでゐる。青葉の色は紅葉しはじめて、もう黄や紅に燃えたつてゐる。これは太陽の織りなす秋のよそほひである。かぐはしい風は木の間をくぐりながら、パラパラとわくらの葉を振り散らしては、氣散じらしくそれを長いあひだ空中に舞はせる。

二人の獵師がガサガサと歩いてゆく。二人ともびつしより汗をかいて、てんでに防寒服と糧食の入つた囊を肩から背負ひ、手にはめいめい、後装の獵銃を斜に構へてゐる。前にたつて歩いてゆくのはマクシームイチといふがつしりした中脊の百姓男だ。彼は山森番人の伴として森の中でうまれて、森の中で育ち、幼い頃から獵をして成人した男で、年のころ四十前後である。この男は、年月のため煤び汚れて軒の傾いた小家のある半がこひのわが屋敷内同様、この界限のことなら隅から隅まで知りつくし、あらゆる野禽の習性には、自分の栗毛の若牝馬とひとつに通曉してゐる。その男の後ろからは、ともすれば躓きがちに、十四になる少年のコーリヤが

ついてゆく。この薄色髪の少年は父方の親戚の家に滞在中、はからずもこの森の奥へ入りこんだ都會そだちの若者である。

ずるぶん疲れてゐる癖に、彼はまるで全歐羅巴でも征服したやうな顔つきをしてゐる。もしも彼が二十四番口經のフランコット銃を手を持たず、腰に二羽の蝦夷山鳥をぶらさげてゐたかつたら、ちよつと本當の獵師とは思はれなかつたであらう。事實その蝦夷山鳥はマクシームイチが彼の方へ誘きよせてくれたのであるが、しかしそれは大した問題ではない——何れにしても射おとしたのはコーリヤ自身であつたのだから。

マクシームイチとコーリヤとが友達になつてから、これでもう二年目であるが、今では互ひに離れてゐるのがやりきれないやうな氣持になつてゐた。この年少の獵人は都から獵用の材料を取りよせるし、マクシームイチの方は彼に本當の狩獵といふものを紹介した。獲物はどちらがどれだけ射たうと、五分と五分の山分けにしたものである。

彼らはもう二日のあひだ鴨の群れを捜し出さうとして、いくつもいくつも森の中の池をたづね廻つてゐるのであつたが、ことごとく無駄骨であつた。だが、鴨は渡りを前にして何處かこの近く一露里四方の範圍内にかくれてゐる筈である。それも昨日の夕方やうやくつきとめたのである。マクシームイチが圖抜けて脊の高い樅の木へ攀ぢのぼつて、やつとその針葉のあひだ

を抜けて森の上へ顔を出した時、入目を浴びながら彼は悦ばしげに上からかう叫んだものだ。

「おや、一群れたちあがつたぞ！」

「何處から？」と、コーリヤが訊ねた。

「鬼が澤からだ。」

「どうして分るんだね、マクシームイチ？ だつてこの邊には池なら他にいくらかもあるぢやないか？」

「おらは、つひぞこれまでに一度だつて間違えたことあねえだよ。」

そして一瞬の後、ひとときは有頂天になつた上ずつた彼の聲が聞えて來た。

「うわッ、見ろよ、見ろよ、また一群れ！ まるで雲のやうだ！」

コーリヤは嬉しさに雀躍した。

「よをし、射つてやらうね！」

マクシームイチは下へ降りながらコーリヤを仰天させた——彼は樅の枝の頭に手でぶらさがりながら次ぎ次ぎと枝の頭を持ちかへ持ちかへ、まるで山をすべりおりるやうに下へするするとおりに來るのだ。少年は仰むいたまま、息を殺してその離れ業を見やつた——今におつこちはしないかとハラハラしながら。

それでけふは、少し雉山鳥を射つてから、二人はその鬼が澤へと向つたのである。別に急ぐことはなかつた——日はやつと正午をすぎたばかりである。彼らは森の奥に聽耳を欬てながら、ゆつくりゆつくり歩いてゐるのであつた。

マクシームイチは少年の方を振りかへると、につこりして、

「疲れたかい、きやうでえ？」

「うん、すこし。」

マクシームイチの丸い顔はすこしあばた面で、ちよつぴりまばらに鬚が生えてゐるが、いつもその顔が森の中へ入ると、まるで金色燦然たる聖隔イコノスマスの前で祈禱を捧げる修道僧の顔のやうに莊重な輝きを帯びるのであつた。

「この近くにも池が一つあるだよ、そこにはいつでも鴨がゐるだから、ちよつくら寄つてくべえか？」

「いいとも。」と、年少の獵師が同意した。

その池はぐるりを大木で取り圍まれてゐた。ただ一方から、小さい草地が僅かな空間をなして、池の中へ突き出てをり、その端がささやかな灌木の叢みになつてゐる。で、そこからは忍びよるのに好都合だつた。二人の獵人は身を屈めて、靜かに、用心ぶかく歩を進めた。赤や黄

いろの實をつけた灌木の叢みに近づくと、マクシームイチは不自然に頸をのばしながら少し身を起した。彼の灰いろの眼は、藻草に蔽はれた水面へと執拗に向けられた。

「一羽ある。」と、彼がささやいた。

「何處に？」コーリヤはわくわくしながら訊ねる。

「そうら、おらの手の方角を見な。」

「あ、見える、見える。射たうか？」

「やりな！」

射撃の音が轟いた。鴨は水面できりきりと廻りながら、ばたばたと水をはねた。

「あつた、あつた！」と、コーリヤがやつきになつて叫びだした。

「えれいぞ。」と、マクシームイチが褒めた。

射止められたのは大鴨であつたが、一體それをどうして手に入れたものであらう？ 犬はゐないし、人間がそれを拾ひに行くのはすこぶる危険だ——水は深く、藻草が繁つてゐて、それに巻きこまれるおそれが十分にある。

コーリヤは悦びの頂點から絶望の底へつき落された。

「どうするの、マクシームイチ、折角の大鴨が拾へないぢやないか？」

「拾へねえつてことがあるもんか。ただ、ちつとばかり暇がかかるだけさ。」

「ぢや、はやく取ることにしようよ。」

マクシームイチが不意に訊ねる。

「それより、お前の大鴨をひとりでに岸へ來させたらどうだい？」

少年は大きく眼を剝いた。

「どうしてそんなことが出来るの？ だつて、もう仰向きに腹を上にしてしまつて——死んでるぢやないか。」

「だから、よけいに都合がいいだよ。ずつと、てつとり早く片がつくつてもものよ。」

「ほんと、マクシームイチ？」

「これが嘘なら、酸乳皮スメタナを咽喉につまらしておつ死んでも構はねえだよ……。」

そこでちよつと考へてから、つけ加へた。

「だが、そんなことあどうでもいい。それより一口やつて、ちよつくら休まうぜ。ひよつとすると、まだ鴨が飛んで來るかも知れねえからな。さうしたらついでに射てるから。でなかつたら何も一羽ぐれえの鴨に手間暇かけることあねえだが。」

二人は叢みの蔭へ身をひそめた。年長の獵師が袋から麵麩を取り出すと、若い方が脂肪ベイコンを取

り出した。彼らは黙つたままでもしやむしややりだす。マクシムイチは池の方を見張りながら、何のためか、鐵砲をひきよせて用心してゐる。少年は相手がどうしてそんなに聴耳をたててゐるのか見當がつかず、自分が射止めた大鴨の方へ視線を移す——死んだ鴨は水面に微動だにせず浮かんでゐる。一時間か、或はそれ以上の時が経つた。食事はもうずつと前に済んでゐた。ひどく退屈だ。しかしマクシムイチがむつつりしてゐるので、身動きをする譯にも、話しかける譯にもゆかぬ。

突然、何か灌木の間から、礫のやうに水面へ飛びおりてゆくものの影が、ちらと見えた。と、同時に、少年ははやくも上へむけてたちあがる大きな翼の羽音を感じた。マクシムイチは全身を緊張させて、きつと身をすくめた。彼の右の手の中で撃鐵があがると共にカチツと言つた。その次の瞬間に彼は野獸のやうな素ばやさで灌木の庇の下から飛び出してゐた。二連銃の音が二發、森にこだました。そのすべてがあまりの早業であつたため、コーリヤには何が何やらさつぱり譯が分らなかつた。

「さあ、自分の大鴨を拾ひねえ。」

草原の上には鴨と鷹とが並んで横たはつてゐた。貪婪な猛禽の方は血にまみれながら頼りなげに片方の翼をばたばたさせてゐた。その爪を、刈りとられた草の根につき立てたまま、痙攣

的に縮めてゐた。憤ろしげに獵師たちを睨んでゐる炯々たるその眼は、知死期の苦しみのために輝きが鈍つてゐた。

コーリヤは獵師の腕の牙えと、聲も立てて死に瀕してゐる鷹とに度膽を抜かれて、呆然と立ちつくした。

「行かうぜ。」と、マクシムイチが鴨を取りあげながら言つた。

「鷹は持つて行かないの？」

「そんなものが何になるだ？ よけいな荷物になるだけのことよ。」

マクシムイチの後について歩きながら、少年は自分がモスクワへ歸る日のことを考へてゐた。彼けずるぶん色々の新らしい印象を受けた。彼の話を聞いたら、さぞかし友達が魂消るこどだらう。

二露里ばかり歩いたところで、マクシムイチが言つた。

「鬼が澤はついそこだが、晩までに行きさへすれあいなのだから、ここらで一休みやらかさうや。」

獵師たちは、肩から袋を投げおろすと、泰然自若として、しつかり大地に根を張つてゐる、太い榎の大木のぐるりの空地へごろりと横になつて手足を伸ばした。この榎の大木が最初に根

をおろしてから恐らく一世紀は経つてゐるだらうが、まだこの世にどれだけ生きのびようとしてゐるのだらう？

マクシームイチが陽ざしを受けて眼を細くしながら、絶え間なく都のことを根掘り葉掘り訊ねるが、コーリヤは初めから、氣のない返事をしてゐる——森の中がとても素晴らしいからだ。彼は色さまざまに錦をまとうた紅葉に見とれてゐた。それに菩提樹は他の木々より早めに葉が疎らになつてゐるが、その葉を秋がまるで卵黄のやうな黄いろに染めてゐる。空地のむかう側には、遠くから見るとまるで焚火の焰のやうに思はれるナナカマドが色濃く赤々と照りはえてゐる。

「この頃では、とても素敵な無線電話の機械が出来るやうになつたことを知つてる？」

「ふうん？」

「千露里もはなれてゐて話が出来るんだよ。音楽だつて聴かれらあ。」

「へッ、冗談でねえや！ 千露里もはなれてなんて！」

コーリヤには、マクシームイチがひどく一生懸命になるのが面白かつた。彼は百人からのお客を乗せて運ぶ飛行船のことや、その他、いろんな科學技術の驚異的な發達について物語つた。最後に人體組織の若返り法といふ、最もセンセーショナルな新醫學の話をした。

するとマクシームイチは、思はず身を起して、

「馬鹿な。冗談だらう？」

「冗談なもんか。」

「老人を若いものに變へることが出来るだつて？」

「さうだよ。」

「それをお前、どうして知つてるだ？」

「モスクワの宅へ、お友達のマリヤ・フョードロヴナつていふ女の醫者がよく來るんだよ。その女がお父さんやお母さんにそのことを話してゐたんだ。で僕、宿題をやつてゐながら、すっかり聴いちゃつたの。」

マクシームイチは再び寝ころんで手足をのばした。

「ふうむ、不思議だなあ。學者がいろんなことを研究するてえと、大したことが考へ出せるもんだなあ。」

二人はしばらく押し黙つて靜かな森のそよぎに耳をすました。コーリヤは淡青い空を眺めてゐた。木の葉が親木の枝を離れてパラパラと落ちる。それが彼には黄金いろの蝶々がきりきり舞ひながら飛びまはつてゐるやうに思はれた。百姓の方はいろんな奇蹟の行はれる都會のこと

を羨ましさに思ひ描いてゐるのだつた。都會の生活は豪奢で多様だ。しかし彼にはこの眠つてゐるやうな森や、芦の生ひ繁つた池から離れることはちよつとむつかしい——もう、すつかり馴染んでしまつてゐるから。彼は不意にこんな風に若い友達に訊ねた。

「だが、一體どちらが偉えんだい——神様か、それとも人間の意志か？」

けれどその答へは聞かれなかつた——疲れた少年は、暖かい日ざしにいい氣持になつて、ぐつすり寝こんでしまつたからである。

大空は、火焰の眼のやうな太陽を斜めにして、物の蔭影をひきのばした。風ははたと止んで、小枝ひとつ動かぬ。森は嚴かな静寂に沈んで、つづましくかそかに睡ろんでゐる。

十分に眠つた獵師たちは、やがて鬼が澤をさして出かけた。その沼のぐるり半露里四方——ところによつてはそれ以上が、歩行もかなぬ沼澤地で、猫柳の叢みや赤楊が生ひ繁つてゐる。そこへはちよつと近づき難いところである。その中心をなすきれいな水面に夜の食餌から歸つた鴨が降りてゐる筈であるが、そこへ達する途を知つてゐるのは、ただ、このマクシームイチひとりきりである。

「約束したやうに、ここではおらが前前の司令官だぞ。」と、マクシームイチが不意にむつか

しい顔をして囁くのだつた。「その代り市ではお前がおらの指圖をするがええだ。お前はなるほどおらには友達だけど、規律ちふものはちやんと守らにやならねえだ。でねえと、容赦なく拳固を喰らはすだよ。」

「うん。」と、不服さうにコーリヤが答へた。

今や彼らはめいめい棒切れを手にして、それで澤の地盤をさぐりさぐり、そろそろと前進して行つた。柳の叢みが歩行を妨げるけれど、それがあればこそ怖ろしい沼から救はれることも出来るのだ。ちよつと踏み過たうものなら、足は膝の上までもめりこんでしまふ。で、絶えず右へ折れたり左へまがつて、倒れてゐる木の幹をつたつたり、こちらの灌木の叢みからむかふの叢みへ跳び移つたりしなければならなかつた。六七尺もある脊の高い蕁麻が顔や手をシカシカと刺して惱ます。さうかと思へば、少し乾いたところは纏れたホツプの蔓ですつかり蔽はれて、網をかけたやうになつてゐる。先きへ進むためには、それを手で押し分けなければならぬ。前からも横からも、まるで髪を振りみだした化物のやうに、根こぎになつた赤楊の根つこがおどろな頭をもたげてゐる。葦が肌を傷つけ、茨が着物を破る。何より重大なことは、ここではすべてが當てにならぬことである——見たところは完全でも時の力ですつかり朽木になつてゐる木の上へ乗らぬ用心をしなければならぬ。足許の水草の繁つた地盤は、ふよふよとしてゐて、

粘土のやうに粘つこい泥土の中へ人を曳きこんで、頭まですつぽり吸ひこんでしまひさうに危つかしい。獵師たちの後ろで、いま彼らが歩いて行つた跡の、掻き亂された濕地は、あぶくを吹きながら、長いことぶつぶつ音を立ててゐる。

少年には、かうした森の奥の沼澤へ足を踏み入れたのは、これが初めてであつた。妙に不氣味である。一體全體、このがつちりした男はどこへ自分をつれてゆくのだらう？ せめて鴨の一羽も見つかることか、何にも見えはせぬ！ 死のやうな静けさだ。

突然、彼の踏みつけてゐた木の株がずれて——忽ち彼の兩足はずぶずぶとめりこんだ。跳びあがらうとあせれば却つて深く沈むばかりだ。眼の前の世界が霞んで、木々がぐらぐらと揺れるやうだつた。彼は狼狽して悲鳴をあげた。

「マクシームイチ！ マクシームイチ！」

「しいつ！」さう言つて後ろを振りむくと、相手は腹立たしげに舌打ちをした。

彼はしつかりコーリヤの兩手を掴んだ。

沼が、まるで唾液のたまつた口のやうな音を立てた。

「見ろ、とんでもねえところへ足を踏んこんで！ ここはお前がたのモスクワの舗道たあ譯が違ふだぞ。」

先きへ進めば進むほど、沼澤はいよいよ深くなる。しかし、その邊はマクシームイチが豫め伐り倒しておいた赤楊をつたつて行くので、却つて容易であつた。

この獵師たちの最後の目的地は——大きいコベルであつた。コベルといふのは、一間四方ばかりの大きさの小島で、その縁には赤楊の樹が立ちならんでゐる。汗と水にびつしより濡れてくたくたに疲れた獵師たちは、大悦びでそのコベルへ這ひあがる。そこだけは土地が乾燥してゐるので、靜かに豫備の着物に著換へたり、フェルトの長靴と穿き換へることが出来る。

二人の面前には長方形の小さい湖水が横たはり、そのぐるりは赤楊の森からなる高い障壁である。その障壁の上部には木枝が交錯して、秋の息吹にそこそこが褐色に色づいてをり、また下部には猫柳の叢みや、葦や、芦や、その他、沼地の植物が繁茂してゐる。湖水の水は、黒々として、まるで大麻油のやうに光つてゐる。

獵場としては、まことに便利で——ここからなら湖面の好きな方向へむけて銃をはなつことが出来る。

湖水のむかふ側には、岸から程ちかく、幹のひよる長い一本松が聳えてゐる。それは、まるでこの鬼が澤の見張りをしてゐるやうに、赤楊の上へ毬栗頭を高くもたげてゐる。

「不思議だなあ。」と、コーリヤが怪訝さうに囁く。

「何がさ？」と、マクシュームイチが訊く。
 「こんな沼池に松があるからさ。」
 「それあさうだな。あれを目あてにおいらは昨日、ここに鴨の群れがあることをはつきり突きとめたんだよ。」

「あ、さうか！」

そこで、マクシュームイチは素気なくかう命じた。

「さあ澤山だ。もうこれ以上はおくびにも聲を出すでねえぞ。」

二人は身動き一つするのも怖れて、地にしがみつくやうにしながら待つてゐた。眼は、がらんとした湖面へじつとそそがれてゐる。鬼が澤はまるで陰鬱な物思ひに耽つてでもゐるやうに不氣味に緘黙してゐる。ブツブツと湿地が粘つこい音を立てる。時々魚が銀鱗を光らせて黒い水面にしぶきを立てる。だが、鴨もたしかにみなければならぬ筈だ。彼らは人間のやつて来たことを知つてゐて、立ちあがらうとはしないで、今はどんな些細な物音にも敏感に耳を敬てゐるのに違ひない。

コーリヤには、かうして身動き一つせずゐるのが堪らなく退屈だつた。彼は疲れた體の位置を換へるために寝返りを打たうとした。するとマクシュームイチが拳を示すのだ。少年は唇を

ふくらまして、しやうことなしに、射ちためた野禽をもう百ぺんもしげしげと眺めながら、翼や足をしらべたり、嘴や尾の邊を見たりしてゐるのだつた。

しばらくすると、芦がサラサラと鳴り出して、木の根や草を掻きさがす鴨の嘴音が聞えだした。年上の獵師は嬉しさうに胸^{むくほ}せをしながら、獲物があるぞと知らせる。二人とも口をぼんやり開けて聴耳をすましながら、やはり口をあけたまま、ただ唇を廣くひろげるだけで聲は出さず、にやにやと笑ふ。さうした顔つきだけを見ると、彼らはいかにも低脳な馬鹿者同士のやうに思はれる。

やつと湖面へ音もなく一羽の鴨が泳ぎ出した。その鴨は一ところにとどまつて注意ぶかくあたりを見まはす。

「クワツク……」

その聲は低く嘎れてゐる。明らかに年をとつて生活に經驗の深い大鴨に違ひない。

ちよつと沈黙してゐてから、また一度鳴く。すると何處か、叢みの中から第二の鴨が鳴き返し、つづいて第三の鴨が鳴き返す。湖面へなほ數羽の鴨が泳ぎ出すと、次々にその數が増して来る。そして今や彼らは四方八方から、まるで集會でもするやうに湖水の中心へ密集しはじめた。間もなく湖面は隙間もなく、水面全體が活氣づいて、鳥のためにすつかり灰いろになつて

しまつた。一體どのくらゐの數だらうか？ 千羽、あるひはそれ以上もあるだらうか？ しかし前のとほり稀にしか鳴かず、何か互ひに警戒しあつてゐる様子である。

獵師たちは身をひそめたまま、呼吸も止まる思ひで、しびれたやうになつて、^{からだ}軀の疲れさへもう感じない。肉は躍り、頬は熱くなり、貪婪な熱望のために眼がギラキラと光る。

鴨が水を浴びはじめた。水をもぐつては、飛沫をあげる。中には翼の弾力をためすかのやうに、バタバタと羽ばたきをするものもある。その中に一種朗らかな気分につつまれて、だんだん鳴聲が頻繁になり陽氣になる。さういふ状態がしばらくつづく。と、その楽しい鳴聲がはたと止んで、急に沈黙したまま、じつと浮かんでゐる。ただ首をのばして何事か一同の賛意を表はすもののやうに、互ひに眼を見交はしてゐるやうである。

太陽は森に別れをつけながら、ただその梢だけを明るく照らしてゐる。下の方には濕氣が漂ひだす。

不意に一羽の大鴨が鳴き出した——ひとときは聲高に、あだかも他の者を召集するかのやうに、一種特別な高い調子で鳴き出した。すると、緊張した静寂が引き裂かれたやうに一度に破られて、空中にハタハタといふ羽ばたきの唸り聲が充たされた。それは非常に大きな大群がたちあがつたのである。鴨は湖面からばかりではなく、その岸からも、草の中からも、灌木の間から

もたちあがつた。それは、あたかも鬼が澤の上にあらしが襲來したやうな壯觀であつた。

コーリヤはびつくりして首をねぢむけた。マクシームイチがその脇腹を小突いた。

一時ひっそりと静かになつた。湖面に残つた鴨はあたかも命令でも待つもののやうに長い頸をのばしてじつと浮かんでゐる。再び召集の鳴き聲がひびいた。新しい群れがどつと羽音を立てながら灰いろの旋風のやうに渦を巻いて立ちあがつた。

湖面がすつかり空虚になつた時、マクシームイチは起きあがつて、かう言つた。

「すつかり飛び去つただ。もう二三羽だけ、見張りが残つてただだよ。これでもう話をして、おそろしく昂奮したコーリヤが、しきりに質問の矢をはなつ。

「何のために見張りが残つてゐるのさ。」

マクシームイチの顔が大きな微笑にほぐれた。

「てつきり明日は霧がおきるだよ。さうしたら朝早く歸^{かへ}つて來る鴨はどうしてこの湖水を見つげ出すことが出来るだ？ そこであの見張りの鴨がみんなを呼んで鳴きだすだよ——こつちの方へおりて來いようつてな。鳥の仲間になつて、お前、^{まえ}ちやあんと秩序^{しまり}つてものがあるだよ。尤もこれあ、おいらのあて推量だかな。本當のことあ知れたこつてねえだ——どうしてあいつ

らは残つてるだかなあ？」

「何だつて射たなかつたの？ あんなに具合よくおりてゐたのにさ。一度に十羽でも二十羽でも射つことが出来たぢやないか。」

「あす射つだよ、な、きやうでえ、あす。」

「一體あの鴨はどこへ飛んで行つたの？」

「草地へは、みに行つただよ。」

「遠くへ行つたの？」

「二十露里ぐれえか、それともつと遠くへ行くだよ。」

少年はなほ色々質問をしたが、マクシームイチは一々それに返事をしてゐる暇がなかつた。彼は斧を持つて一晩ぢゆうの薪を用意するために、風で倒れた木をつたつて、枯木のあるところへわけ入つた。

夜。

コベルでは焚火がパチパチと燃えながら薬罐を暖めてゐる。火焰の光に中斷された闇がたゆたふて、陰影があだかも物怖ぢしたやうに、ぶるぶるふるへたり跳びあがつたりする。湖水は

金いろの反映をうけてキラキラと輝く。

獵師たちは夕餉をしたためてゐる。彼らは野禽をちよつと風變りに調理して食つてゐるのだつた——先づ羽根をむしつてから鹽を振つて、濡れぶきんで包んで、それを燻の中へ突つこんで焼くのだ。そして二人とも半焼けの禽をむしやむしややりながら、その味のよさに言ふべき言葉も知らぬ有様なのである。

「蝦夷山鳥がいちばん美味いね！」と、コーリヤが一心に頸を働かせながら、ひどく嬉しさうに叫ぶ。

「うまさに比べれあ、奴らの命なんざ、たわいもねえものさ。まあ、涙でもたむけてやるだけのものだなあ。」

「何だか僕よく分らないなあ。何だつて涙をたむけるの？」

マクシームイチは最後の小骨をしゃぶつて、それを水の中へ投げすててから、粗羅紗外套の袖で唇を拭つた。

「額に十字を切らにやなんねえところだが、どちらの手でするのか忘れちまつただよ。革命からこつち祈禱ちふことをやらないからなあ。まるで丸太みてえに不信心になつちまつただよ。まつたく、したが蝦夷山鳥のことあ、お前、自分で考げえて見ねえな——一體どんな生活だかち

ふことをさ。一分一秒の間も、鷹の爪にかけられやしねえかとびくびくしながら、あちこちへ眼を配つてゐなきやなんねえだよ。ところが假に冬どきのことを考へて見ねえ。可哀さうに何處に一とろ安らかに眠るところもねえでねえか。寒中に蝦夷山鳥は雪の中に穴をほつてすつこむのが好きだがな。それは狐にだけは、もつけの仕合せといふものさ。あの狡い悪魔の齒に可哀さうにバリバリ骨まで齧られてしまふだよ。縦林の中へ隠れやうものなら——貂の奴が狐にも劣らず飛びかかるだよ。しかし何といつても、いちばん險呑なな人間だて。しよつちゆう用心をしてゐなくちやなんねえだ——ごそつといつても、鐵砲を持つた人間が來たのでねえか知らとな。また蝦夷山鳥には奇態な性質があつて——獨りでじつとしてゐることが嫌ひなんだよ。で、他のが鳴く聲をききつけると、自分もやはり唄ひかへしながら、その仲間の方へ向けて地面を走るなり、飛ぶなりして近づくだよ。ところが、それがまた疑ひもない畏でな——獵師が鳥笛を吹いてゐるのだよ。そこでお陀佛といふ譯さ。きのふの朝も見たらうが？ おらはさう思ふだよ——世界ぢゆうの蝦夷山鳥はどれもこれもみんな同じやうにして滅びてしまふのだと。何せ誰もかも、やたらにあれを好くだからなあ……」

藥罐が口から湯を吹きこぼしながら煮え立ちはじめた。マクシームイチは用心ぶかくそれをおろすと、茶をいれにかかつた。

少年はここに何かぎこちないものを感じながら、考へこんでゐた。

「どうして人間は蝦夷山鳥を殺すんだらうね？」と、彼は聲の調子に非難をこめて訊ねた。

「別に人間にやあ、お前、罪はねえさ。ぢやあ、言つてみねえな、蝦夷山鳥には一體どうしてこんなうめえ肉があるんだかつて。な、してみれば罪は神さまにあるか、それとも、お前たちコムソモールの言葉ではねえが、自然に罪があるだよ。これがもし、南京虫みてえに、いやな臭ひでもあれば、誰も手出しをする者あるめえが。」

「ほんとだねえ、マクシームイチ——人間には關係のないことだねえ。」と、若い獵人はすつかり嬉しがつた。

遠く湖水の對岸にあたつて、一羽の鴨が鳴いてゐる。コーリヤは口を焼きながらお茶をのみのみ、何か隣りのコベルで朽葉をカサコソいさせてゐる方へ眼をやつた。マクシームイチは大きな茶碗から湯氣を立てながら、満ち足りたやうに腹を撫でてゐる。

「これで一晩ぢゆう温けえや。」

ついで、自分で揉み碎いた捻り煙草を吸ひつけて話しだした。

「この邊は土地がえらくもろいだよ。家畜にしる、人間にしる、經驗のねえものがここへ踏みこんだら——おしめえだ。何しろ沼澤だからなあ。ところによつては、枝をさしこんでも底に

とどかねえだよ。獵師だつて、鬼が澤といやあ、怯氣をふるふだ。一昨年もここで一人おつ死んだものよ。」

コーリヤは、はつと首をあげた。

「どうして死んだの？」

「譯あねえだ。こけえ來たにやあ來ただが、切り抜けて歸ることが出来なくなつてよ——足をとられてしまつただ。それあ秋のことだつたが、十二月になつて別の獵師がそれを見つけた時にやあ、すつかり凍つてしまつてゐたよ。貂の跡をつけてやつて來ただ。見るてえと、雪の中から人間の頭が出てゐて、すつかり齧られてしまつてゐただよ。齒を剥き出しにして、眼玉の代りに穴があるきりよ。獵師はあとを見ずに家へつつ走つたとよ。それから多勢でやつて來て死人を掘り出したが、胴體はどうもなつてゐなかつただよ。寒中のことで、腐りもしなかつただ。」

コーリヤには、やつと鬼が澤といふ名前の由來がわかつた——その怖ろしい作用の一部は身をもつて經驗したこともある。若い想像の中に、その獵師がこの不氣味な、ブルブル震へる迷路でひとり寂しく身を滅ぼしていつた物凄しい光景がまさまざと浮かびあがつて來る。彼は怖ろしさにぞつと胴震ひをした。

だが、彼は故意と平靜をよそほつてマクシームイチにかう訊ねた。

「でも、どうしてその男は森を抜け出すことが出来なかつたの？ 獵師の癖に！」

「馬鹿に威勢のいいことをいふが、おいらがここでお前を置いてけぼりにしたら、一體お前はどうなることだか？ ひとりでここから抜け出してみるがええだよ。」

コーリヤはきつと自分の友を見やつて、

「そんなことしちやいけないよ。」

マクシームイチは笑つてゐる。

焚火が燃えつきかかつてゐる。腹いっぱい食つたり飲んだりした後のこととて、薪をくべるために手をのばすのも億劫だ。それに焚火などはなくても暖かだ。沈黙がつづく。コーリヤは赤楊の木の間から空を見あげる。星が一行に見えてゐる、木枝のレース模様の中に、さながら樹木自身が金いろの雀斑をつけたかのやうに、キラキラと星が輝いてゐる。しかし下の闇の中を見ると不氣味になる。時どき水面で何かドボンと音を立てる。どこかで、まるで棄兒のやうに、梟が鳴きだす。そして、またしても不吉な静寂があたりを領する。鬼が澤の睡るむ氣配や、粘つこい沼地が息をはいて、練鉢の中の練粉のやうにブツブツ言ひながら、澤の臭ひを發散する物音までが聞える。

マクシームイチはだるさうに語りつづける。

「何でも人の話では、ここで昔、ひとりの坊さんがおつ死んだつてことだ。その時以來、この邊を鬼が澤と呼びだしたつてえ譯だよ。その坊さんはちよくちよく獵に出るのが好きで、酒にかけてもなかなか隅におけねえ仁ぢやつたよ。何でも或る日のこと、ふと思ひついでこの邊へ野禽をさがしにやつて來ただよ。山番に出逢つただがな、それが濕地へ足を踏み入れちやあいけねえつて警告しただのに、坊さんはそれを聽かねえで——無理やり踏んこんでしまつただ。あとでいくら山番が呼んでも、何の答へもねえんだ。たうとう濡れちまつたつてえ譯さ。何でも、今もつて生きてるつてえことだよ。ただからだぢゆうに漢が生えてな。」

「誰がさ？」と、コーリヤが訊く。

「坊さんがよ。」

少年は疑はしげに中年の獵師の顔を見つめる。

「どうして濡れた者が生きてゐられるのさ？」

マクシームイチが陰氣に、かう説明する。

「それは、こちとら仲間と違つて坊さんだつたからさ。坊さんが獵に出るちふこたあねえだのに、奴さんは出ただ。そこで今だにその天罰に苦しんでゐるちふだよ。わかつたかい？ こん

なことも言はれてるだよ、夜の十二時になると悪魔が奴さんの長い髪の毛をつかんで湖水の上を曳つぱりまはすつてな。ところが災難なことに、酔つぱらつてゐて、坊さんは十字架を家に置いて來ただ。それにお祈りの唱へられねえやうにと、悪魔めが奴さんの舌を抜いてしまつただよ、それで今その和尚さんは、まるで腹が空つてたまらねえもののやうに、唸ることが出来るきりだとさ。それが悪魔には面白えつて譯で、いい慰みにしてゐくさるといふことさ。」

「嘘を言つてらあ、」と、批判的にコーリヤが口を挿んだ、とはいへ背筋にぞみぞみと寒けを感じながら。「そんなことがあるものか。」

マクシームイチは、ほつと吐息をついた。

「あることか、ねえことか、おいらあ知らねえだよ。みんなが言つてるだけのことさ。で、おらの聞いたことを取り次ぎしたまでのことさ。」

奇態なことだ——モスクワではつひぞ悪魔の話なんか少年は考へても見なかつた。學校でもさうだし、父や母も、悪魔なんてものは神様と同様、坊主が人をおどすために考へ出したものだと言つてゐる。それなのに、ここでは何故かしら怖い。譯のわからぬ不安がうまれて神經を搔きたてるのだ。焚火は消えて、炭だけが燻つてゐる。コーリヤは身を起しておぼおぼと湖面を眺める。しかし星影の映つた黒い深淵の他には何も見えない。どちらを見ても濕つばい見と

ほしのきかぬ暗闇だ。しかし、この澤のうちには誰か顔のないものがじつと身をひそめて待つてゐるやうに思はれる……。

突然、人がドボンと飛びこんだやうな激しい水音がした。暗い恐怖の波を浴びせられた少年はばつと後ろへ跳び退つて、しやがんで體をすくめた。何か巨大な壓倒的なものが彼の上へおしかぶさつた。今こそ直ぐに彼は、二つの怪物の揉みあひを耳にしさうである。一方は泥ごけの生えた奴で必死になつてうめき、他方は角のある毛むくじやらの奴で、げらげらと大聲をあげて笑ひころげるだらう……。

まるで盗人のやうに用心ぶかく少年はマクシームイチの方を横目で見た。マクシームイチの丸い顔は、嘲けるやうな笑ひ皺で二分されてゐる。少年はきまりが悪くなつた。

「あれ何だか知つてるの、マクシームイチ？」とコーリヤが聲の調子を變へて訊く。

「うう？」

「もつと薪をくべようよ。さうしなければ、何だか寒くなつたよ。」

「それもさうだなあ。」

マクシームイチは火を吹きつける。そして氣持よくパツと焰が燃え立つた時、彼はかうつけ加へた。

「悪魔のことと、坊さんの話は、あれあ人々の餘計なお喋りだよ。おいらは何度このコベルで夜をあかしたか知れねえけれど、變つたことあ何ひとつ耳にしなかつただなもの。」

「僕もいい加減のことだと思ふね。」と、若い獵師はすつかりいい氣持になつて相槌を打つた。「馬鹿げた迷信にきまつてらあ。」

ここでマクシームイチがコーリヤに向つて言つた。

「うん、さうさう、なあ、きやうでえ、お前おれにモスクワから毒藥をひとつ取りよせてくれねえか。ストリキニーネつてえ藥だよ。」

「何にするの？」

「狼と狐を殺すだよ。おいらあ、どうにもあれが獲りたくて堪らねえんだ。ストリキニーネが手にあつたら、五百ルーブリはまうかるだかな。でねえと、小屋がまつたく壊れてしまつてるだからなあ。」

「取りよせてあげるよ、マクシームイチ、屹度、取りよせてあげるよ。モスクワへ歸つたらすぐマリヤ・フォードロヅナのところへ行くんだ。醫者のところには多分ストリキニーネがあるからね。熊はあれで殺すことが出来ないの？」

「出来ねえ。熊は餌に引つかからねえんだ。奴あ自分で引き裂いた家畜でなきや食はねえんだ。」

よ。狡い悪黨だ。」

ちよつと口を噤んでから、マクシームイチはまた語りつづけた。

「熊といふ獣けものにおかした奴だよ。おいらが部落むらの養蜂場でこんなことがあつただよ。その養蜂場は森の中にあるのだがな。或る朝、蜜蜂飼が眼をさましたと思ひねえ。夜のひき明けで、やつとあたりが明るくなつたばかりの頃さ。ふと窓の外をのぞくと——何ちふことだ？ 養蜂場で喜劇がおつばじまつてるだ。熊が一匹へえつてゐてな、奴さん蜂の巢を二つ平げてしまつてるだよ。だが別に急いで歸かへえつてゆくこともないでねえか？ 勿論ねえだ。で、奴さんちよつくら遊戯がしたくなつたといふ譯さ。しかもその熊はもう若くはねえんだよ——五十貫くれえの代物だつたといふから……。」

密 筋

「どうして遊戯をしたの？」と、コーリヤがやつきになつて訊ねた。

「考げえたものよ。奴さん後趾あとあしでぬうつと立ちあがつて、前趾で大きな木の枝んところにつかまるとえと、ブランブラン體を揺ぶりはじめたものよ。それが、よつほど面白れらしいんだよ。いかにも満足さうにハアハアと言つてるだ。ところで、その蜜蜂飼の野郎がまた、おつそろしくそ力のある男で、その性質がまるで火薬みてえな奴と來てゐただ。ちよつと氣に喰はねえことがあつても赫つと眼を血走らせて、相手かまはず跳びかかつて行くつてえ奴なんだ。それ

で、この時も、もうすつかりむかつ腹を立ててしまつただ。いきなり杖を握みざま熊に近づいただよ。こつそりと、聲音を忍ばせてな。で熊めがブランコをおつばじめたばかりのところ、蜜蜂飼の奴がやつと掛聲もろとも熊の背筋を横なぐりにどやしつけただ！ すると熊はどたんど地面へ落ちて、養蜂場の中をごろごろころがつて、巢箱の大半をひっくり返してしまつただ。そして森をゆるがすやうな聲で吼えながら、まるで消防のホースの筒先から出るやうに、血のまじつた下痢をやらかしてゐるだ。蜜蜂飼は我れに返ると、急に怖ろしくなつただよ。今に熊の奴が自分を舐めに來るだらうと思ふと、達者な足もくなつて——尻餅をついてしまつただ。そしてやはり大きな聲で『大變だあ……』てんで、救ひを求めたものさ。」

鬼が澤が、少年の笑ひ聲で反響した。
「それからどうしたの？」と、コーリヤが訊ねる。

「熊はそのまま、おつ死んでしまつただよ。それっきりの話さ。忽ちおつ死んでしまつただよ。いくら力があつたにしても、心臓が弱かつただなあ。あまりの驚愕おどろきに打ち克つことが出來なかつたちふ譯さ。」

「で、蜜蜂飼は？」

「その段になると、人間は強えて。間もなく元氣を取り戻しただよ。」

再び快活な笑ひ聲をあげてコーリヤがころげ廻り出した。
「ああ、可笑しい！ その熊がそんな風にブランコをしたなんて！ もつと何か話しておくれよ、マクシームイチ！」

二人の友達同士は焚火の傍らに坐つたまま、めいめいお喋りをつづけた。とはいへ、大概は年うへの獵師の方が話して、若い方はただ神妙に聴いてゐた、飽くことを知らぬ渴望をもつて聴きいつてゐた。現在のコーリヤにとつてはマクシームイチほど慕はしい友は世の中に一人もなかつた。この人の話はどうな書物よりも、もつともつと面白かつた。

「露西亞のどんな地方へ行つても、おいらは獵には必らず出かけるだよ。或る時おいらは波蘭にゐただ。それは戦争の時だつたがな。ひとつ鐵砲をかついで遊びに行つてやらうと考へただ。その邊は山があつたり野があつたりといつた土地だつたがな。おいらが或るちよつとした谷間へ入えつて行つて、ふと見ると、叢みのかげに野生の牝山羊が立つてゐるだ。さつそく狙ひをつけてズドン！ とやつた。直ぐひつくり返りをつただ。すつかり嬉しくなつて、おいらが傍へ近づくと、おやおや！ おらは何といふことをしてのけただ？ その山羊には二匹の子供があつたのだ。まだほんの小つぽけな仔山羊だ。見れば可愛らしい奴らだ。脊の高い、蠟燭みてえに細い脚をしてゐる。眼は大きくて、黒々してゐる。それがおいらを、いかにも悲しげな、

涙のこぼれさうな眼で眺めてゐるだよ。そして死んだ母親の傍からは何處へも逃げて行かぬんだ。まだ何も知らねえで、危険といふことが分らねえんだよ。ああ、おらあ、胸が緊めつけられるやうだつたよ！ そこで、おらは牝山羊を肩にかついで、さあゆかうと歸りかけたのさ。すると仔山羊があとからついて来るだ。ピョコピョコ走りながら、まるで子供の泣くやうな聲で啼くだよ。母山羊を下におくとな、體をすりよせて来て、頭をその腹に押しつけをるのさ。見ちやあゐられねえ——涙がこみあげて来てな。さうかといつて殺すつてことあ出来ねえ——どうしてこんなものに對して手があげられやう？ もう、おら、この仔山羊たちが可哀さうで可哀さうでならねえだ。ほんとにするかね？ おら、ずうつと途中、生きた心地もなく、まるで後ろから親身の子供でも駆けて来るやうな氣がしただよ。そんな風にして家までつれて来たつげがな……。」

コーリヤは潤んだ眼を何度もしばいた。湖水の方を振りむいて黒い水面を窺つたりしたが何も見えなかつた。何かしら胸へつきあげて来て痛いほど咽喉もとをしめつけた。で、やつと數分してから、震へ聲で訊ねた。

「その仔山羊はどうなつたの？」

「中隊長に呉れてやつただ。モスクワまで連れて歸えつた筈だよ。」

若い獵師は仰むけに寝ころんで、それから尙しばらく話をきいてゐたが、そのうちに臉が重くなつて、眼を閉ぢてしまつた。臉をあげようあげようと骨折つてみたが、もうあげることが出来なかつた。ただ、自分の體が、まるで熱い太陽の前の散雲のやうにとろけてゆくやうな氣持がするだけであつた。

夜が白んで来て、だんだん星が消えしぼむ。

木々の輪廓がおひおひはつきりして来る。

「おい、起きなよ！ きこえねえのかい、ああ？」と、マクシームイチが自分の仲間を揺さぶる。

コーリヤは急に鼻聲を出して眩きはじめる。

「仔山羊を殺しちゃいけないよ、いけないつたらさ。」

それでも起きあがつて、長いあひだ眼を擦つてゐたが——なかなか正氣がつかない。

マクシームイチが水を入れた藥罐を持つて来て、いひきかせる。

「さあ、きやうでえ、顔を洗ひねえよ。すぐに撃ちにかかるとだぜ。」

「撃つて。」

コーリヤは急に飛び起きて、手早く顔を洗つた。

鬼が澤の上には薄いベールをかけたやうに霧がおりてゐる。遙か冷たい大空で、はつきりと鳴き交はしてゐる鴨の聲がききとれる。爽々しい。

獵師たちは袋の中から豫備の藥莖を取り出す。

「聞きねえ！」と不意に、マクシームイチが耳を敬てた。

翼の音が聞える。それはどれより早い、せつかちな鴨が餌食はみから戻つて來たのである。十羽ばかりの群だ。彼らは急旋回をすると、殆んど垂直に、獵師たちの前へまともに湖上へと降下した。灰いろの靄とまざりあつて、鳥の姿がよく見えないので、二人は大よその狙ひをつけた。コベルからは長い火の舌がきらめいて、銃聲が朝の静けさを破つた。ガンと、耳鳴りがする。水面では翼をバタバタさせながら一羽の鴨が斷末魔の痙攣にのたうち廻つてゐる。コーリヤは鐵砲を射つ暇がなかつたけれど、それでも喜ばしさうに金切聲をあげた。

「あつた！」

二三分すると、又もや一群が湖面へ着水した。

再び射撃の音がして、又もや水面には、死に瀕した野禽が羽ばたきをしてゐる。

「今度は僕が射つよ！」と、コーリヤが昂奮して叫ぶ。

「お前の眼はなかなかよく利くからなあ。」と、マクシームイチが答へる。「だが、かういふことにはしよらうぜ。お前はコベルの左側にゐるから、左の方のを射ちねえ、おいらは右の方のを射つからよ。でねえと、おいらは一羽の鴨に二發の弾丸を費すことになるからな。」

夜が明けるとつれて、鴨の歸つて來るのがますます頻繁になる。湖面へ三四羽づつ、時には十羽づつ、いやそれ以上も一緒に降りて來る。今はもう水面に浮かんでゐる姿がはつきり見える。獵師たちは鐵砲に彈丸をこめる暇もないくらいである。浮いてゐるのに向つて一齊射撃を浴せる——數羽の鴨が飛沫をあげながらもつれあふ。残りの鴨は恐怖におののいて上へたあがらうと、長い頸をのびしながら、あはただしく翼をばたき、殆んど垂直に舞ひあがる——一刻も早く森の上空へあがり、風を切つて、一直線にこの怖ろしい銃聲から少しでも遠ざからうとする。しかしまた二發の銃聲が轟いて、死がその群れの中の二羽の鴨に見舞はれた。一羽がやたらにくるくると舞ひながら落ちて來ると、それについて、もう一羽の方が、まるでくしやくしやになつた包みのやうに落ちて來た。

「見ただろ、マクシームイチ、僕があの一羽をやつつけたところを？」
「うめえぞ。」

コーリヤはまるで有頂天になつてしまつた。彼は十をの年から鐵砲を持つことを覺えたが、

このやうな獵はうまれて初めてのことだつた。フランコットの銃身が熱くなり、彼自身もかつと體がほてつて來て、着物もすつかり脱ぎすてしまひたい位だ。

鴨にとつてのこの慘劇は、餌をほみに出かける時には殆んど一時に全部が大鳥群をなして行きながら、歸りには數羽づつの小部隊で戻つて來ることに起因してゐる。獵師はこの鴨の習性をちやんと心得てゐて殺戮をほしのままにするのである。もはや夜は明けはなれて、最初の陽光を待ちながら梢は喜ばしげに薔薇いろを帯びて來たが、銃聲の轟きはしつきりなしに續けられてゐる。ズドンズドンといふ反響が森にこだまする。鬼が澤の上には硝煙の渦巻がもうもとたちこめた。射撃に驚いた鴨の一群が舞ひあがる同じ時刻に、さうした伏兵があらうなどは夢にも知らぬ他の鴨たちが水面へ降りて來るのだ。

湖水の上の空中には、鴨の群れがまいまい舞つてゐる有様なので、百發百中に射落すことが出来るのだ。

日の出と共に鴨の歸來は減少した。そこでマクシームイチが言つた。

「おいらのところにやあ、もう藥莢が二本しきやねえや。」

「僕もこれでおしまひのを射つところだよ。」

「そろそろ一服やる時分だなあ。少しは種に残しておいてやらうぜ。」

朝飯を食つた。

マクシームイチは斧をとつてあたりを見廻した。

「禽を集めなきやなんねえだ。まだいろいろと忙がしいだよ。」

彼はコベルを降りると、大きく迂回して反対側から湖水の方へ近よつて行く。その邊は小さい入江になつてゐて、水面がきれいで、草も生えてゐない。長いあひだ斧の音が響いてゐた。湖水の上を水平に掠めては、時どき鷹が横ぎつた。彼らは死んだ禽を貪婪な眼で狙ひながら、入江で仕事をしてゐる獵師に脅やかされてゐるのだ。その中の一羽が大膽にも下の方へ降つて来た。コーリヤは鐵砲を取つたが、銃聲が轟くと同時に、鷹はまるで眼に見えぬ障害にでもぶつかつたやうに、手負ひになつて、羽ばたきをしながら、音もなく宙でキリキリ舞ひながら叢みの中へ落ちて来た。

「一羽はしとめたぞ」と、若い獵人が夢中で叫んだ。

「何を？」とマクシームイチが訊ねる。

「鷹さ。」

「忌々しい、彼奴らは、まるで藝でもしこまれたやうに、鴨を盗まう盗まうにかかつてやがる

だよ。」

しばらくするとコーリヤの眼には、湖面へ浮かび出た獵師の姿が映つた。彼は長い竿を働かせながら筏の上に立つてゐるが、ツボンも無く、裸足のまま朝日に照らされてゐる。野禽が想像以上に澤山で、マクシームイチはそれを拾ひ集めながら、狂人のやうに、げらげら笑つた。やがて射撃の足場にしたコベルの方へやつて来た。筏では間近く寄ることが出来ない——水面をぎつしり蔽つた葦が邪魔になるからである。彼は三間ばかり離れたところにとまつて、コーリヤの方へ鴨を抛りはじめた。こちらはそれを一羽々々勘定しながら、山に積んで大はしやぎだ。重荷を卸した筏は新しい荷積のために歸つてゆく。

「マクシームイチ！ 八十七羽あるよ！」と最後の二羽を受けとめて、大聲でコーリヤが知らせる。

「ほほう！ えらく射ちおとしたものだなあ。馬でもゐねえぢやあ始末が出来ねえぞ。せめて沼地からだけでも運び出せたらなあ。」

筏は進水した入江の方へと姿をかくした。やがてバサバサと灌木を押し分ける音がきこえて来た。それはマクシームイチがコベルへ戻つて来るのだつた。危険な場所を迂廻して、ガサガサ音をさせながら笑つてゐる。彼は片手に斧を持ち、片手に鴨を二羽さげてゐた。

「どうだい、まだあつたよ。」
 「何處に？」
 「叢の中によ。」

コベルまでの距離を短縮するために、獵師は近途をしようと決心した。彼の目の前の草の上に腐つて黴の生えた丸太が横たはつてゐる。彼は足でそれをさぐつてみた——根本は丈夫だ。それををつたつて、輕業師のやうにバランスを取りながら、快活に口笛を吹いて歩いて来る。

不意に棒が彼の足の下でボキツと言つた。一瞬、マクシームイチは狼狽して、許し難い過失を犯してしまつた——後へ引つ返す代りに彼は前方へ——小さい猫柳の株に向つて一散に走つた。なるほど彼はその灌木につかまることは出来たが、兩足を沼へ突つこんでしまつた。その株がまた一向たよりにならず、——獵師の重みでだんだん深みへ陥ちこんでゆく。まだ大きいコベルまでは五六間の距離がある。ちよつと絶望的な状態になつてしまつた。

コーリヤは犬の吠き聲に似た叫びを聞きつけた。が、恐怖のために剝き出しになつた眼を見ると、咄嗟に、何か怖ろしいことの起つたことを了解した。彼は啞のやうに口をあけたまま、膝頭をブルブル震はせながら、立ちすくんでしまつた。

マクシームイチは我れに返ると、直ぐさま、何よりさきに少年の方へ斧を抛げ渡さなければ

ならないと考へた。たださうすることによつて、少年から救ひを求めることが出来るだけである。獵師は右手を後ろへひいて狙ひを定めた。

「傍へどきねえ！」

コーリヤはぎくりとして、木の後ろへ跳びのいた。

斧は眞直ぐにコベルへ届いた。

「赤楊を伐つてくれ！」

「どの？」

「こちらの、一番はじつこのを。」

「これ？」

「さうだ。」

少年は木の幹へ斧の刃を打ちこんだ。

赤楊の梢が打ちふるへた。

「待ちねえ、忌々しいなあ、」と、マクシームイチが不意に嘔鳴りだした。「何をやるんだい？ おいらの方へ倒れるやうにこちら側を伐るんだよ。それからもう一つ——おいらの帯を持つて来て別の木へ體をしばりつけねえ。でねえと、コベルからおつこちてしまはあ——さうなつた

ら二人ともお陀佛だぞ……」
その赤楊は全くコベルの外れに生えてゐた。それを伐るには沼の上へ乗り出すやうにしなければならぬのだ。

マクシームイチは片方へ倒れた灌木に辛うじてつかまつてゐるが、若し、それがなかつたら、遠の昔に彼はこの沼地の緑褐色に擬装された表面から姿を没してしまつてゐたに違ひない。だが、今のところ彼は腰の邊まで埋まつてゐるだけである。しかし沼が柔らかい粘々した大口でだんだん彼のからだを呑みこんでゆくのが感じられる——徐々に、まるで獵師の苦惱を樂しむもののやうに呑みこんでゆくのが。

彼のぐるりでは黒い汚水がゴボリ、ゴボリと音をたて、あぶくがふくらんだり、破ぜたりしてゐる。それが彼には、誰か眼に見えぬ鼻つまりの鼻孔を持つた人間が深淵から腐つた臭ひを放ちながら息を吹いてゐるやうに思はれる。脚をつたつて下から上へ冷氣が匍ひあがつて來て髪の毛をぞつと震はせる。木々は黙々として平然と立つてゐる。ただコベルにある一本の赤楊だけが、ぶるつぶるつと震へてゐるばかりだ——その根本のところでは青いシャツを著た少年が、忙がしさうに斧を揮つて働いてゐる。獵師は果ない望みを以つてその赤楊を眺めてゐる。それはほんの僅か彼の方へ傾いた。それが彼からほぼ一間ぐらゐるところへ倒れなければ駄目

だ。もしもそれより近かつたなら？ 彼は太い枝に腦天を打たれて、鬼が澤の惡臭を孕んだ胎内ふかく押しこまれてしまふのではないかと想つてぞつとした。

彼は噎れた聲で友達を呼んだ。

「待ちねえよ、コーリヤ！」

「何さ？」

「もし、おいらの命が駄目だつたら、お前は、ここへ來る時に通つた途をとほつて鬼が澤から抜け出ねえよ。その他にはここからの出途はねえだから。大事なことは、おれたちの足跡をよく見て、他へ迷ひこまねえことだ。」

コーリヤはかぶりを振り、手を振りまはして、泣聲で叫び出した。

「駄目だよ、駄目だよ、マクシームイチ、そんなことあいけないよ！ きつと、この僕が助け出すよ……。」

時たま鴨が飛んで來たけれど、水面へはおりないで、おづおづと、けさの夜明けに不意に銃聲と閃光との相交錯した湖水の上を旋廻してゐるが、斧の音を聞きつけると、再びどこかへ飛び去つてしまつた。

沸ききつた蒸風呂へでも入つてゐるやうに熱い。コーリヤの著てゐたシャツは、絞るほどの

汗にびつしより濡れた。それでも彼はしきりに伐りつづけた。その赤楊はさして太いものではなかつたが、不馴れた仕事とて遅々として涉らない。力以上に駈けた若い仔馬のやうに、すっかり息を切らした彼は、一息いれるために手を休めた。渴ききつた咽喉は、まるで麥の糲でもひつかかつてゐるやうにシカシガむづがゆく、眼が曇り硝子のやうにぼうつとかすむ。しかしだんだん泥の中へ沈んでゆくマクシームイチの姿を見ると、再び、仕事にとりかかるのだつた。新らしい木片こっけが飛ぶ。幹の半分以上までは切りこんだが、赤楊は依然として倒れない。頭の中を切れ切れの思ひが通りすぎる。そして破滅に瀕してゐる友達も可哀さうなら、自分も怖ろしい。この經驗をつんだ獵師と別れて、どうしてここから抜け出すことが出来やう？ 自分ももうモスクワを見ることも出来ないで、このコベルの上にまるで俘虜みたいにじつと坐つたまま死ぬまで泣きつづけるのだらうか？ 父や母はもはや永遠に自分の歸りを迎へることは出来ないのだらうか？

もう餘すところ僅かで、赤楊は今にも倒れさうだ。けれどコーリヤはもうつづけて伐る元氣もなく——まるで空氣でも不足してゐるやうに、ハアハアと息をついてゐる。彼はさも頼りなげに、別の木の幹へ凭れかかつてしまつた。胸が激しく波うつてゐるが、その下では手負ひになつた鳥のやうに心臓がもがいてゐるのだ。手がブルブル震へる。その時、ふと噎れ聲が耳へ

入つて彼の脳髓を解きほぐす。

「伐りねえ……はやく伐りねえ……」

沼はマクシームイチの頭と肩だけを地表に残したまま、彼を壓縮し始めたらしい。唇を紫いろにして、齒を剥き出して、怒張した怖ろしい顔が草の間から覗いてゐる。白眼が病的に剥き出されてゐる。ぐるりのものが何もかも、まるで夜の火事場のやうに眞赤になつた。森の眞上で太陽が踊り出した。

「コーリヤ……」

少年は夢からさめたやうにぎよつとした。そして疲れを征服して再び斧を揮ひだした。

赤楊がギーツと音を立てると同時に、ざあつといふ騒音と共に自分の枝や他の木の枝をへし折りながらぶつ倒れた。

鬼が澤が不氣味にとよめいた。

「はやくこけえ來な……」

コーリヤは勇敢に友の呼ぶ方へと駈けつけた。彼は手に帶を持つて、澤へ落つこちさうになるのも構はずに、殆んど走るやうに木の幹をつたつて行つて、マクシームイチの前でとまつた。獵師は木の枝に蔽はれてゐたが、逸はやくそれにつかまつてゐた。ひつ搔かれた彼の顔からは

血がしたたつてゐる。彼は木の幹へ近づかうとして躍起になつてゐたが、沼がびつたりと彼を抱きすくめて、いつかな離さうとしない。脆い枝はボキボキ折れてしまふ。

少年は、今はもう怖ろしさも感じなかつた。頭がテキパキと働いた。そしてただ一つの感情が胸の中で沸き立つてゐた——それは一刻もはやく年上の友達を救ひ出すことである。彼は帯の端を相手の方へ投げてやり、自分は他の端を掴んでゐた。

「握るんだよ、マクシームイチ！ しつかり握るんだ！」

決死の闘争がはじまつた。少年はしつかりと木の幹に脚を踏んばつて、獵師を自分の方へ引きよせようとする、沼はいつかなそれを放さない。赤楊の幹の上で小柄な人間の姿が一層はげしく彎曲し、顔に血をみなぎらして、呻き聲をあげる。脊骨が折れなければよいがと思ふほどだ。やつと相手の胴體が少しづつ引きずられた。マクシームイチは、より太く、頼りになる枝に旨くつかまることが出来た。彼は體を伸ばして、信じ難いほどの緊張に息をつめた。わななく兩腕の皮下には、電線のやうな腱が筋張つてゐる。まだ若干の力が残つてゐた。それら、やつと胸が自由になつて、ねつとりした泥濘から徐々に抜け出して来る。コーリヤは枝をつたつて行つてマクシームイチの體に近より、その胴體に帯をかけた。再び弓のやうに體を曲げながら、うんうん引つ張つた。彼の眼の前には火の輪がチラチラと浮かんだ。

沼はまるで健啖な豚のやうに貪慾さうなゲーツといふ音とともに獲物をはなした。

獵師たちの距離はだんだん狭まつた。

彼らの頭上を、頭の赤い啄木鳥が鳴きながら飛びすぎると、どこか湖水の對岸の方で、また長くひつばるやうに、呻くやうな聲で鳴きだした。

「ううふ！」やうやくマクシームイチが、赤楊の幹へ攀ぢのほりながら、太息をついた。

二人は木の叉につかまつて、それにしがみついたまま、ハアハアと重苦しい息をつきながら長いあひだ黙つてゐた。

表紙背の符號	1
定價(錢)	二〇
送料(錢)	三六
	六六
	九九
	九二
	四二
	四〇
	五〇
	六〇
	七〇
	八〇

□此の文庫は、内容厳選と最低の廉價とを以て第一義とし、専ら大衆普及を目的として刊行す。

□此の文庫に收容するものは、東西古今百般の書に亙り、校訂、註譯、翻譯、總て典據たるべきを期す。

□此の文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歴史、文學、藝術、美術等百般に及ぶ。

□表紙意匠中、1は十錢を、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。

□定價及び送料左の如し。

發 兌

改

東京市芝區新橋七丁目十二番地
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43) 四三二一番

社

版 權 所 有

譯 者

平 井 肇

山 本 三 生

發行者

森 島 金 治 郎

印刷者

東京市芝區西廣寺町六十一番地

昭和十二年九月六日印刷
昭和十二年九月十日發行

改造文庫 第二部 第三百三篇

密 航 他二篇

定價三十錢

(長谷部製本)

改造文庫第一部目録

Table of contents for '改造文庫第一部目録' listing titles, authors, and page numbers across various categories like '富論', '人口論', '経済学原理', etc.

Table of contents for the left page listing titles like '現代哲学思潮', '佛蘭西革命史', '経済学原理', etc., with authors and page numbers.

基礎概史の住谷良治著 5
ソウイートロシアの田中時太郎著 5
の農政の野田中時太郎著 5
のレーニン主義の野田中時太郎著 5
エルフト綱領解説の三輪謙三著 3
マルクス経済學大綱の田中九一著 2
キリスト教の本質の藤田樗牛著 5
唯物論史入門の藤井米蔵著 5
日本美術史(上巻)の中村亮平著 5
日本美術史(下巻)の中村亮平著 6
の知(上巻)の中村亮平著 6
の知(下巻)の中村亮平著 6
泰西美術の知識の中村亮平著 6
民族移動史のハッポドン著 2
東洋美術(上巻)の中村亮平著 6
東洋美術(下巻)の中村亮平著 6
の知(上巻)の中村亮平著 6
の知(下巻)の中村亮平著 6
三民主義續編の孫中山著 4
婚姻と離婚の青山道夫著 3
何をなすべきかの内房吉郎著 4
人生論の柳田泉著 4

文藝評論集の小林秀雄著 3
ドストエーフスキイ論の秋田道彦著 5
民衆史(一)の小堀其三著 5
民衆史(二)の小堀其三著 5
民衆史(三)の小堀其三著 5
民衆史(四)の藤本三吉著 5
混同秘録の伊豆信淵著 3
普佛戦争史の荒畑勝三著 6
マルコポーロ旅行記の深澤正策著 7
財政概論の堀川忠雄著 4
日本社會史の本庄榮治郎著 4
マルクス藝術論研究(一)の上田進著 3
マルクス藝術論研究(二)の上田進著 3
マルクス藝術論研究(三)の上田進著 3
法律哲學綱要(上)の田村實隆著 4
法律哲學綱要(下)の田村實隆著 4
キリスト教の起源(上)の栗原佑理著 4
キリスト教の起源(下)の栗原佑理著 4

人類學(第一部)のタイラー著 4
人類學(第二部)の高山洋吉著 4
階級社會の藝術の藤原惟人著 4
文藝論の藤田正信著 4
華山文集の藤田正信著 4
非時代的考察の阿部河上共著 4
藝術論文集(一)の井汲越次著 4
藝術論文集(二)の井汲越次著 4
藝術論文集(三)の野上英著 4
書簡集の野上英著 4
バルザック論の平岡暉著 4
ロシア文學史(上)の伊藤整著 4
ロシア文學史(下)の伊藤整著 4
キエルケゴール論の伊藤整著 4
(以下續刊)

改造文庫第二部目録

古事記の澤田久孝校訂 近
萬葉集(上巻)の折口信夫校訂 近
萬葉集(下巻)の折口信夫校訂 近
古今集の青澤義則校訂 近
新古今和歌集の青澤義則校訂 5
新源氏物語(上巻)の折口信夫校訂 近
新源氏物語(下巻)の折口信夫校訂 近
枕草紙の山岸徳平校訂 近
平家物語(上巻)の吉澤義則校訂 4
平家物語(下巻)の吉澤義則校訂 3
雨月物語の山口潤校訂 2
山家集の藤田茂吉校訂 近
俳諧七部集の藤原藤月校訂 3
蕪村七部集の藤原藤月校訂 3
伊勢物語の久松潜一校訂 2
神皇正統記の宮地直一校訂 3

奥の細道の藤原藤月校訂 3
曾根崎心中・心中天の黒木助哉校訂 3
網島・女殺油地獄の黒木助哉校訂 3
冥途飛脚の五十嵐力校訂 近
國姓爺合戦の五十嵐力校訂 近
大經師昔曆の樋口慶千代評註 2
重井簡の樋口慶千代評註 2
西鶴織宙(上)の樋口慶千代評註 2
西鶴織宙(下)の樋口慶千代評註 2
金槐和歌集の半田貞平校訂 4
大鏡の青澤義則校訂 5
徒然草の吉澤義則校訂 3
萬葉漫筆の佐佐木信綱著 6
油地獄の藤田藤雨著 近
北村透谷選集の島崎藤村編 1
樋口一葉選集(一)の樋口一葉著 1
樋口一葉選集(二)の樋口一葉著 1
平凡二筆の四迷著 1
子規佛話の正岡子規著 3
子規歌論の正岡子規著 3

坊つちやんの藤田日漱石著 2
草枕の藤田日漱石著 2
それからの藤田日漱石著 3
一湯の玩の石川啄木著 2
我等の一團と彼の石川啄木著 1
雲は天才であるの石川啄木著 1
山陰土産その他の島崎藤村著 2
作曲民謡集の北原白秋著 2
白秋中記の神近市子著 2
厭世家の誕生日の佐藤春夫著 1
日輪の藤田光利一著 1
労働者の居る船の藤田光利一著 1
海に生くる人々の藤田光利一著 2
小公子の若松健子著 2
ホワイト・ファンクスの堀利雄著 3
はやりの唄の小杉天外著 3
自選朝の螢齋藤茂吉著 2
自選十年の島本赤彦著 2

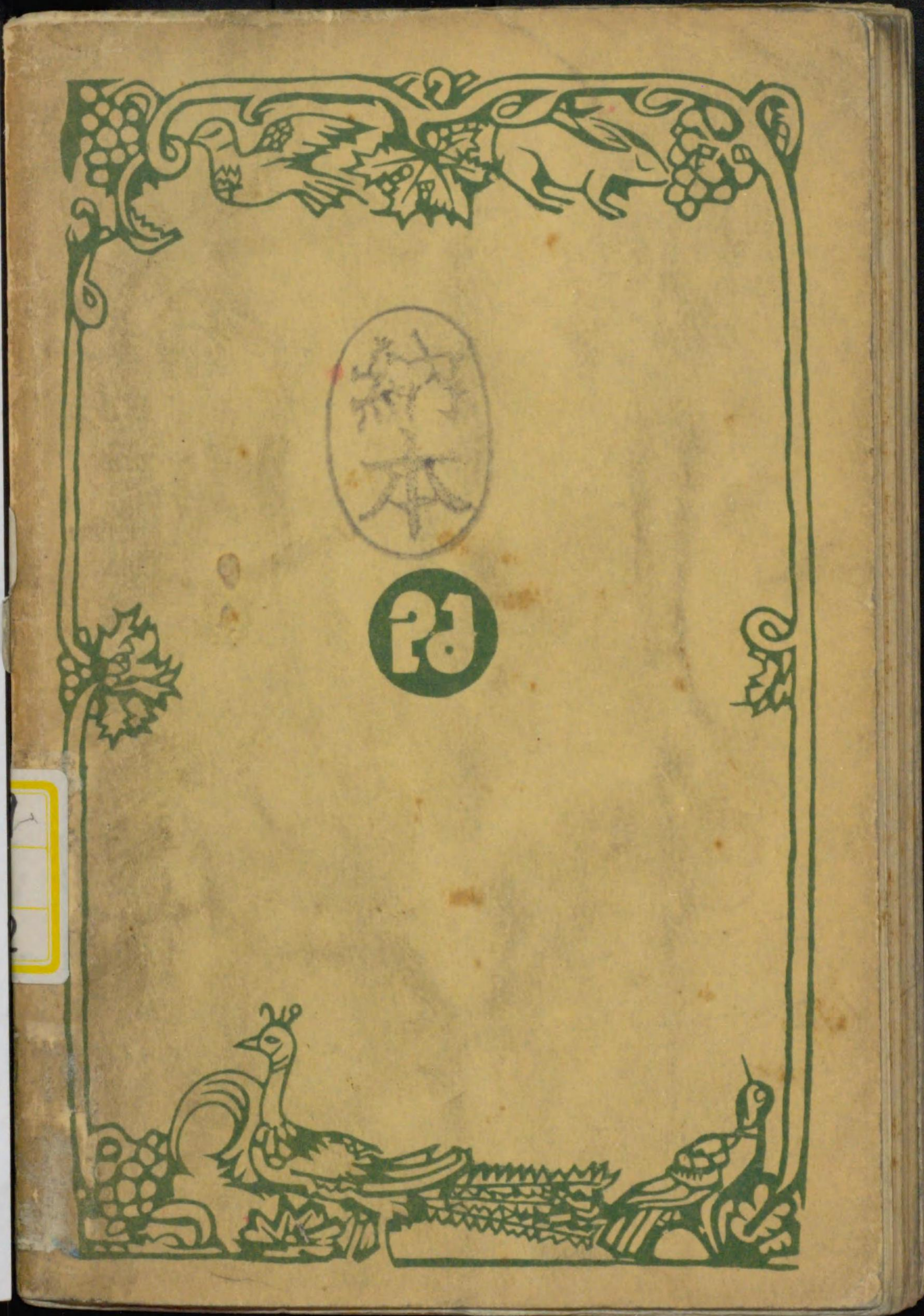
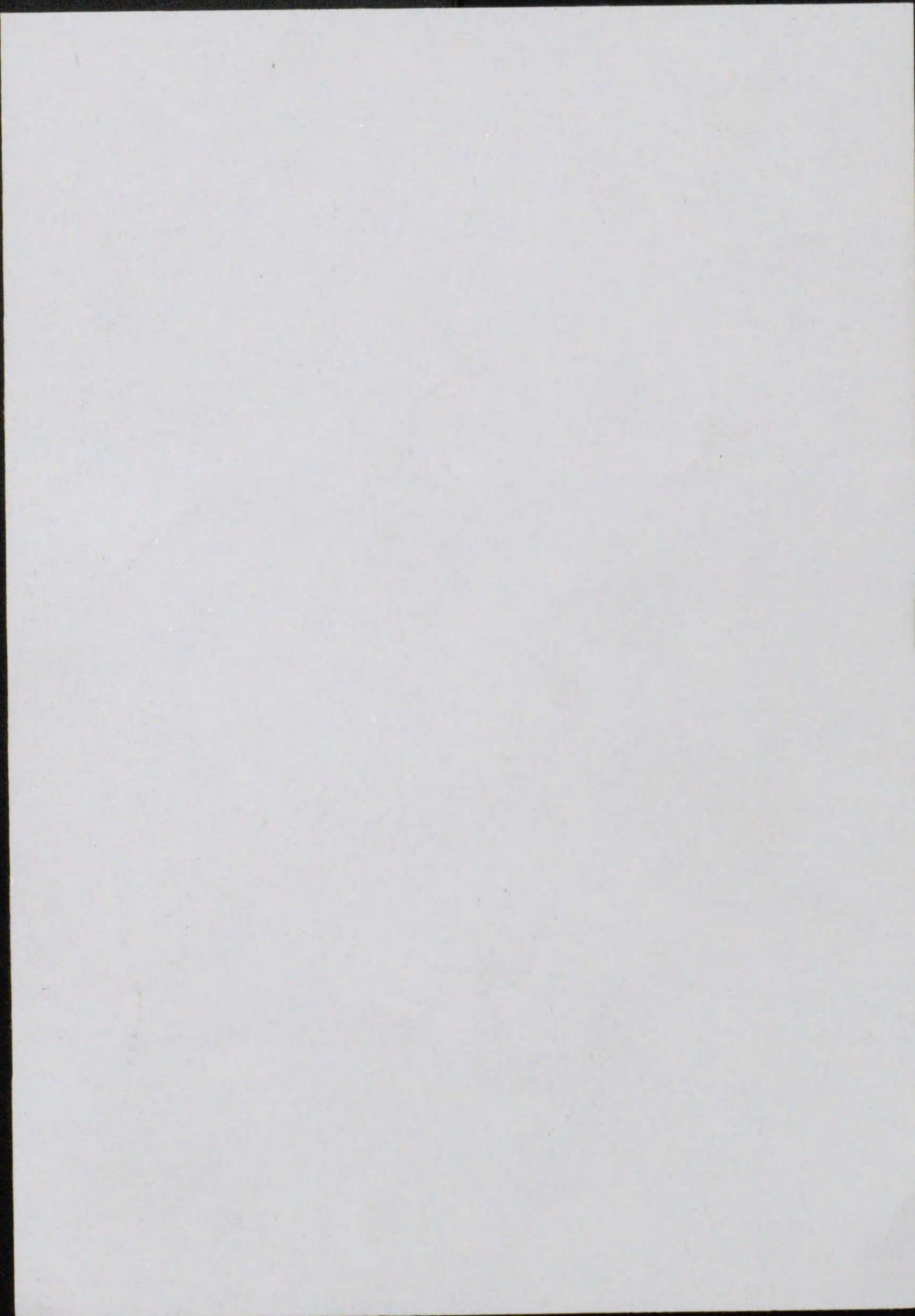
信綱文 集 佐々木信綱著 2	鶯の卵 土岐善磨著 3	チエホフ書簡集 内山賢次譯 5	背徳者 石川浮譯 2	白秋舞踊詞集 北原白秋著 2	白秋國民歌謠集 北原白秋著 2	白秋空を仰ぐ土岐善磨著 2	自選童謡集 北原白秋著 2	自選野原の郭公 若山牧水著 2	自選規の木 窪田空穂著 2	自選人間往來 與論野晶子著 2	自選花 榎北原白秋著 3	自選立 春木下利玄著 2	自選海やまのあひ 羅 遥空著 4	自選松の芽 中村嘉吉著 2	自選川のほとり 古泉千樞著 2
信綱歌 集 佐々木信綱著 刊近	信綱歌話 佐々木信綱著 刊近	芭蕉遺語集 萩原井泉水校訂 3	茶七番日記(上卷) 萩原井泉水校訂 4	茶七番日記(下卷) 萩原井泉水校訂 4	おらが春 萩原井泉水校訂 刊近	蟻の生活 ノイテリック作 3	新花摘(文藝) 萩原井泉水校訂 2	愛すればこそ 谷崎潤一郎著 3	愛なき人々 谷崎潤一郎著 3	痴人の愛 谷崎潤一郎著 4	海上のへ島崎藤村著 5	屋上の土 古泉千樞著 5	寡婦マルタ オルゼシユコ著 3	句集 高瀬虚子著 6	井泉水句集 萩原井泉水著 5
サニ 一青年の告白 武林無想庵譯 6	一週 池谷信三郎譯 2	室生犀星詩集 室生犀星著 5	千家元鷹詩集 千家元鷹著 3	横瀬夜雨詩集 横瀬夜雨著 5	修禪寺物語 岡本綺堂著 3	少年の悲哀 岡本獨歩著 2	運命論者 岡本獨歩著 2	愛慾 武者小路實篤著 2	作者別萬葉全集 土岐善磨編著 6	作者別萬葉以後 土岐善磨編著 6	自傳 片山 澄著 3	日本橋泉 鏡花著 5	佛蘭西庭童話集(第一) ボームン夫人著 3	佛蘭西庭童話集(第二) ドルノア夫人著 5	佛蘭西庭童話集(第三) 長松英一譯 3

佛蘭西庭童話集(第四) 長松英一譯 刊近	新死の如く強し モオパッサン著 中村嘉吉譯 5	巴里の憂鬱 ボオドレエル著 三好達治譯 2	死の舞踏 ストリンベリイ著 山本有三譯 2	野性の呼聲 花岡健定譯 3	奈落の人々 和氣律次郎譯 3	争鬪 和氣律次郎譯 2	無名作家他廿(短篇小説篇) 菊池 寛著 5	出世 七篇(現代物) 菊池 寛著 4	恩讐の他廿(短篇小説) 菊池 寛著 5	彼方に七篇(現代物) 菊池 寛著 5	噂の發生他廿(短篇小説) 菊池 寛著 4	父歸る他廿(現代物) 菊池 寛著 5	藤十郎他廿(戯曲篇) 菊池 寛著 5	戀三篇(現代物) 菊池 寛著 5	眞珠夫人 菊池 寛著 6	慈悲心 鳥池 寛著 4	新珠 菊池 寛著 5	火華 菊池 寛著 4
受難 華池 寛著 5	赤い白鳥 菊池 寛著 3	明眸禍 菊池 寛著 5	新女性鑑 菊池 寛著 3	陸の人魚 菊池 寛著 4	第二の接吻 菊池 寛著 3	東京行進曲 菊池 寛著 3	結婚二重奏 菊池 寛著 3	不壞の白珠 菊池 寛著 3	二つの魂・餘計者 平井 肇著 2	勝利と敗北 シエストフ著 中山省三郎譯 3	肉體の悪魔 土井・小牧譯 3	この人を見よ ニエチエ著 小栗孝則譯 4	父と娘(他四篇) 武者小路實篤著 4	わしめ知(他十三篇) 武者小路實篤著 4	人生雜感(感想集) 武者小路實篤著 4	イブセン全集一 河野永田小寺譯 3		
イブセン全集二 大山長谷部 譯 5	イブセン全集三 中村 伸木譯 5	イブセン全集四 3	イブセン全集五 大山大關中村譯 5	イブセン全集六、七、八、九、十 刊近	イブセン全集 三矢 剛譯 4	キの手記 ル 神近市子譯 3	聖書物語(舊約) ル 神近市子譯 3	聖書物語(新約) ル 神近市子譯 3	洋服箏筒 トマス・マン著 六笠武生譯 2	今戸心 中 廣津柳 浪著 3	嬰兒殺し 山本有三著 3	芭蕉夜船・草の詩 吉田 敏二譯著 3	ドレフニス事件 大佛次郎著 3	新人國記 ア・フランス著 木村 恭一譯 4	シラー詩集 小栗孝則譯 版	どっこいおいらはト 木 達譯 2	獄窓 から和田久太郎著 5	

人	波	久一郎	3	
結婚の悲劇	アルワイ	久一郎	5	
苦難の路(上)	アルワイ	久一郎	4	
苦難の路(下)	アルワイ	久一郎	4	
芭蕉書簡集	萩原	月著	3	
草雙紙	尾崎	久編	5	
矢島柳	志賀	直哉著	2	
焚	志賀	直哉著	2	
老	志賀	直哉著	2	
網走まで	志賀	直哉著	2	
連夫の妹	志賀	直哉著	2	
好人物の夫婦	志賀	直哉著	2	
雪の	志賀	直哉著	2	
暗夜行路(前)	志賀	直哉著	3	
短歌集	石川	啄木著	4	
詩集	石川	啄木著	5	
小説集(上)	石川	啄木著	6	
小説集(下)	石川	啄木著	5	
評論感想集(上)	石川	啄木著	4	
評論感想集(下)	石川	啄木著	4	
書簡集(上)	石川	啄木著	5	
書簡集(下)	石川	啄木著	4	
チロルの谷間	石川	啄木著	4	
国歌	論	土岐善賢編	3	
三	人島崎	藤村著	3	
出新選秀歌百首	齋藤	茂吉著	3	
性に眼覚める頃	室生	犀星著	4	
多情佛心(前篇)	星見	淳著	3	
多情佛心(後篇)	星見	淳著	3	
苦の世	宇野	浩二著	3	
山戀	宇野	浩二著	4	
天保赤門	土師	清二著	5	
血染のパイプ	甲賀	三郎著	4	
平妖傳(上巻)	佐藤	春夫著	4	
平妖傳(下巻)	佐藤	春夫著	3	
都の	藤	春夫著	4	
自選短篇集	房	雄著	7	
斬るな	白井	喬二著	5	
大暴風雨時代	前田	河原一著	5	
浅草紅園	川端	康成著	5	
女性讚	他四篇	片岡謙兵著	5	
喧嘩	龍	長谷川伸著	5	
角兵衛物語	長谷川	伸著	5	
唐人	お吉	十一谷義三郎著	2	
時	の	唐人お吉	十一谷義三郎著	4
笑ふ男・笑ふ女	十一谷	義三郎著	5	
或る女(上巻)	有島	武郎著	4	
或る女(下巻)	有島	武郎著	3	
星座・生れ出	有島	武郎著	4	
有島武郎戯曲集	有島	武郎著	4	

有島武郎書簡集	有島	武郎著	5
有島武郎日記集	有島	武郎著	4
社會詩集	生田	春月著	5
戀愛詩集	生田	春月著	5
放浪	記	林 英美子著	5
彌太郎	笠子	母澤寛著	4
神變麝香猫(上巻)	吉川	英治著	4
神變麝香猫(下巻)	吉川	英治著	3
女	給	廣津和郎著	5
伊太利物語	平井	キキ著	5
闇の力・生ける屍	昇	トリスティ著	4
蟹工船	小林	多喜二著	4
不在地主	オルグ	小林多喜二著	4
宣言	クララ	の出家 有島武郎著	3
迷	路	有島武郎著	3
カインの末裔	潮霧	有島武郎著	2
お末の死	かんかん	有島武郎著	2
旅する心	有島	武郎著	2
小さな者へ	石川	啄木著	2
愛惜	はみ	な 有島武郎著	2
短篇	森	ふ 有島武郎著	2
感想	集	有島武郎著	2
俳諧續七部集	宇田	久校註	4
其角七部集	宇田	久校註	4
牧水歌集(一)	若山	牧水著	4
牧水紀行文集	若山	牧水著	4
明治大正詩史概観	北原	白秋著	4
長詩	魔	レルモンソフ著	3
詩	魔	レルモンソフ著	3
ア	短	羅集(五月)	3
貝殼追放(上巻)	水上	瀧太郎著	7
貝殼追放(下巻)	水上	瀧太郎著	7
葉鏡	葉	羅田容編著	4
新我等の心	中村	星淵著	4
牧水歌集(二)	若山	牧水著	4
牧水歌集(三)	若山	牧水著	4
好色一代男	神谷	龍作校註	5
チエーホフ傑作集	昇	チエーホフ著	4
人類文化史物語上	ウアン	ルーン著	5
人類文化史物語下	ウアン	ルーン著	5
青牛	集	古泉千樞著	5
葛西善藏小説集一	葛西	善藏著	3
葛西善藏小説集二	葛西	善藏著	3
葛西善藏小説集三	葛西	善藏著	4
葛西善藏小説集四	葛西	善藏著	4
葛西善藏小説集五	葛西	善藏著	3
葛西善藏小説集六	葛西	善藏著	3
葛西善藏感想集	葛西	善藏著	5
頼朝・爲朝	幸田	露伴著	3
幽秘記	幸田	露伴著	6
青年(上巻)	林	房雄著	4

青 年 (下卷) 林 房雄著 4	父 と 子 昇ツルゲノホフ著 6	静かなドン (二ノ三) 上田 浩 4
樋口一葉選集(三) 樋口一葉著 5	色ざんげ (他十篇) モウバツサン著 3	静かなドン (二ノ三) 上田 浩 4
シユロツフエン クライスト著 6	モウバツサン選集(二) 秋田 滋 3	征 服 者 マルロ オ著 3
シユタイン家の人々 沼野 修 6	死せる魂(上) 下永 融 3	新編シラー詩抄 小栗孝則 3
ヘルマン戦争 クライスト著 5	死せる魂(下) 下永 融 3	私は愛す アウデエンコ著 3
野蠻人達・敵・子供達 八住利雄 6	日記の中から 湯淺芳子 4	瀧 口 入 道 高山樗牛 2
どん底(他一篇) 昇 曜 夢 著 4	蕩兒歸る(他二篇) 菱山修 2	萬葉集略解(一) 加藤千鶴 2
私の大學・番人・初恋 藤原惟人 6	戀をしてみて(他二篇) 菱山修 2	萬葉集略解(二) 加藤千鶴 2
回 想 外村史郎 5	ブツデンプロ(一) トオマス・マン 4	萬葉集略解(三) 加藤千鶴 2
隨 筆 集 上 藤 進 4	ブツデンプロ(二) トオマス・マン 4	萬葉集略解(四) 加藤千鶴 2
折たく柴の記 新井白石 6	ブツデンプロ(三) トオマス・マン 4	萬葉集略解(五) 加藤千鶴 2
ホムブルクの公子 沼野 修 4	ブツデンプロ(四) トオマス・マン 4	(以下續刊)
ドイツ・冬物語 小堀 甚 4	オク家の人々(一) 吉良良吉 4	
チエルカツシユ(他七篇) 中村 白葉 6	オク家の人々(二) 吉良良吉 4	
潜水艇乗組員 中垣虎虎 3	オク家の人々(三) 吉良良吉 4	
妾の半生涯 福田 英子 4	小鳥を友として 木村 義 5	
	静かなドン (二ノ二) 上田 浩 4	

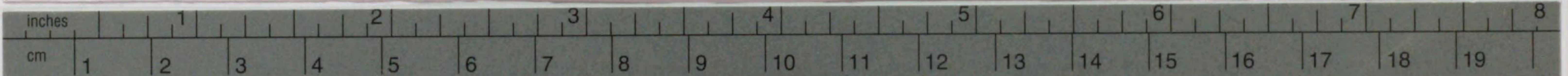


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

